
東方粹猫録

気楽な猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方粋猫録

【Nコード】

N8733R

【作者名】

気楽な猫

【あらすじ】

粋と女性をこよなく愛する一人の変人が東方世界に転生（?）。しかも人じゃなく猫又になっていた。腹は減る、かといって人を食う気にはならないし……。そうだ、股旅に出よう。ってなわけです。時には芸をして、時には妖怪助け。気楽に旅をしながらのほほんと生きていこうと決意した男の雄大（?）な物語が今、頼まれてもないのに勝手に始まる。「おいおい兄さん、女性に襲いかかるたあゝ粋じゃあねえなあ。……。おろすぞボケが。」

● 零歩目（前書き）

素人の拙作ですがよろしければご覧ください

零歩目

あるとても日差し強い日の正午、とある片田舎の山中で二つの影が動いていた。

一つは人のようだった。もう一つは……

「ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！」

……野犬だった。……それもものすごく飢えた。

グレートデーン種という犬だろうか、その体軀は子牛ほどもあるように見える。

一方追われている人かというと

「うーん、さすがに逃げ切れないかなあ。もともと足早いほうじゃないし」

なぜかものすごく冷静である。

もし追いつかれたらかみ殺されるかもしれないこの状況下で、だ。

「ま、逃げるの飽きたし追っ払うかねえ」

そう言う、前に出した足を軸に体を反転させ遠心力を乗せた掌底

を繰り出した

『掌底破！』

その一撃は今まさに飛び掛かんとしていた野犬をとらえ、弾き飛ばした

ただの掌底に名前を付けて放ったのは彼が『テイルズオブシリーズ』が大好きだからである。

それこそほぼすべての剣術・武術を模倣してしまうほどに。

「ギャインツ！！」

「おゝ怖かった、まあ弱いやつを殺すのは粹じゃないよなあ。ってなわけじゃないワンこそ」

「まったく無駄な体力使っちゃったなあ、はよ帰るか」

この男、ゲーム好きのただの平凡な大学生だが、少しだけ異常をはらんでいた。それは

【理解】

ただその一言が彼の特技であり長所だった。

理解すると言ったって難解な数式を見ただけで解いたり、世界中の言語を瞬く間に話せるようになったりするといったものではない。

彼が理解できるのは理^{ことわり}

理解したのは「自己^{おのれ}の役柄」

彼は幼き頃に劇の台本を知ってしまった

彼はその役を受け入れた

・・・・・・受け入れた？

「・・・帰る・・・ねえ。そしてまだ演じ続けにやなんのかなあ。
滑稽に」

「・・・！！・・・そうか、確かに滑稽だなあ。今更理解したのか俺」

「そう。この世界^{げき}は・・・- - - - -

」

一つの演目が終わり

舞台が変わり

また劇《世界》が始まる

● 歩目（後書き）

指摘等ありましたら受け付けます

零・五歩目（前書き）

ここまで2つはプロローグとなります

零・五歩目

- - - - -
- - - - -
- - - - -

黒い部屋に男が倒れている

「……………ん？」

目を覚ました男はあたりを見回したが、

「見事に何も無いな、いやそれよりここはどこだ？」

それこそ彼の頭が狂っていないければ先ほどまでは森にいたはずである。

だが現在彼がいる場所は壁もなく、天井もなく、床もなく、果てもない。

さっきまでも倒れていたというより漂っていたのかもしれない

「…ああ、死んだのか」

「唐突だったなあ、まあそんなものか」

彼は「独り」呟いた

「いやいや軽すぎだよ君」
「!？」

瞬きをした瞬間にいきなり目の前に少年が現れたら誰だって驚くだろう

だが彼はあまり動じてないように【演じ】た
すると少年はうれしそうに笑い、手をたたきながら
「うん、それでここに来れた　だ」と言った。

彼も口を開こうとしたらなぜか体が動かない。
続けて少年が再び喋り始める

「質問とかは面倒だから先に一通りしゃべらせてもらうよ」
「君は死んだわけじゃない。君は【理解】したからここに来た」
「ここは世界げきの管理室ぶたいうら」

「君の役は終わったのさ。君には感謝しているんだ、君が演じてくれたおかげで管理室こじしつも楽だったからね」

「君は自分の役と劇の真理。この二つを【理解】した」

「これはめったにない出来事だね、本来は役の終わった者たちは魂の輪廻を経て次の舞台上がってもらうのだけれど、君は特別にその魂のまま次の舞台上がらせてあげることになったんだ」

「今また【演じ】続けるのかって考えたでしょ？ところがどっこい！次の君の舞台には君の役は存在しない。そして台本も書かれていない。つまり自由なのさ！」

「君は何をしたい？何になりたい？もう演じなくていいんだよ!!」
少年は急に声を張りあげた。どうやら興奮しているようだ。

「あつと、ごめんごめん。ホントに珍しいことだから興奮しちゃってね」

「そうそう、厳密に言えば君が上がるのは舞台じゃない。っとこれは君ならすでに理解しているよね？」

「やっと俺の発言が許されたな。そっぴやもう演じなくていいのか？」

ようやく口を開いた彼は森にいた彼（役）とは雰囲気はかなり変わっていた。

どこか子供のような、無邪気な印象を与える青年がそこにいた。

「大丈夫だよ。さっきまでの君（役）は死んだから、君でいていいよ」

「そいつあ僥倖^{じやうじやう}。ところでどんなところに行くことになるんだ？」

「前の舞台で見たこともあるだろう『東方project』ってゲーム。そこさ」

少年は先ほど台本の書かれていない世界に行くと言った。しかし今度はゲームの世界に行くという。

ゲームの世界ならすでに台本が決まっているはずだろう。と彼は思わなかった

・・・・・・・・・・・・・・・・

それからしばらく時がたち、初めて直接顔を合わせた父子は

「親父殿ー！！酒たんねえぞー！！」

「よし任せる！！・・・むんっ！」

「おお！？酒が出た！？すげえな親父殿！！」

・・・・・・・・酒盛りしていた

見た目少年の青年が見た目50のおっさんと飲む姿はなかなかシ
ュールであつたという

5時間後

「あゝ、ん？そうだ親父殿。なんか次の世界に行かなきゃなん
ねえんじゃね？のかい？」

「・・・・・・・・・・」

すでに周囲に酒瓶は山となっている

「親父殿？」

[illegible]
$$\begin{array}{c} \neg \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{array}$$

「起きんかじじい!!」

「鷹爪猛襲脚!!」

こんな時も技名を叫ぶあたりに、彼のこだわりを感じる
ZUN!!!!

「ぐっはあ!？」

「起きたか？そしたら次の世界の説明プリーズ」

「うん？あ、ああ、わかった。お、腰イテエ」

にしてもこいつら馴染みすぎである、思わずナレーションの口調も荒くなるほどに

「ええー、それでは次の世界の説明とともに前の世界の説明もさせていただきます」

「お」パチパチパチ

「箇条書きで」

!?

前の世界

- ・オレ（親父）の書いた本の世界
- ・本の住民は誰もそれを知らない
- ・極稀に真理に気付く者がいるが普通は本に消去される
- ・本の住人がゲームと思っているものの多くは外の世界の現実
- ・オレ（親父）は実は最高神

次（東方）の世界

- ・特に関与しなければゲームのように歴史が進む
- ・博麗大結界は確実に作られる
- ・息子の能力は『理解する程度の能力』
- ・サービスで2つまで願いを叶えてア・ゲ・ル
キュツキュツ

「以上だ」

親父殿（最高神らしい）は創り出したホワイトボードにマッキーで書き青年にドヤ顔をしてきた

「いやいやいや、本に消去されるってなんだ消去って！！危なかったなオレ！！」

青年はかなり冷や汗をかいていた
それも当然か。下手したら自分が消えていたのだ

「うむ、普通は世界の真理に気付いたものは己の役を放棄してしまうため世界に存在を否定されてしまうのだ。だがお前は役割を知ってなおその通りに演じ続けた。だから世界もお前を否定しなかった

のだ。」

最高神は腕を組みつつ言った

「なんでのだの言い出したんだ？」

「ちよつとは威厳が出るかと思つて」

『れっそうしゅう
裂想蹴！！』

ゴッ！！

「えゝゝつと、願いを二つまで叶えてくれんだよな？」

「ああ！究極の魔力でも最強の肉体でもいいぞ！！」

「なら『理解する程度の能力』を消してくれ」

「そうかそうか能力を・・・つてええ！？消すの！？なんで！？」

最高神（笑）は心底驚いたような表情で聞いてきた

しかし、青年は

「だって、みんな理解したらつまんなそうじゃん」
とあっけらかんと言いつつ放った

「・・・・・・・・クツ」

「ん？」

「あつはつはつはつは！面白くないと来たか！だが本当にいいのか？この能力を使いこなせば相手の能力を【理解】し、相手の思考を【理解】し、相手の倒し方を【理解】できる。まさにチートな能力だぞ？」

「そんなん聞いたらなおさらいらねえよ」

青年は本当に興味なさげに言い放った
耳くそと鼻くそを同時にほじりながら

「wwwwwwwwww話聞く態度じゃねえwww。なおさら気に入ったwwwwwwよっしゃ、これは無料にしといたるよ。あと二つ願いを言いなさい」

青年は少し考えたのちに答えた

「それじゃあ『必要な力を生み出す程度の能力』をくれ。あとティルズオブシリーズの知識を保有して生まれたい」

「む？『必要な力を生み出す程度の能力』とはどういったものだい？」

「文章を作って使う能力だな、たとえば『不老になるのに必要な力』を生み出したりだ」

青年は淡々と説明するが

「・・・そっちのがよつぽどチートじゃないか、かまわないけど『神になる』のと『不死になる』のと『生命を創る・蘇らせる』のは禁止させてもらうよ。それと生まれたいのかい？その姿で記憶もそのままで送れるけど？」

「いんや、やはり生まれなおしたい。ほかの記憶は消しちまってかまわんよ」

最高神（笑）は少し悩んだが

「よし、わかったその通りにしよう。・・・本当に構わないだね？」
と、聞いてきた

青年は間髪入れずに

「頼む」

とだけ返した

それからすぐに青年を東方世界に送るため最高神は姿を消そうとした

しかし、そのまえに青年が聞いた

「なあ、親父殿？なんであんたはこんな良くしてくれたんだ？普通に無責任に放り出してもよかったんじゃないか？」

最高神は一瞬きよとした顔になったが、すぐに微笑みながら言った

「君は前の世界で自分を殺し続けていつもつまらなさそうにしてたからね、ほっておけなかったのさ。本の世界の子たちもほかの世界

の子たちも僕にとってはみんな大切な子供さ、できるだけみんなに幸せになってほしいんだよ」

じゃあね、目をつぶって祈ればすぐに送るよ

そう言い残し最高神は少年の姿に戻り、消えた

独りになった黒い世界で青年は嬉しそうに笑い、ポケットから「粹」と描かれた扇子を出し、それを広げ願った

次の俺、粹に歩め。あらゆる乙女を笑顔にしろ。そしてせいぜい

楽しめよ!!

パシッ！

扇子を閉じる音が響いた後

黒い世界には

何もなかった

零・五歩目（後書き）

ご意見ご感想などありましたらお願いいたします

キャラ設定（前書き）

キャラ設定になりますがこの二人はもう出てこないと思います

キャラ設定

プロフィール：プロローグ編

主人公

性別：男

年齢：21歳

身長：180センチ

体重：80キロ

体格：平均的（筋肉質なため）

外見：黒髪の短髪に開いているのかわからない黒目

趣味：歌

特技：ゲームの技の模倣

あるとき自分の役柄を知ってしまった青年。

その頃彼は少年といえる若さだったが、その役を死ぬまで演じ切るのが粹だと思いそれから本心からの行動を起こさなかった。

しかし近年その生活に楽しみを見いだせなくなり無気力になってきていた。

本来の性格は気まぐれで猫のように機嫌が変わる、【粹^{いき}】と【女性】をこよなく愛する変人・変態である。

彼が演じていた役割は【物語の主人公の友人】

彼は脇役であり、決して自分に光が当たらないことを【理解】していた

そのため可能な限り目立たぬよう地味に物語の主人公を支えてきたが、それは窮屈だった。

最初彼が山にいたのは人がいなければ役割を多少は忘れられるから

だった。

ちなみに常識を逸脱した強さを持っていたが「そういうのは物語の主人公の役割だな」と思ったため、それを知る人はほぼいなかった。

彼が転生を望んだのは次の世界を本心から楽しみたいがためである
そのため自分の魂で生まれかわることを選んだ

最高神（親父殿）

性別：男

年齢：？歳

身長：130センチ

体重：30キロ

体格：小柄

外見：黒の長髪に碧眼

趣味：世界の創造

特技：物質の創造

青年が生きていた物語の創造主

少年の姿がもとの姿で、おっさん化したのはそのほうが父親らしいから

青年を脇役とした物語を創造かいてしていたのだが、青年が役を自ら演じはじめたところから物語の主人公よりも気に入っていた。

あるとき青年が【本の中の世界の真理】に気付いたのを結末に、彼

の役の出番を終わらせ彼を本から出すことを決めた

世界設定

青年が生活していたのは本に書かれた世界であり、最高神が執筆していた作品である。

現代地球そのままの世界だったがそれは虚構だった。

世界の住人は自分たちが支配次元の存在であると思っていたが、その実支配されている側であった。

ゲームや小説だと思っている世界こそが上元世界であり、そちらが【現実】と言われる世界だった。

世界は無数にありそれを行き来することは本来不可能だが最高神にだけその権限がある。

青年が送られた世界は最高神が新たに作り直した東方世界であり、始まったばかりの世界である。

よって青年の行動次第で全く違う未来が作り出されることとなる。

しかし世界が不安定になる可能性があるので旧作の事象は起きないようになっている。

キャラ設定（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いします

一歩目（前書き）

今回からが本編です

一歩目

- - - - -
- - - - -
- - - - -

世界のとある地に荒野があつた

その大地は赤黒く

何かが折り重なってできていた

数多の妖怪と数多の人間の血と肉と骨と呪詛が

その荒野には満ちていた

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「あれまゝ、これは誰も生きてないかな？」

こりゃひどいな、とてもこないだまで草原だったとは思えないね。あぁ、いきなり申し訳ない。自己紹介をしなくちゃね。オレは猫又のマタタビ、齢は十になるよ。

つとそんなことはどうでもいいか。この地獄絵図だけどなんだか戦争が起きちまったみたいなんだよね。

えゝゝゝゝつと？たしか人間が月に移住するとか言つてほとんどいなくなっちゃつて、残された人間が「妖怪は存在しちやいけな、全部殺しちまおう」みたいなことを言い始めてそれに対して妖怪も「人がいなくなっちゃった、早くくわねえと飢え死にしちまう」とか言つてたがいにかつていつの間にか戦争になったのかな？

俺も妖怪だらうつて話なんだけどこうみえて妖怪歴はまだ1日目なんだよね、これが。

十日ほど前になんかやたら眠いなゝと思つて山裾に穴掘つて寝に入つただけど、起きてみたら尻尾が二本に増えてるわ妖力みたいのが湧いてるわ能力に目覚めてるわ。

目線が高くなつてゐるのには驚いたね「あれ？成長した？」つて呟いちまったし、しかもその言葉が人の言葉だったからまたびっくりだ。人の姿になってみたら、もとより細かった目がなおさら細くなつちまつてて池で自分の顔見てみたときに「目え開いてんのか？」つて思つたからなあ。

おっと、また話がそれちまったね。それで人里のほうに歩いてきてみたらこれだよ。向こうのほうには元人里のモノっぽい瓦礫も見えるし、さっきから動くやつは一人もいない。

「まったく、戦争なんて粹じゃないことすつからこんなことになるんだよ。バカだねえ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

おや？

「【粹】……………か、そうだな。うん。粹じゃない」

ふと口から出たんだがいいねえ、粹。

「そうだね、オレは粹に生きよう……ってこれじゃダジャレだな。……進む……過ぐす……歩く。うん、そうだ粹に歩こう!!」

よしよし猫生ひゃうせい(いや猫又だから妖生か?) 目標もできたし、とりあえずは

「さつきから死骸に隠れてこそ狙うなんて粹じゃない真似してるやつを殺そうか」

「「!?!?!」」

「……いつから気が付いていた？」

人間が三人か。こいつは少し豪華な格好してるしこいつが長かな?……にしても

「全員野郎かよ……ハア……」

「「なつ!?!」」

「貴様俺らをバカにしてるのか!?!」

「薄汚い妖怪のくせに!!」

簡単にキれるなよ……うるさいな……何より血まみれで服もボロボロなお前らよりは薄汚くないと思うが?」

「「!!ツ貴様あ!!!!」」

「冷静にならんか!!馬鹿者が!!」

「「!？」」

おゝさすがに冷静だね。でもそのこっちを見下した目はむかつくねえ

「見たところ君は猫又だな？どうかおとなしく我らに殺されてくれないか？」

「そう言われてはいどうぞって言うわきゃねえだろ？そっちこそオレはなんもしないからさっさと月へでもどこでも行っちゃってくんねえかな？」

だって野郎の相手は嫌だし

「申し訳ないがそれは無理だ。我らにはすべての妖怪を殺しつくすという使命がある。どうやって生き延びたか知らないがおそらく君が最後の一匹だろう。君を殺せば我らの使命は終わる」

「こっちこそ無理だ。オレはこれから長生きしなきゃいけない気がするんでね」

おもに運命的な感じで

「・・・・・・まあいい、どちらにせよすることは変わらない。私の能力は『見切る程度の能力』、君みたいな雑魚程度が逃げ切れるとは思わないことだ」

チャキツカチャカチャッ

三人とも武器は銃か・・・・・・あれってたしか先端から金属の塊が出るんだよね・・・・・・それじゃあ

『グレイブ』

マタタビが小さく唱えると硬い岩盤が地面から飛び出し、マタタビ

を守るように周囲を覆った

「!?!? なったんだそれは!?!? 貴様能力持ちなのか!?!?」

冥途の土産に教えてあげますかね、オレの能力は

「『必要な力を生み出す程度の能力』だ」

『天光満ところに我はあり、黄泉の門開くところ汝あり、出でよ神の雷』

「クツ逃げ「遅い」

- - - - - インディグネーション - - - - -

ズッガ――――ン!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

雷が消え土煙が去った後にあったのは絶命した三人の人間とクレーター、そして

パタッ

・ ・ ・ ・ ・
妖力切れ + 轟音により失神した一匹の猫又だけであ
った

一歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたら受け付けます

二歩目

「・・・・・・・・・・・・・・・・んあ？・・・・・・・・あれ？
ここどこ？」

真っ暗だな、寝てる間に夜になっちまったのか？ってかなんでオレ寝てたんだ？んゝっと、こんな時は今朝起きてからの行動を一通り振り返ってみるか。

穴の中で起きる 外に出る 妖怪になつてた 湖に行く 目え細つとりあえず里のほうに行つてみよう あたりに死体だらけ 戦争が終わつてたのを確認 妖生目標を設計 人間と遭遇 初めて能力を使う 今

・・・・・・・・あぁ、気絶してたのか。ってことは

『幻竜拳！！』

ゴガッ！！

「よし出られた出られた・・・・・・・・ってなんだこの穴は！？」

グレイブで作った盾から出てみたらめっちゃくちゃでかい穴ができてるし！？もしかしてこれオレのインディグネイションでできたのか？穴の端のほうでさっきの人間どもが死んでいるみたいだし。まあ・・・・・・・・なんていうか・・・・・・・・

「こんだけの出力出したら妖力切れにもなるよな、そりゃ」

たかだか一・二回の攻撃で毎回ぶつ倒れてたら話にならないし少しは能力の使い方の修行もしなきゃならないかな？修行自体は好きだから構わないけど・・・・・・・・あれ？オレ修行なんてし

たことないのに何で好きとか言ってるんだ？

よくよく考えてみたらさつきも自然と技の名前を叫んでたし、その前も知らなかったはずの妖術（？）を唱えてたし………
・どうなってるんだ？オレ。

「ん~~~~~~~~。ま、わからんこと考えても時間の無駄だよな」

そんなことしてる暇があったらさつきと修行だ修行！とはいってもこの死体をそのままほいたらかしにしていくのも粋じゃないよな。

ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、チーン

！！

「そうだ、死体の処理を能力できるようにすれば修行もできて死体も片づけられるな」

そつと決まったら早速お掃除開始だぜ

.....

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっとな終わった」

「それよりもわかったことがあるのだが……」

「オレの能力燃費悪すぎだろ……マジで。」

『上級妖術に必要な力を生み出した時の妖力消費量』 Ⅱ 『初級妖術に必要な力を生み出した時の妖力消費量』 > > > > > > > > >
> > 『妖力を使った肉体強化の妖力消費量』 > 『妖力を使った飛行の妖力消費量』 ってかんじだな。

まあ何度も妖力切れ 回復のサイクルを繰り返したおかげで多少は妖力も増えたが、それでも二回で妖力が切れてしまう。察するにこの能力は使う際に妖力を一定量使用するのではなく、全妖力の中

から一定の割合を使用するみたいだ。今は一度に約五割の消費量つてとこか。

「使い込めば消費の割合も減ってくのかねえ。そうでなきゃ使いずらいったらありやしない」

それもおいおいわかっていくかな？

グウ

「あゝ、腹減ったな。飯でもとつてくるか」
ポフンッ

猫の姿に変わり歩き始める。そういえばいつのまにか人型と猫型の使い分けもできるようになっていた。それとなぜか猫型の時に満腹になれば、人型に戻っても腹がふくれていることに気が付いた。胃の容量とかかなり違うと思うのだが……まあ便利だから気にしないことにした。

「今日は川で魚でも取るか……いやいや鳥かな？でもたまにはウサギなんかも捨てがたいし……」

ぶつぶつ呟きながら歩いてく黒猫は己のことながら珍妙な光景だろう。

.....

「ん、満腹満腹」

ネズミを四匹ほど平らげてやつと腹が落ち着いた。そういえばなのだが、オレは妖怪になったのにまったく人食の欲求がわいてこないのだ。死体を運んでいるときも別に食欲はわかなかったし……まあ死体だったからかもしれないが。

腹も満たされたところでこれからの予定を考えることにしたのだが……

「死体の片付けも終わったしこれからはずっと修行かねえ」

そう、まったく用事がないのだ。人間は全部なくなっちゃったし、オレ以外の妖怪もみんな死んじまった。もともと仲のいい相手もあまりいなかったし悲しかったりはしないのだが、なによりも

「暇だ!!!!」

一人では本当に修行くらいしかやることがないではないか!!まあ人間もしばらくしたらまた現れるだろうし、妖怪も人間が増えてきたらまた湧いてくるだろう。それまで何十年か何百年か知らんけど寂しいだけだ。修行したりしていればまたすぐにぎやかになるだろう。

……そういえばあの人間は無事なんだろうか？人里にいたところによく飯をくれたんだよね。ほかの人間はどうでもいいがあの嬢ちゃんは無事だといいな。うん。まあ生きていたとしても二度と会うことはないだろうけどね。

「……さつてと!!やるとなったら即行動!!修行だ修行!!」

うん、今はいらんこと考えてないでひたすら修行だ!粹にふるまうには強さと余裕も必要だからな。よし!そうと決まればさっそく

技の型からだ。まずは・・・

このころのオレはまだその修行が億年単位で続くことになるとは気づいていなかった。

二 歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします

三歩目

ご覧の皆様お久しぶり、猫又のマタタビです

……ん？別に久しぶりでもないって？いやいやこつちからすれば久しぶりなんだよ。だって修業を始めたところから一億五千万？くらい経ってるし、細かくはもはや数えてないから忘れたけど。

まあ、なんでそんなに音沙汰なかったかと言えば、面白いことが全くなかったからというほかがないね。ホントに。修行中に会った存在と言えば妖精・神・妖獣・天人くらいのもだったからね。

でも一応簡潔にそれぞれとの出会いやなれそめを話すとしてしましうか。

まずは妖精だ。こいつらは自然の権化と言える存在でそれこそどこにでもいる、よってどこに行っても見かけるのでもはやいるのが日常みたいになってしまっている。

その姿は大概羽の生えた少女（ここ重要）のためオレの癒しになっているが、総じて頭があまり良くないため悪い人間にさらわれたりしないか結構心配だったりする。

次に神だ。彼らは修業を始めて余りたたないうちに会うようになった、とはいっても数千年に一度程度しか会わなかったが。何柱か

はオレの能力の危険性を注視しオレを消そうとしてきたが、オレの性格を知ると呆れたように帰って行った。まったく失敬な。

神も多くが見目麗しい女性で巨乳率が高く（ここ重要）いい目の保養をさせていた。胸見てるのばれて何度か殺されかけたが。

さて次の妖獣だが彼女の印象はとても強い。名を因幡おおくにぬしのかみてゐと言い、大国主神（珍しく男の神）から更生してやってほしいと任されたのだが何を思ったか出会いがしらに股間を蹴り上げられた。女の子じゃないければ微塵に砕いていたところだ。本気で。

どうも彼女はそのいたずら好きが過ぎて殺されかけたところを大国主神に助けられたらしいが、それでもいたずらをやめる気は毛頭なく困った大国主神がオレに押し付けたいらしい。あのイケメンいつか斬る。

まあ最初こそオレにさまざまないたずらを仕掛けてきた彼女だが、オレがそれに快感を感じていることを知ると恐怖の権化を見るかのような目をした後もうオレにはいたずらをしないと云ってきた。あの眼にはゾクツときたね。

そんな彼女とも最終的には打ち解け互いに「因幡の」、「兄貴あにき」と呼び合うようになった。八百年ほど前に「ちよつと神様落とし穴にはめてくる」って言って出て行って以来会ってないけどね。

その姿はまさに幼女といったもので、あの抱き心地はなかなか良いものだった。いや、性的には手を出してないよ？だってオレ紳士だもん。

最後に天人だがこいつらは『バカ』だった。以上。

………え？だめ？わかったちゃんと言うよ。

最初に会ったのは因幡のと会うより少し前だったな。オレが山頂からいい気分で麓を見ていたらいきなり「珍しい猫がいる、連れ帰ってペットにしよう」とか言いながら後ろからキモイオッサンが抱き着いてきたんだ。驚いて『修羅閻獄殺』しゅらえんごくやっかましたのに生きてたのはまた驚いたが。

それ以来たびたび「三味線にしよう」だの「猫鍋に」だの「生涯の友に」だの言ってさらおうとしてくるから、見たら速攻で殴り飛ばすことにしている。

なぜかいまだに男しか見たことがない。無念！！

まあ会った奴らと言えばそのくらいだね。それ以外では基本的に修行するか武器を作るかしていたから会っていない。

そうそう、修行に関してもさすがに億単位で続けてれば能力をほぼ使いこなすことに成功している。いくつか応用もできるようになったのでそれに関しては実際に使う時が来たら説明するよ。

それと久しぶりに話し始めた理由なんだけど、気づいた人もいるかもしれないけれど最近人間がまた増えてきたんだよね。それで集落も見かけるようになってそろそろ面白いことが起きそうな気がしたんだよ。ということ、また何か起きたら会おうや。

それでは、また次の機会に。

三歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします

四歩目

皆様こんにちは、猫又のマタタビです。

以前語りかけたころ時から何千年経ったかねえ？長く生きてると時間の感覚があいまいになってくるね、ほんとに。

これまでの間は以前みたいに修行したり、順調に数の増えてきた人間の文明に混じって生活していたのさ。時には種族を偽って人間として生活してみたり、時には何の因果か神として祭り上げられたりとね。

そんでもってここ何百年かはオレの生まれ育った島国を拠点としているのだけど

「とつぜんですが緊急事態です。そうあれは半刻ほど前……」

ただ今人里を猫の姿で練り歩いております。あ、二本目のしつぽと妖力はかくして普通の猫としてふるまってるよ。さすがに里に妖怪が入っていると知られたら騒ぎになってしまっただろうからね。それにしてもだ

「やっぱり女性に撫でられるのは気持ちいいね、あつそこそこ」

素晴らしいことに猫の姿は里の女子供に大人気だったんだよ。それこそ餌はもらえるわ撫でてもらえるわ抱っこしてもらえるわ……。ん？妖怪としてのプライド？そんなもんとうの昔に捨てたつての。

にしてもこの里は平和みたいだね、人間もみんな油断しまくってるし。最近は結構妖怪も見erようになったつてのにこんなので平気なのか？……。つと言ったところで見つけちゃったよ。将来有望そうな女の子の体に白い蛇みたいなのが絡まってやがる。女の子の顔色も悪いし……。呪いの類か？

「まあとりあえず……。散れ」

周りの人に気が付かれないように蛇に向かって猫パンチ。白い蛇は霧散し女の子の顔色も良くなったみたいんだけど……。あたりの地面からたくさん白い蛇やらカエルやらがたくさん湧いてきました。あれ？なんかオレ目つけられた？周りの人間には何ともないみたいだし。

……。あつ、一斉に飛び掛かってきた。なんか捕まるのもまずそうだし

「おさらば!!」

「ごめんな少年少女淑女たち！野郎はどうでもいいや。また今度遊びに来るから！とりあえず人里から離れるべ！」

「と言った感じで現在山の中なのだが……」

「こいつら……さすがに多くない？」

それはもうあたりにうじゃうじゃわらわらと、さすがにこれだけいると気持ちが悪い。それとこれだけ集まってようやく分かったのだがこいつら神気を保有しているのだ。つまり

「オレ、神様にケンカ売った？」

「わかってるじゃないか、三下が」

side??

まったく、今期の捧げものにつけていたミシャグジ様が消された
って言うから来てみたんだけどゴミみたいな妖力しか持たない化け
猫じゃないか。まあそれでも暇つぶしくらいにはなるかな。

「オレ、神様にケンカ売った？」

へえ、神気の有る無しくらいはわかるのか。ただの木端妖怪って
わけじゃなさそうだね

「わかってるじゃないか、三下が」

さて、せっかく私自ら出てきたんだ、ちょっとは楽しませておく
れよ。

「わかってるならこれからどうなるかも気づいているだろう？」

sideマタタビ

「わかってるならこれからどうなるかも気づいているだろう?」

あつちやく神にケンカ売っちまったか。神ってプライド高いのが多いから刺激すると面倒なんだよね。逃げちゃおっか?

「いえいえ何のことが皆目見当もつきません。オレみたいな雑魚妖怪が神様にわざわざケンカ売るなんて真似するはずがありません。こんな化け猫一匹にあなたのお時間を取らせることもありません、ってなわけで見逃してもらえませんか?」

こんなことしてるより女子供と戯れたいんだよね。真剣に。

「謙遜することはないよ、神気を感じれるってことは多少の心得はあるんだろ? 私と戦って満足させることができたから見逃してやつてもいいよ」

.....? 私? それになんとか声がいやに高いしもしかして.....
.....
「あんだ、幼女か?」

ブチッ!!

あれ？なんか今聞こえるはずのない音が聞こえた気がするな。神からのプレッシャーみたいなのであたりの木が軋んでるし、もしかして怒らせた？

「いやいや落ち着いてください、まだ姿は見えない幼女神さん。俺なんか怒らせること言いました？」

覚えは全くないんだけど

「・・・・・・・・・・・・・・・・幼女って・・・・・・・・・・ん？」

「幼女って言うなー・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

おお、地面が割れていきなり幼女が出てきた

「なんでお前は姿も見えていないのに私の外見を断定したんだよ！？悔しいことに合ってるし！悪いか！？神のくせにこんなに貧相な体つきで悪いか！？こないだも他国の神から『神なのに貧乳wwwwwwwwwwww』とか笑われたし！私だって神である前に一人の女の子なんだよ！？自分の体について悩んでいたりする乙女なんだよ！？それをあんたら幼女だ貧乳だってバカにして！！もう怒った！！あんたもこないだの神みたくぼこぼこにしてやる！！」

ふむ。つまりは幼女とバカにされたから怒っている、と。ならば
言わせてもらおう

「否。^{いな}否否否否否否否断じて否！……！」

ビクッ

「バカになどするはずもなかるうが！！むしろ幼女にバカにする
要素など一つとして有りはしない！！まずはその瞳！大人よりもつ
ぶらな瞳は強く輝きまるで宝石のように世の男どもを魅了する！！
次に首筋！まだ鎖骨が目立つようになってはいないがむしろそれが
いい！！そそる！！そして胸！貧乳？違う違うぞ！！その胸は貧し
いではなく品があるのだ！！つまり品乳！！そのなだらかなライ
ンを見てしまったらどんな巨乳派もあの胸は脂肪の塊とは思えな
くなるだろう！！さらに腰！くびれないその胸から尻にかけての
ライン、これを見逃せるはずもない！！これがあるからこそ他がさ
らに映えるのだ！！ついに尻！それは動きを阻害することが無きよ
うとても小ぶり、しかしそのハリはまさに幼女なればこそその超反発
！！まさに魅惑の果実！！お次は身長！屈むことによりようやく目
を合わせられるその体軀はいやがおうにも庇護欲をそえられる！こ
ちらを見上げる姿もキュート！ついには手足！ぷにぷにとした手触
りのそれは傷付いたことなど無いであろうまさに芸術！！これから
も彼女らのそれが傷付かぬように前途の道を切り開くことこそ我ら
紳士の務め！！まだまだ語り足りないがこれでバカにしていな
いことはわかってもらえたか？」

それこそあと四、五時間は語れるのだがさすがにやめておこう。

．．．．．あれ？なんか怒ってる感じはなくなっただけ、こんどは軽蔑三割・恐怖二割・警戒四割・その他一割みたいな表情でこっちを見てるな。なんで？

「．．．．．あんだ、妖力隠してたんだ」

あ、そっち？確かに熱くなりすぎていつの間にか人型＋妖力解放しちゃってるね。そのおかげで相手が見上げるような視線になって可愛さ五割増しになってるね。

「この国の王としてあんたみたいな変態の大妖怪を野放しにしておくわけにはいかない、悪いけど本気で消させてもらうよ」

変態か．．．．あまり否定はできないが

「言わせてもらおう、変態であると同時に紳士である」
「黙れ変態」

「（．．．）シヨボン」

言わせてくれたっていいじゃないか

「ぐだぐだ言っていないでさっさとやるよ。洩矢の国王にして土着神が一柱、洩矢諏訪子。消される相手の名前くらいは知っておきなよ」

なんかもはや戦いは避けられない雰囲気だね、でも女の子を傷つ

けるのは粹じゃないし適当に鎮圧して説得しよう。うんそうしよう。
ついでに抱っこしてもいいか聞いてみよう。

さて、それでは

「猫又のマタタビ、粹に歩むさ」
戦闘開始だ

四歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありがとうございましたらお願いします

五歩目

はてさて、戦闘開始とは言ったもののこつも周囲が敵だらけだといつ攻撃されるかわからんね。とりあえずこの蛇どもを蹴散らすとするか。

使う武器は右腰に携えた変形弓。名は『ディヴァインキャノン』
妖力流して能力発動。

「光の花、咲いて開いて目眩まし」

『ヴァンジーロスト!!』

カッ!!!

お次の武器は左腰に携えた刀。名は『デイスインテグレイト』
も一度妖力流して能力発動。

『砕陣^{さいじん}霊^{れい}臥^が!』精神波で手元に引き寄せ
『裂空^{れつくう}刃^{じん}!』剣撃による真空波で切り刻み
『魔王^{まおう}炎^{えん}撃^{げき}波^は!!』燃やし尽くして一丁上がり。

よし、蛇どもは消えたしあとは嬢ちゃんだけだね。そうそう、先に聞いておかないと。

「痛いけど誇りは守れる負け方と、痛くないけど誇りは傷つけられる負け方。どっちが良いさね? あ、ちなみに殺しはしないからご安心を」

女性を傷つけるのは結構興奮するんだけど、後々申し訳ない気分

になるからあまりやりたくないんだよね。

「なっ！？バカにするな！あんたなんかに負けるわけがないだろう
！！」

洩矢の（というらしい）は怒った表情で言い返してきた。あれま、
自信過剰。ここはひとつ教育してあげようかな？授業料は強制抱っ
こ二日間で。それでは
「そう思うなら、全力で来な！」

S i d e o u t

- - - - -
- - - - -

先に動いたのは諏訪子だった

「ミシャグジ様っ！！」

まだ残っていたミシャグジ様をマタタビに向かわせ、自信も最新の
兵器である鉄を使った輪を取り出し投げつける。

それに対しマタタビはその場から動かず、また避けようとしなか
った。

（バカが！さっきの変な妖術と技には驚いたけど所詮は妖怪、これ
で終わりだ！）

諏訪子はそんなマタタビを見てすでに勝利を確信していた……

・・・が。

『裂震虎砲！！』
れっしんこほう

ゴウッ！！

「何っ！？」

マタタビが刀を持った手を突き出しながら放った、獅子の形をした闘気にすべて吹き飛ばされたのを見て驚愕した。

「立ち止まっていいのかい？災害警報、お住まいの地域は荒れ模様」

『テンペスト！！』

マタタビが唱え終わるのとほぼ同時に諏訪子の周囲に竜巻が、頭上からは落雷が発生した。

「くっ！これしき！」

落雷をかわし竜巻の外に飛び出した諏訪子の足元には一本の矢が刺さっている。

「足元注意だ」

「何っ！？まさか！」

ボンッ！！

諏訪子がそこから飛びのいた瞬間に足元の矢は爆発した。

「休ませないぜ？カチカチツルツルピキピキドカーン？」

『インヴェルノ！！』

「くっ！」

ガキンッ！！

今度は諏訪子が立っていた周囲が一瞬で凍りついた。しかし諏訪子はそれをかわし空中に浮かびだした。

「まだまだ、いつも心はピンク色、喰らえ恋心」

『アリーヴェデルチ！！』

諏訪子の下の地面からピンク色の突風が一気に吹き上げてくる。

「こんなものっ！」

諏訪子は上昇し、術の範囲から逃れようとするが

「頭上にもご注意を」

「ッ！なんだと！？」

まるで諏訪子が上に逃げるのを読んでいたかのように真上から矢が降ってくる

キンキンッ！

新たに鉄の輪をだし、それで矢をはじいて諏訪子は叫ぶ

「調子に乗るんじゃないよ！！妖怪風情が！！」

諏訪子の怒りに呼応するように一気にあふれ出る神気が増すが・・・

「妖怪風情をなめるなよ？」

『葬刃』
『そうじん』

シュンッ！

マタビが鋭く刀を抜き放ち、振り、収める。居合と呼ばれる技を行った瞬間鉄の輪は切り落とされる。互いの距離は離れているにもかかわらず。

「！？」

（いったいなんなんだあいつの術は！？あんなのは見たことも聞いたこともないうえに一つ一つが強力すぎる！もうこっちも出し惜しみしている場合じゃない！）

諏訪子はこれまで使っていなかった自分の能力

『坤を生み出す程度の能力』

を発動させた。それに応じて地面がうなり、マタビを押しつぶすように地面が激しく動き始めた。

「あれま、こいつはちょっとまずいかも・・・」

バクンッ！！

（よしっ！今度こそ仕留めた！！）

諏訪子は心の内で喜ぶが・・・

「なぐんつって。そんなぐらいじゃまだ甘いよ」

『きょくわんげ極光蓮華！』

ガガガガッ！

唐突に頭上に現れたマタタビ、否、マタタビの姿をした四つの影に地面にたたき落とされる。

「あうつ・・・くそ、負けるわけには・・・！！」

地に伏せる諏訪子はそれでも抵抗し霊弾、それこそ神が必死になつて放っているのだから一つ一つが並みの妖怪なら跡形も残らないような威力のものを十重二十重と放つ。

しかし、マタタビはそれすらも何の苦も無く

『じゃれいっせん邪霊一閃！』

文字通り一閃して切り裂いた

- - - - -
- - - - -
Sideマタタビ

うんうん、こいつぁ驚いた。確かに己の強さに自信を持つだけのことはある。これまで戦った神の中でもそれなりの強さだ。まあさすがに主神クラスには遠く及ばないが。

それでもあの表情を見るにもう切れる手札はないのかな？それならそろそろ幕引きと行きますか。

.....あつ、そういえば能力に関して説明するの忘れてたね。

オレの能力は昔と変わらず
『必要な力を生み出す程度の能力』
燃費は多少良くなって一回の発動に全妖力の約三割消費ってところかな？それでもさつきみたいな戦い方してたらすぐに妖力が切れちゃう。ってなわけでいろいろ試してみた結果、オレの能力はあることができるのに気付いたのさ。

それは『物質への能力貼り付け』だ。

さっきの戦闘中はこれを使ってディヴァインキャノンには『^{イウン}虚構の兵士を再現するのに必要な力』を、ディスイндеグレイトには『^{アスベル・ラント}大切なものを守る者を再現するのに必要な力』をそれぞれ生み出すようにさせてたんだ。

さらにこの使い方だと、使う妖力は極小で済むんだ。おそらくその理由としては能力を張り付ける段階で妖力を三割持つて行かれてるので、能力の起動に使う分以外の妖力は必要無くなってるからじゃないかと思う。

極小とは言ったものの、あくまで力を生み出すだけだから戦闘中は常に流し続ける必要があるんだけどね。その武器が再現する人物や現象によって流す量にも大小があるし。それにあくまで生み出してるのは『再現するのに必要な力』だけ、つまり術を制御したり技に力を合わせるのは自力でやってるのさ。地味に融通が利かないのよね、この能力。

そしてこれからやるのはそのさらに応用。微量にディヴァインキャノンに流し続けている妖力を一気に増やす！！

『オーバリミッツ』

俺の体から妖力とはまた違うオーラがあふれ出す。

「なっ・・・あんたまだ力を・・・？」
にやはっ、洩矢の嬢ちゃんビビってるね。でもこれが最後の一撃だからきちんと見ていただかないとね。

「そいじゃ！俺様行っちゃうよ？華麗にターゲット、オン！！」
ヒュンヒュンヒュンッ
ザンッ！！

変形弓をたたみ、剣のようにした状態で構える。そして袖から出したナイフと合わせて持ち、体ごと縦に回転して嬢ちゃんの目の前まで跳躍。二つの武器で交差するように切り付け、嬢ちゃんの足元に標的となる術式を刻む。

通常使用時よりも多量の妖力を流した時にだけ使えるその武器最強の技。それは秘奥義。これはそのひとつ！

ジャキンッ キュオオオオオ！！
変形弓が展開、つがえた矢に光が集束する。

『クライシス・レイン！！！！』
「くそっ！！！！！！」

ドドドドドンッ！！！！！！！！

5本放たれた矢は標的に寸分の狂いもなく命中。にしても巻き上がった土煙で前が見えやしねえ。

ちなみに今のは虚構^{レイウ}の兵士の第2秘奥義、クライシスレイン。光り輝く五つの矢が別方向から標的を貫く回避不能の矢、その威力も桁違いってね。おっ、土煙が消えてきたみたいだね。

土煙が去った後には、五つのクレーターとその中心に女の子座りをしてしながら帽子を押さえ、涙目+上目づかいでマタタビのほうを見ている諏訪子がいた。

「あーっ、たすかったの？」

うん、これは強烈だ……。そう、まさに！！
「わが妖生に一片の悔いなし！！」
ブッシャアアア！！

マタビが諏訪子の姿に萌え死に（鼻血による大量出血で失神しているのだが）地に伏せる。対する諏訪子は

「あれ？なんであいつが血だまりの中に倒れこんでるの！？しかもすごく幸せそうな顔で！いや、これってもしかして反撃の絶好の機会？よし！なら・・・って腰が抜けて立てないよ～～！！」

座り込みながらあうあう言っている・・・

かくして先ほどまでの戦闘は、一方は満面の笑みで鼻血の海に沈み、また一方は座り込みながらあうあう半べそをかくという何ともしまらない終わり方で幕を閉じたのであった。

諏訪子は別に立たなくても空を飛ぶなり能力で攻撃するなりすれば
よかったのではないだろうか・・・？

五歩目（後書き）

ご意見、ご感想ありましたらお願いします

………違う、天照の。それは餅ではなく毛玉だ！あ、待て待て口に運ぶな！！いやオレが食いたいわけじゃなくてだな。
だからそれは食い物じゃないんだってば！！いやいや、「あんこを忘れてました」とかそんな問題じゃなくてさ？ん？なぜ毛玉を持つて満面の笑みでこっちを向いてんだ？……やめろ、オレに食べようとすんな！！お前さんみたいなベツピンさんにあーんをされるのはやぶさかではないが……。だからそれは餅じゃないんだってば！！くそ、待て、にじり寄るな、やめろ、やめてくれ！！アッ———————！！

（つづき）

「ふおう!？」

「あ、やつと起きた」

な、なんだ夢だったのか。まさかあの流れで毛玉を鼻にねじりこんでくるとは思わなかったぜ……………。あれ？なんか違和感。

俺は無傷（鼻血で血流しすぎて無傷には見えないうちかもしれないが）、嬢ちゃんはおく軽傷で横にしゃがみ込んでこっちを見ている。あ、もうチョイでパンツ見えさどゴシヤア!!!!

「あんた今何か考えた？」

「いえ、何も」

怖っ！笑顔で顔の真横に拳叩きつけてきた!……………変なこと考えるのはよそう。にしてもいつたい違和感の正体はなんなのか……………。

あ、そうか。オレ今し方まで気絶してたのにその間攻撃されてないんだ。まあ、迎撃用の術もかけてはあったけどそれも発動していないみたいだしね。なんでだろ？聞いてみるか。

「嬢ちゃんよ、なんでオレが気絶している間に殺しちまおうとしなかったんだい？」

沈黙が長い。ボケたくなってくる。

くそ！耐えきれん、オレはボケる！！

「も」「いやね？私も最初はそうしよかったんだけどさ」

「（・・）シヨボン」

また台詞かぶされた。

「少し冷静になつて考えてみたらこんなあほ面で寝てるような奴に害があるとは思えなくなつてきてね」

「（・・）シヨボン」

あほ面って言われた。

「それにあんた私と戦ってるとき手加減してたでしょ？素直に寝込み襲ったらなんか起きそうだったしね」

あら鋭い。外見は幼くともこの辺はやはり神らしいものがあるねえ。

「まあ確かに攻撃してきてたら命の保証はできなかったかも」

「やっぱりね。まったく、土着神の頂点ともあろう私が目も閉じたままのやつに負けるなんて……」

．．．．．嬢ちゃん、悔しそうにしていると
悪いが

「いや、目開けてるんだけど。普通に」

もはやおれ自身この台詞を吐くのが何度目なのかわからねえんだ
けどなあ。

「嘘をお言いでないよ。あからさまに閉じてるじゃないか」

くそう、やっぱりこのやり取り起きるのかよ!?

「だからオレは目を開けててこの顔なんだよ」

どうせ信じてもらえないんだけど一応言っとく。

「本当に?じゃあ閉じてみて」

ほい。

「．．．．．開けてみて」

ほいさ。

「何も変わらないじゃないの!」

「変わってるわ!!」

クワツ!!

「うわっ、目が開いた!？」

昔っからみんなんな同じような流れで話しやがって! けっこう
気にしてるんだぞ、目が細いの!

「あれか? 俺は常に目を全力で見開いていないと「寝てるんですか
?」って会う奴会う奴みんなに言われにやなんのか!?! ただ単に
ちよつと目が細いだけだろ? なんでみんなここをやたら突っ込んで
くるんだよ!!」

「うわわ、ごめんごめん謝るからその目やめて! 怖いから!?! すっ
ごく怖いから!?!」

なんだよもう、目の大ききなんて生まれつきなんだから仕方ねえ
だろコンチキショー! がああああああああ!!!

あれ？なんでオレの目の話になってるんだ？ってか何の話してたっけ？

・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、手加減云々の話だったっけか。

「話は戻るが手加減は失礼かと思うが確かにさせてもらった。そうでもないと嬢ちゃんを確実に殺しちゃうし、女性に本気で手を挙げるともりはもともと無いしな」

あくまで今回ののは加減したうえでの正当防衛だからねえ。あ、くそ。目え見開いてたら乾いてきた。

「あ、目が戻った」

ええい、まだ言うか

「それにしても確実に殺せるとはまた大きく出たね？確かにあんたの妖力は大妖怪と呼ぶにふさわしい大きさだし使う妖術も強い。それでも私は神だよ？負けた身でいうのもなんだけど本来妖怪の身では抗うことのできない存在なんだよ？」

嬢ちゃんがいぶかしげな表情で聞いてくる。まあ、確かに普通ならその通りなんだけど・・・・・・・・まあ細かく説明するのも面倒だし

証拠を見せてさっさと話しを終わらせちゃいますかね。

二本のしっぽを嬢ちゃんの眼前に近づける。ちなみにその二本のしっぽにはそれぞれ一つずつリボンを巻いている。

「この飾り紐がどうかしたの？」

ま、見せただけじゃわからんか。外見的には小奇麗なただの帯だしね。

「この紐は封印だよ。二つともね」

「・・・・・・・・・・え？」

おお、啞然としてる。面白い面^{つら}だな。つと笑いをこらえてたら、急に嬢ちゃんが気を取り直したように聞いてくれた。

「ちよつ、ちよつと待った！それじゃあ何？あんたは封印されてもなお大妖怪級の妖力を持つてるっていうの！？しかも二重の封印で！？どんな化け物さ！？」

「（・・・・・・・・）シヨボン」

確かに猫又は妖怪だけど面と向かって化け物って言われると傷つくよ？泣くよ？泣いちゃうよ？

「あ・・・・・・・・ごめん・・・・・・じゃなくて！！いたい元の妖力はどんな大きさなんだい！しかもそんな妖怪に封印をかけれるのなんて神の中にも一握りもないはずだよ！？でもそんな封印をしたなんて話は聞いたこともないし・・・・・・・・」

にやははは。しおらしく謝ったり叫ぶように聞いてきたりぶつぶつ言いながら悩みだしたり、見てて飽きないねこの嬢ちゃん。一つ一つの動作がかわいらしいし。それにしても封印したって話を聞かない？当然じゃないか。だって

「この封印は自分でかけたものだぜ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

おお、また固まった。仕方ない、もう少し詳しく説明してあげるとするか。

「いやね、暇だから修行しまくったはいいものの、あんまり妖力がでくなりすぎたから何度も神様がオレを殺しに来たんだよ。それでいつも返り討ちにしてただけどあるとき神の石柱が

「少し加減してくれないとこっちが死ぬ」

とか言い出してね？いやお前らが殺しに来てんだろと思っただけでさ、神殺しはさすがにまずいだろうと妖力押さえたら、神に対する敵意を持ってないと解釈してもらえたみたいで

「これまでの非礼をわびよう、謝礼と言ってはなんだが我らの織ったこの織物を受け取ってくれないか」

って言ってこの紐をくれたんだ。以来この紐を封印に使って自分につけてるのさ。そんなたびたび神とドンパチやらかしたくはねえしな」

実際は妖力だけではなく俺の能力も狙われた原因なんだけども、そこまで言う義理はないさね。今も時々神に襲われてるし、神の中には妖怪と見るや否や消しにかかる奴もいるから怖いんだよ。

それを聞いた嬢ちゃんが呆然とした表情でつぶやく。

「・・・なんかあんた結構すごい存在なんだね。私、実は命拾いしてたのか・・・。」

いや、だから女性を殺すつもりはないってば。

「そういえば自分でかけてるその封印って、自由に解けるのかい？
解けるのなら参考ばかりに妖力見せてほしいんだけど」

いやいや、いきなり何を言い出すのかこの幼zydゴツ！！・・・
少女は。自分の国の敷地内で妖怪に封印解いて全力を見せるだなんて、もしそれでオレが暴れ始めて国を滅ぼしたらどうするつもりなんだか。

「丁重にお断りさせていただく」

「え、なんで？」

嬢ちゃんが無垢な表情で小首をかしげ不思議そうに聞いてくる。
クツ、そんな表情でオレを見るな！抱きしめたくなくなってしまっじゃないか！！

「だってあなた女性に本気で手を挙げることはしないんでしょ？なら封印解いた状態で私に襲いかかったりしないだろうし、集落を襲いに行くこともないんでしょ？」

「……この子は妖怪風情の発言を信用すんのか。神にしては珍しいな。」

「こう言うのもなんだけど、俺は妖怪だぜ？封印解いたら気分が変わってお前さんに襲いかかるかもしれないし、この国を滅ぼそうとするかもしれないぜ？」

オレの発言に対し、嬢ちゃんは少し悩んだ後何か確信した表情でしゃべりだした。

「……たぶんだけどあなたはそんなことしない。特にこれといった根拠はないけど、これまで話してみてもあなたは自分の力をそういう風に使う類いの者じゃないって思えた。妖怪にしてはすごく変なことだけだ。」

これは信用してもらえてるってことかね？むう、だとしたら頼みを無下にはできないじゃないの。

「わかったよ、少しの間だけだからな？」

「え？いいの？」

「自分から言つといて、いいの？じゃないっつ。ちょい待つてな。……『妖力量抑制』と『妖力質抑制』への妖力供給停止と」

ちなみにこの封印帯はそれぞれ『妖力量を大妖怪程度まで抑えるために必要な力』と『妖力質を大妖怪程度まで抑えるために必要な力』を生み出してるのさ。

ブワッ！

「これでいいかい？」

さっきまでとは我ながら次元の違う妖力があふれてくる。解くのは久しぶりだけど、いやゝ体が軽い。宙にも浮かぶ気分だね。実際浮いてるけど。封印解くと地面から若干浮いちゃうんだよね。

「うわっ、すごい量。ってそれよりもこれ妖力じゃなくて神気じゃないかい？あんた妖怪のはずじゃなかったの？」

嬢ちゃん、その表情で聞かれると本気で聞いているのかと疑っちゃうんだが……。

「妖怪だつての。それにこれも神気じゃないぜ、もっと集中してみなよ」

嬢ちゃんくらいの力量の神なら、なんとなくでも違いが分かると思うんだがね。

・・・お、その表情からするに気付いたみたいだね。

「……あ、確かに妖力だ。でもすごい……。こんなに純粹で濃密な妖力があるんだ……」

わかってもらえたならこれにて終了、再封印つと。ま、さっきのも本当の本気じゃないんだけどね。

それにしても、だ

「なんだって俺の妖力が見たいだなんて言っただんない？さっさと国から出て行けとも言われるかと思ってたんだが」

加減してたとはいえ乙女の柔肌に傷をつけたんだからそのくらい

は・・・つとそっぴや忘れてた。

背中に背負った杖、名は『ブルークリスタルロッド』に妖力流して『ティア・グランツ魔界に咲く花』を再現するのに必要な力を生みだす

「命を照らす光よ、ここに來たれ」

『ハートレスサークル』

パアアッ

嬢ちゃんの頭上から光が降り注ぎ、傷を癒す。こいつはそこまで効果の強い回復術じゃないんだが、この程度の怪我なら十分おつりがくるだろ。

「わ、すごい！傷が治っちゃったよ！？」

よし、案の定全快したね。まあ嬢ちゃんが神だから治りがいいのもあるんだろうけど。なにより

「乙女を傷つけてそのままってわけにゃあいかねえからな」
オレとしたことがすっかり忘れてたぜ。

「んで、話を戻すがなんでオレの力を見たがったんだい？」

これでただの興味本位だってんならぐすぐり地獄の刑だな、なんとなく。神なら因幡のよりは丈夫だろうから、2、3刻は耐えられるかな。

「あーうー、とりあえずそれは置いといて」
ん？置いといて、なんだ？

「私と友達になってくれない？」

六歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします。

七歩目

・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

「すまん、嬢ちゃん。オレの聞き間違いかもしれないからもう一度言ってくれ。何になれって？」

オレのごく当たり前な疑問に対して、心底呆れたような表情で嬢ちゃんが再び言う。

「だから、友達になってほしいって言ってるのさ。あんた結構耳遠いの？」

誰が年寄りだ。

いやいやそうじゃなくて、何？友達に？さっきまで自分のことゴボコにしてた相手と友達になろうとしてるのこの子？もしかしてそっちの気gグボファ！！

オレが思案している最中、今度は正確に嬢ちゃんさなかの正拳が鳩尾を打ち抜く。

「待て嬢ちゃん、なぜ殴った」

鳩尾は、鳩尾はキツイ！！

「いや、なんかつい殴らなきゃいけないような気がして」

この嬢ちゃん読心術でも会得してんのかよ……。神なら実際

「んで、なんでいきなりそんなこと言い出すんだい？すまないがさっきの話の流れでなぜそうなるのか全く理解できないのだが」

「特に理由はないよ。でも強いて言うならあんたは私を怖がらないでいてくれるからかな」

また聞き返そうとしたオレの言葉を打ち消すように、嬢ちゃんの腹の虫が鳴く。この嬢ちゃんはおれの台詞に何かしらかぶせんのが好きなのか？まあ、それよりもまずは……

「うん」

[illegible]

パチパチッパチッ

ただ今嬢ちゃんと焚き火を囲んでいます。ちなみに着火は魔王炎撃破で行いました。

「そんでムグムグ何で怖がらないからって友達なんだ？ムグムグ」
近くの川でとってきた魚を焚き火で焼いて、食べながら喋ってるから少し行儀悪い気がするな。

「私はこれでも祟り神でねモキュモキュ、神の中でも結構避けられてるのさゴクンッ。あ、こっち焼けてる」

咀嚼音がかわいいなこの子。にしても祟り神か、察するにさっきミシャグジ様とか呼ばれてたあの蛇どもの頭かしらつてとこかな。

「待て、それは俺が目をつけてたやつだ。まあ確かに祟りと聞いたらたいていのやつは尻込みするだろうな」

「案外ケチだね、じゃあこっちのでもいいや。まあそんなわけで特に仲のいい神もないしモキュ近寄ってくる奴も祟りを恐れてモキュ媚びたような態度をとるモキュモキュ奴ばかりなの」

嬢ちゃんよっぽど腹減ってたのか。オレよりはるかに小さいのにオレの倍以上は食ってるぞ。

「それでムグムグお前さんを怖がらない珍しい奴、オレと友人になりたいとムグムグムグ」

「そういうこと、あなたといったら面白そうってのもあるんだけどね。ご馳走様でした」

・・・すごいな。結局一人で十匹は食べたぞこの子。

にしても一緒にいると面白そう、か。そういう風に思ってもらえるのは結構うれしいね。

「はい、お粗末さんでした。まあ、友人になるのは構わないぜ？こんなかわいい嬢ちゃんとお近づきになれるなんて願ったりだ、でもな」

「でも？」

わかってるだろうに聞き返すかいこの子は。

「オレを何に利用しようとしているかくらいは聞かせてもらおうかい？」

「あーうー、やっぱり言わなきゃダメ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

無言で目を見開きじつじつと諏訪子を見つめてみる。

「うわ！わかった言うよ、言うからその眼はやめて!？」

オレの目を見開いた顔ってそんなに怖いのか、威嚇には便利かもしれないな。これから練習してみよう。

「実はね、近いうちに私の国と大和って国との間で戦争が起きそうなんだ。それでどうやら大和の国の神々を率いてるのは軍神みたいで、ほかにも数十の神が攻めてきそうなんだ。この間も偵察役の神を叩きのめしたし」

ほうほう、けっこう大ごとだね。む、そろそろ焚き火を始末しないと。

「それに対してこっちの国で戦争に出てくれそうな神は多くて十。軍神とでも一対一なら負けるつもりはないけど、さすがにそれだけ数が違うと厳しい」

まあ常識的に考えたらどんな強くても数で押されたらいずれ崩れるからな。常識的に考えたら。……そういえば最近しつぱに櫛入れてなかったな、とりあえず手櫛で整えておくか。

あまり真摯に聞いてないオレの態度に気付くこともなく、うつむきながら嬢ちゃんは続ける。

「何よりも神と神の戦争で私の国の民に被害を与えるわけにはいか

ない。正直もう戦うのをあきらめて投降しようと思ってたんだ、そのほうがこの国は被害が少なくて済む」

ふむ、確かにそれは民を率いる王としては正しい判断と言えるかもしれない。けどさ

「嬢ちゃんはそれで納得できるのかい？」

「ッ！できるわけがないだろう！！あいつらは私に隷属しろと言ってきたんだぞ！？それに従うのがどれほど屈辱的かわかるか！？」

おおう、いきなりキレんな。戦闘中並みの圧力周囲に放ってんじやねえか。

「それでも私は王だ！民の生き死には責任を持たなければならぬ！それが私が洩矢という国を建てたときから負っているものなんだ！今更己の誇りのためにそれを投げ打つことは許されない！！」

どんどん熱くなってきちまってるな、嬢ちゃんの圧力が強すぎてあたりの小動物や妖精が気絶しかかってんじやねえか。というわけで「少し落ち着け」

『ピコハン』

ピコッ

「あうっ！」

オレが短く呟くと同時に嬢ちゃんの頭上にかわいらしいハンマーが現れ頭に落ちる。そして当たった直後に何もなかったかのようにハンマーが消える。今の術は魔界に咲く花のものだ。
ティア・クランツ

はあ、まったく熱くなる気持ちはわかるがもっと冷静に話してほしかったね。もはや周りが死屍累々じゃねえの。しかたねえ、もう一つ使うか

「女神の慈悲たる癒しの旋律 リュオ・レイ・クロア・リュオ・ズエ・レイ・ヴァ・ズエ・レイ」

『リザレクション』

パアアッ

言葉を紡ぎ、短く歌い、術を唱える。すると地面に光り輝く陣が現れ、陣の中に居る者の体を癒やす。ん、よし。動物も妖精もみんな元気になったな。それじゃあこの幼女にお説教だ。

「いきなり何するんだよ痛いなあ。いやもう治ってるんだけどさ」

「さて、嬢ちゃん」

「え？」

オレはゆっくりと立ち上がる

「お前も神なら己の力が周囲に与える影響を少し考えろ、動物や妖精だろうとお前の国にいるならすべからくお前の国の民だろうが。そいつらを怖がらせといて民に対する責任？はっ、笑わせんじゃねえぞ餓鬼が。要約すれば負けそうだから民の安全を理由に戦争から逃げようとしてるだけじゃねえか。民への責任をって言っなら最後まで王として戦い続けろってんだ。それこそ使えるすべてを利用してな！っつかオレの台詞なげえんだよこんちきしょう！！」

我ながらよく噛まずに言えたな！？

オレの言葉に対し、嬢ちゃんには悔しそうに顔をゆがめたのち言い返す。

「ぐつ、あんたは軽々しく戦えつていうけどさ、神の争いに人は無関係なんだよ？そんな彼らを巻き込むわけにはいかないじゃないのさ！」

あら？利用しろって言ったのを民のことだと勘違いしたのか？オレもそこまで鬼畜なこと言わねえよ

「利用しろって言ったのは人間じゃねえよ。罨を張るなり別の国の神や妖怪をけしかけるなり、相手の国に夜襲なんてのも基本だな」
オレも本来ならこんな無粋な真似を進めはしないが、背負ってるもんが背負ってるもんだし手段がどうこう言うのこそ無粋だからな。

「そんな卑怯なことできるわけないじゃない！」

今度こそ嬢ちゃんは怒りを露わにする。神として、王としての誇りがそうさせるんだろうね。でもさ・・・

「こんの甘ちゃんが！卑怯？バカ言っちゃいけねえよ、これは戦争なんだろう？ならどんな汚い手を尽くしてもお前は民と国を守り抜ければ勝ちなんだ。逆に正々堂々と戦ってもそれで負けたら全く意味はないんだよ」

「そんなこと言ったって・・・」

嬢ちゃん自身その言葉は理解できているんだろう。だがそれでも認めることができない。結局自分は民のために誇りを捨てきれない愚かな王だとも感じてるのかねえ。

あ、ちょっと涙目になってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あー、もうしゃあねえな！

「わかったよ、民も傷つけずに済むし、お前さんも降伏せずに戦うことができるようにしてやるから泣きそうになるなよ。たのむから」

「え？そんなことができるの！？」

まだ涙目だが、先ほどより明るい声色で聞き返してくる。

は、まったく何でこんなことになっちゃってんのかねえ。

「大和の神には顔見知りが何柱がいるからな、そいつらを説得して嬢ちゃんと軍神の一騎打ちに持ち込めるよう頼んでやるよ」

あいつらと会うのはめんどくさいんだがしかたねえ。乙女の涙と俺の苦勞、あっちゃいかなのは乙女の涙だ。

オレの発言の中の神に知り合いがいるってどこでも驚いてたけど、それ以上に説得するという部分に妙に反応した嬢ちゃんがまた聞いてくる。

「本当にそんなことができるのならうれしいけど、なんでそんなことしてくれるの?」

何言ってんだこのチニっ子は

「友人が困ってるなら協力しないとダメだろ？」

当然じゃないか。なぜ不思議そうな顔をする？

「またもや啞然とした表情になった嬢ちゃん。さらに訪ねてくる。……なんかこの嬢ちゃんの啞然とした表情ばかり見てる気がするな。気のせいかな？」

「友人？私、あなたのこと利用しようとしたのに友達になつてくれるの？」

「オレは頼まれた段階ですでに友人になつてもいいと言つた気がするんだが、言つてなかったか？」

確か言ったと思ったんだが、まさかオレホントにボケはじめたか！？

「いや、確かに言っただけどほんとになっ
てくれるとは……」

あ、よかった。記憶違いじゃなかった。うん、オレはまだボケてねえ。オレはボケてねえ！！

「それに素直に俺を利用しようと考えてたこと白状してくれたしな、もし隠し続けたりしたら協力しなかったけど」

オレは信用にはそれ相応の態度で返すのを信条にしてるからな。

「あーうー。やっぱりあんたってよくわかんないよ、いきなり説教してきたり優しくしてきたり。手伝ってくれるのなら最初からそう言ってくれたっていいじゃないのさ、もう断られるものだと思ったじゃない。神に説教する妖怪なんて聞いたことないよ」

今度はふてくされたような感じに頬を膨らませながら言ってくる。
 ・・・・。ああああああああつきたい！！そのほ
 つぺた思いつきり指でつつきまくりたいいいいいいい！！！！！！

よし、落ち着けオレ。今はそれよりも嬢ちゃんにオレが説教した真意を伝えておかなければ。

「その説教をしたついでに、なんだが、実は……」

「…………ゴクリッ。実は？」

嬢ちゃんが緊張した面持ちでオレの発言を促す。いや、緊張した空気を出したいのはわかったけど、口でゴクリッて言うなよ!?

「気分だ、なんとなくしたくなっただけ（笑）」

これ以上変な気を持たせんのも悪いしはつきり言っちゃいました。
あ、嬢ちゃん切れた。

「・・・・・・はあ！？じゃ私はあんたの気まぐれで餓鬼だのなんだのって言われたの！？」

その通り！嬢ちゃんがあんまり熱くなるもんだからついオレも熱くなってみようと思っちゃったんだよね。いやあ悪ノリ悪ノリ。

「こいつ！・・・・・・はあ、もういいや。なんか疲れた。で、本当に決闘なんて実現できるの？向こうがそれを飲むとは思えないんだけど・・・・・・」

フ、嬢ちゃん甘いな。まだオレのことがよくわかってないと見える
「断ってきたら軍神以外は俺が叩きのめせばいい話だ！」

こう宣言したオレの表情、おそらくは殴りたくなるぐらいのドヤ顔だろう。

「そんなことできるわけ！！・・・・・・できるわけ・・・・・・できそうだねあんたなら」

嬢ちゃん最初こそ否定しようとしてたけど結局納得しちゃったな。
当然さ、オレは主神にすら勝つ猫又だぜ？

「まああくまでオレがするのは頂上決戦のお膳立てだけだ。あとの

勝つか負けるかは嬢ちゃんしただいぜ？」

「わかってるよ、あんたが協力してくれるってんなら本当にこの戦争勝てる気がしてきた！いや、絶対に勝ってやる！！」

先ほどまでの沈んださまとは打って変わり、やけに元気の出た少女がそこにはいた。あ、さっきから心の中で幼女って言っても殴られない。

それはさておき、いかに相手が軍神でもこの嬢ちゃん結構強いから案外勝てちゃうかもね

「まあ、油断はしなさんなよ」

「わかってるよ！よし！そうと決まったらさっそく家に帰るよ！あんたも来る？」

おお、ありがたい。久々に野宿せずに済むかな？

「お邪魔させてもらうよ、オレは股旅暮らしなんで家はないのさ」

一応作った武器をしまっている屋敷はあるけどもう数千年帰っていないしこっからは遠いしな

（その屋敷は現在ある状況下にあるのだが、今のマタタビは知る由^{よし}もない。）

「それじゃ行こう！えーっとマタタビ！でよかったんだっけ？」

おや、覚えていてくれたのか。光栄だね。それじゃ

マタビはいつも通りの軽い調子ながら、どこか先ほどまでよりも親しみを込めた声色で返す。

「そうさね、よろしく頼むよ。洩矢の。」

七歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします

主人公設定

プロフィール

マタタビ

種族：妖怪（猫又）

性別：オス

年齢：面倒になって数えるの辞めたため不明

身長：人型時・約六尺（180センチ） 体長：猫型時・約二尺（61センチ）

体重：人型時・約二十四貫（90キロ） 体重：猫型時・約二貫（7キロ）

体格：細身（筋肉質なため）

外見：人型時・少し癖のある黒髪の短髪に開いてるのかわからない
黒眼

猫型時・全身黒毛で尻尾はとても長い。やっぱり目は細い

趣味：修行・股旅・料理・歌

特技：鍛冶

能力：必要な力を生み出す程度の能力

主人公が東方世界に転生した姿。最高神によってある意味テンプレな過去世界に生まれ落ちた、しかし時期が微妙で妖怪化した時はすでに月に人が移住した後だったため絡みは無し。

外見は説明の通りで服装は、長袖長裾の藍色さむえの作務衣の上に、背中に『粋』の字が書いてある膝下ぐらいまである若草色の羽織を着ている。作務衣のズボンにはしっぽ用の穴が開けてある。そしてしっぽには白と黒のリボンが一つずつ結ばれている。

転生の際ティルズオブシリーズ以外の記憶を失うはずだったが、最高神のいたずらでいわゆる『ネタ』の記憶も引き継がせたため基本的にそれを用いて延々とボケつつけるのが好き。ちなみに金槌。

ティルズオブシリーズの知識すべてを持っているため、まだその時代に存在しないはずの言語・技術を保有している。そのためいわゆる外来語などの言葉も無意識的に使っている節がある。

ちなみに当猫はティルズオブシリーズのことを『異世界の英雄譚』えいゆうたんと呼び、その知識を自分が持っているのはたまたまだと考えている。

能力の『必要な力を生み出す程度の能力』とは、例えば

「魔術を放つのに必要な力を生み出す 魔力が発生」

といったように能力の文章に望む力を表す文をつけて、それを発生させることができる能力である。

この場合魔力を生み出すだけでそれを操れるかは当人次第だが、さらに

「魔力を自在に操るのに必要な力を生み出す 魔力制御力が発生」といった風に生み出すことで自在に魔術を放つことが可能になる。一度の能力発動で生み出せる力は一種類のみ。

使用している武具は基本的にすべて自作したものに能力を込めていて、その材料はオリハルコン・ミスリル・緋緋色金・アダマンタイトなどが使用されている。武器にはそれぞれ『を再現するのに必要な力』を生み出す程度の能力を貼り付けてある。

基本の戦闘スタイルは、自作の武器+能力によってティルズキャラを再現、切り替えながら戦う。しかし武器なしでは戦えないわけではなく自分オリジナルの妖術も多々あるが

「使つと圧倒的すぎてつまらん」

といった理由で普段は使わない。つまり武器を使っているのは加減して戦闘を楽しむため。

当猫がたびたび言うように、長い修行の期間の中でオリュンポスの主神ゼウス、アース神族の主神オーデインやユダヤ教における唯一神ヤハウエなどと戦いそれに勝っている。

尻尾のリボンはオーデインに貰ったもので、その正体は布で作られたグレイプニールらしい。だが今は所有権がマタタビにあるので、マタタビの意図に背いて発動することはない。

自分より妖力量などが勝る相手に対して技術や作戦で勝つのが好きのため、自分に封印をかけることにしている。しかし最近では封印した状態でも自分より強い者がいないため、封印を強めようと考えている。

現在は二つ封印をつけていて妖力の量と質を大妖怪程度まで下げているが、その封印をかける以前にグレイプニールの力で自分の力量を一つにつき四割五分ほど抑制させているため、実質四重の封印である。

上記を見ると戦闘狂の気があるように思えるが、戦う必要がないのなら基本的には戦いたくないと思っている。だが戦闘が避けられないのなら開き直って楽しむ。修行は趣味であり、誰よりも強くなりたいとかの願望があるわけではない。しかし己の強さには自信と誇りを持っている。

本猫の一番の願望は「笑いながらのほんと生きていきたい」といったゆるいものである。邪魔しようとする奴は叩き潰す、ぶっちゃけ自分主体の考えである。

女性と小さな子供が大好きな（ロリ・ショタの意味ではない）、サディストであるとともに若干のマゾヒスト。性的な意味ではなく対

象を愛でるのが好きだけど、基本的には自重する。

八歩目

「ふむ、洩矢のよ。お前さん自分に近づく者たちはお前さんを恐れているような奴ばかりと言っていたよな？」

聞き間違いはしていないはずだが？この状況を見るにそうは思えんぞ？

「・・・うん、これに関してはできれば突っ込まないでほしい・・・」

洩矢の家（王の社^{やしほ}だけあり無駄にでかい）に着いてみたら、洩矢のに仕えているらしい乙女たちに出迎えられた。鉄拳で。しかも殺気のオブション付き。どうやら侵入者だと判断されたらしいが、洩矢のが事情を話したら顔色を変えて謝ってきたので当然許してあげた。

それは置いといて、だ。今現在洩矢のは正座をしている。自分の侍女たちの前でだ。どうやら国政をほっぽり出して遊びに出ているため説教を受けているらしいのだが・・・。

その内容は「また勝手に抜け出して」だの「その服は誰が洗うと思ってるんですか」だの「妖怪なんか拾ってきてもうちじゃ飼えません、元の場所に戻ってきてください」だのと、もはや母親と娘の会話とは思えない。ほんとに恐れられてんのかこの子？さらに俺はペット扱い？

あ、涙目になってきてる。オレが泣かすわけじゃないから放置でもいいけど、話が進まないからそろそろ止めようかね
「あいや失礼、お嬢さんがた。実は洩矢神が外に出たのには理由があります。……」

猫又説明中

いやあなかなか面白い話を聞いた。洩矢のが俺を人里を襲いに来た妖怪と勘違いして滅しに来たことを説明したら、嬢ちゃんたちが笑い出したんだ。そのわけを聞いたら、どうやら人里で俺が見た蛇に憑かれてた嬢ちゃんも崇られてたのじゃなくてこの侍女になれるか選別されていたらしい。つまり俺の勘違いに洩矢のの勘違いが重なって戦闘が起きちゃったんだな。

ここに仕えている嬢ちゃんたちはみんな孤児で、さらに靈的素養のある子達らしい。全員同じ選別を経てここに来たのだとか。洩矢神に直接仕えている彼女たちは、この国の中では洩矢伸に次ぐ権力を持つてゐるらしい。なんという女尊男卑。

それとこいつは予想だが、たぶんこの嬢ちゃんたちも国の民も大和との戦争のことは知らないね。雰囲気があるものすごくのはほんとしてるもんこの国。洩矢のは自分独りで解決しようとしてたのかね、

無茶しおつて。

仕方ねえな、今夜一晚泊してもらったら明日にでも大和に出向くか。もし戦争を未然に防げるとしたら早めに動いたほうがいいだろうしな。

洩矢のはいまだにぐずってるから泊まらせてもらえるかわからんな……。仕方ない、なんとなく一番偉そうに見える嬢ちゃんに聞いてみるか。

（マタタビは知らないが、実際この女性は侍女の長である）

「すまないが嬢ちゃん、一晚だけ泊めてもらいたいんだがどこか一部屋貸してもらえないかね？」

無理なら野宿でも構わないがな。

「大丈夫ですよ、諏訪子様のお客様ですからきちんとおもてなしさせていただきます。お部屋でしたら他国からの使者の方を泊める場所があるので、そこをお使いください。」

おお、そいつありがたい

「感謝する。にしても嬢ちゃん方俺が妖怪だって理解してんのによく怖がらないね？」

最初ぶん殴られた時なんて殺気こもってたし、いったいどんな生活送ってきてんだ？

「そうですね、並みの妖怪くらいなら日頃人里の安全確保のため狩

っていますし。それに……」

なんか若干怖い発言した気がするがそれに、なんだ？

「諏訪子様が連れてきた初めての友人なんですから、きっと良い方なのだろうと思いますから。」

……信頼されてんだな、洩矢の。でもな、この嬢ちゃんが良いこと言ってる後ろで「あーうー、この容姿だ。この容姿のせいで扱いがこんななんだ・」とか「ええっ！飼うために連れてきたんじゃないんですか！？」とか言ってるせいで全然感動できねえじゃねーかよおおおお！！！！そっちの侍女のねーちゃんはまだ言ってるのかよおおおお！！！！

「はあ、お前はいつまでぐずってんだよ。洩矢の。」

見た目も相まってただの子供にしか見えんぞ。本当に神なのか怪しくなってきたな。

「うー、そんなこと言っただけ……」

「はいはい、諏訪子様。早く溜まっているお仕事終わらせてしまえますよ」

あ、洩矢のがさっきの嬢ちゃんに抱えられた。．．．．．
本当にこいつ神か？ここまで扱いがすさまじい神はさすがに見たことないぞ？

「え！？ちょっと待って！まだマタタビと相談しなきゃいけないことがああああ．．．．．」

連れてかれちゃった。まあ部屋で待ってりゃそのうち来るかな？

「では、お部屋にご案内いたします．．．．．飼うんじやなかったのか（ボソッ）」

案内よりによってこの嬢ちゃんかよ！？なぜこの子にやらせるし！？

数刻後

「遅いな。」

うん、遅い。すごい遅い。もう夜になっちまったじゃないか。あまりに暇だから武器の手入れを始めたのに一通り終わってしまったじゃないか。まあいいや、もう一度武器の確認しておくか

「『デイスインテグレイト』に『ディヴァインキャノン』、それと『ブルークリスタルロッド』は大丈夫であとは矢筒にナイフあと符があるから・・・よし、揃ってるな」

でも人型をとってると結構かさばるんだよなこの装備。左右の腰と背中にも武器つけて、杖と交差するように矢筒、袖に仕込みナイフ、懐に符だもんな。それにそろそろこの装備もだいぶ長い期間使ってるよなあ・・・よし、この用事が終わったら久々に屋敷に帰ろう。そこで装備を変えよう。

でもなぜか猫型になると服も含めてどこかに消える不思議。基本的には常に猫型だったからあんまし気になんなかったのよね、これまでは。ホントどこに消えてるんだろう？ご都合主義？

「ああ、ちなみに『符』ってのは以前言った能力の応用の『物体への能力貼り付け』での媒体に使ってるもので、基本的には戦闘用じゃないぜ」

「仕事終わったから来てみたら、あんたいたい何と話してるのさ・・・」

おお、洩矢の来てたのか気づかなかった
「いや、読者への説明は重要だろ？」

「？」

うん、この手の発言はいろいろまずい気がするからそろそろやめておこう。それよりも

「ちよつと遅いんじゃないのかい？ 洩矢の」

結構待ったんだぜ？ もうすることなくなっちまったから鍛錬でも始めちまおうかと思っただぞ。

「うつ、仕方ないじゃないか。用があるって言ってもあの子たちが放してくれなかったんだから」

なんじやいこの子、遅くなったのは自分のせいじゃないと言いたいのか？ やっぱりこいつ戦争のことについて話してないな。もし話してたら、たぶん侍女の子たちもこっちの話を優先してくれただろうし

「それはお前さんが誰にも戦争のことを教えてないからだろう。大方また仕事をさぼろうとしてると思われたんだろうさ」

「え！？ なんで誰にも話してないって知ってるのさ！？」

わからないでか

「戦争前だつてのに普通あんなに落ち着いてないだろうがよ。まったく、王の責任がどうの言うならまずは国民に正しい現状を教えるつつの」

「あう……、でも民を不安がらせるわけには……」

この子はちよつと民に対しての接し方が不器用な感があるな。むしろ誰かにケツ蹴つ飛ばしてもらわないとでかい決断ができないタイプなのかね

「いきなり戦争になったら国民も驚くし被害も増えるだろうが。つてわけでお前は明日国民に対して戦争のことを発表しろ。オレは明日大和に発つ」

ん？何驚いてんだよ？

「ちよ、ちよつと待って！明日！？なんでそんなにいきなり！？」

いきなりつて……そんな余裕のある状況でもないだろうがよ？明確な宣戦布告されてないんなら明日にでも大和が攻めてくるかもしれないんだから、早く動くにこしたことはないだろう

「善は急げと言うだろう？オレは大和で軍神殿にあつたら可能ならば戦争の中止、無理なら決闘の申し入れ、それも無理なら軍神以外半殺しにしてくる。あ、男の神だけ」

「半殺しつて……」

どうした、頭押さえて。頭痛か？

「ちなみに戦争の回避については期待すんなよ、決闘が受諾されるようなら今日より九つ後の夜明けより開始ってことにしとくぞ？」

「いやいや、なんですすでに決闘の日時まで決めちゃってんのさ？私
の意思は？」

「知るか。それに国民に戦争について発表し、国全体に話が広がり、戦争にそれぞれが覚悟を決める。こんぐらいの時間は必要だろ？時間が空きすぎても国民が精神的にきついだろうしな」

俺も一応考えてんのよ。これ以上延ばしたりすると、それこそいつ大和の神々が本格的に攻め込んでくるかわからんしな。

「・・・もうわかった、あんたに任せるよ。なんか何を言っても無駄な気がしてきた」

おいおい、なんだそのいかにも俺に意見するの諦めました的発言は「失敬な、人の話を聞くくらい器量は持つているつもりだぞ」

あ、でもこいつ人じゃねえ、神だ。

「だとしてもだよ、それに私はあんたを信用するって決めたんだ。だからあんたの考えた案に間違いはないって信じる」

おや、うれしいこと言ってくれるね

「なら信用には応えるよ、お膳立ては任しときな。友人の期待を裏切るってのは粹じゃねえからな」

「はいはい、任せるよ。それにしてももう話すことなくなっちゃったね、せつかく飲みながら話そうと思って持ってきたのに」
チャポンッ

お、酒か。今日は晴れててよく月も見えるし月見酒ってのも風流だな。

「いいじゃねえか、せつかく新しい友人に出会えたんだ。外に出て飲もうぜ？くだらない話でもしながらさ」

「ふふつ、それもそうだね。戦前の景気づけてことにでもしとく？」

ありや、色気のないことで。でもこの体系に色気を求めるほうが酷つてもんか。……おや？なんか殺気が……気のせいかな
「ま、それでもいいか。明日から忙しくなるだろうから今のうちに楽しもうぜ」

それじゃ、社の上にも上りますか。

うん、寒くもなく熱くもなく。空は澄み、月は映え。聞こえるのは木の葉の擦れる音。飲み明かすにはいい晩だ。

「ほらよ」

トクトクッ

「ありがと、ハイお返し」

トクトクッ

ふむ、誰かと酒を飲むなぞいつ以来かね？独り酒もいいが酌をしてももらえるってのもいいもんだ。こんな可愛らしい子になら尚更ね
「さて、それではかわいらしき神様に」

「強き変わり者の猫又に」

はっ、変わり者だつてのは自覚してるつての。まあいいや。今宵は飲もう、このろくでもない出会いの日を忘れることの無いよう、心に刻もう。

「それじゃ」

「乾杯」

コッソッ

八歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします

九歩目

皆々様方こんにちは、いやこんばんは、猫又のマトタビです。ちなみに人型状態です。

今現在は洩矢の国と大和の国のだいたい国境を歩いてるところさ。・・・ん？洩矢のと酒盛りしてたんじゃないのか？いやいや、あれからだいたい丸一日たってるのさ。いやぁ今宵もいい月だ。

洩矢のとの酒盛りはたがいの妙な境遇のせいもあつてなかなかに盛り上がったんだけど、明け方まで飲んだのはまずかったね。オレは妖怪だし洩矢のも神だから体的にはどうってことないんだけど、侍女長の嬢ちゃんのキレっぷりがやばかったぜ。

祟り神も涙目になるほどビビる殺気、オレの毛が逆立つレベルの霊気、オレの武器と共振するほどの闘気、となんかもうこの嬢ちゃん一人で軍神倒せんじゃね？とか思ったよ、割と本気で。

洩矢のが説教受けている間にこっさり抜け出してそのまま大和国へ向かっているわけなんだけど、いや思ってたよりも結構遠いね。まず明確に国境が決まっているわけでもないのでの辺に行けばいいのかもよくわからんし・・・。。むう、出る前に洩矢のか誰かにそれらしい場所を聞いておけばよかったと、いまさらながらに後悔。

世界最強を自負してる俺だけど、妖力や霊気とかの場所を探知するのは苦手なんだよね。封印を少しとけば多少はわかるんだけど。まあ、空飛んでもっと高いところから探せば見つかるんじゃないかね？とも思うけど、それだとなんか警戒されそうな気がするんだよね。一

応交渉の使者としていくんだからあまり悪印象を与えないようにしないといけないからね。

「歩いていればそのうち見つかるだろ・・・っと、あれかね？」

ぎりぎり見えるあたりにやたらとでっかい野営地が見えるな。んー、こっからじゃ遠すぎてよく見えんな。まあ、今のご時世にあんな豪勢な野営をしている連中なんて神くらいしかないだろ。というわけでさっさと向かいますかね。

「それにしても、いい月夜だねえ」

猫又移動中・・・・・・・・

「ふむ、やっと野営地の前についたんだが・・・・・・・・」
「どうなってんだこりゃ・・・・・・・・。」

「我らが大和国のさらなる領地の増加を祝してかんぱ〜い!!」
「「乾杯!!」」

戦争前だつてからもつと緊張した空気が流れてるのかと思つたのに、2、30柱の神がでかい篝火かがりび囲んで車座にすわり宴会してやがる。緊張感のかけらもない阿呆みたいな面しやがつて。しかも野郎ばつか、女神は2、3柱しかいねえし。

このむさくるしい野郎神ども、まだ戦争が始まつたわけでもないのにすでに勝つた気分か？ 洩矢のは戦争のことで真剣に悩んでいたのに、こいつらはやりあう前から遠足気分つか？ 不快だな。いつもなら殴り飛ばしたいところだけど、今のお仕事はあくまで交渉、波風立てるわけにはいかねえな。

まずどいつが頭の軍神かしらなのか聞かねえと、・・・・・・・・しゃあねえこのやたらとガタイのいい野郎神に聞くか。

「ひとつおと」はっはっはっ、酒が足りんぞ！ もつともつてこい！
「」

聞けよ。じゃあこつちのおっさん臭そうな野郎に
「もし、おたゝ」此度の戦も楽勝だな！ なんだつて我らの大将はあの八坂殿なのだからな！！」

・・・・ほゝ、大将は八坂つて名なのかい。その方がどこにいいのか聞きたいんだけどな。よし、今度はこつちのふくよかな野郎に聞くか

「しつ」今度の国は小娘が治めてるのであるう？ まつたく、馬鹿な餓鬼が王の真似ごとをするとは何たることだ、我らがさばいてやらねばな！！」

・・・あ、話はきかねえしオレの友をバカにするしこの
野郎神油ギトギトで醜いし、もうこれ暴れていいかな？いいよね？
なんかもう全員ボコボコにすれば戦争とか起こらないよねよしそう
だ暴れてしまおうこのイラつきを発散してやろう全部壊してやるよ
このカスどもがあああああああああああ！！！！

・・・落ち着け、オレ。ここでオレが大和と全面戦争して
も意味がないんだよ。うん、冷静に冷静に・・・「洩矢の王とやら
は祟り神だったわよね。そんなけがらわしい神なんて大和国に必要
ないし、ここで殺してしまيشょうか？あはははははは！！」な
る必要はねえな。うん、もう女でも許してやらねえ。よし、はっち

やけますか。

さて、まずこのクソどもの注目を集めるか。篝火もあるからちよつと利用するかね。

悠々と歩き宴会の中心、篝火の目の前まで進む。ブルークリスタル B・Cロッドに妖力を流し、発生した力で魔界ティア・グランツの花を再現。今回は譜術ではなく、杖自体から篝火の火の要素を用いて技を放つ。

フィールド・オブ・フォニムス
「F O F 変化 焼き尽くせ業火」

『シアリングソロウ!!』
ヒュゴッ

この技は本来なら杖の先端に音素フォニムを集めて炸裂させるだけだけど、周囲に特定の要素があったりするとその力を用いたさらに強力な技になる。それがF O F 変化。今回は杖の先端の音素の塊が、篝火の火の力を受けオレの体長すら超える巨大な炎塊となる。

さて、現在オレの頭上にある炎塊を……地面に叩きつける!

「はいちゅーもーく!!」
ドーーーーーッ!!

にやはははは、篝火跡形も残さず消し飛んだぜ。周りの屑どももアホ面さらしてこっち見てるわ。

「な、なんだ!？」

「洩矢国の夜襲か!？」

「クソっ、誰か武器を持って来い!!」

チッ、うるせえなカス共が。人が、じゃなくて、猫が妖力垂れ流しても気が付かなかったくせに今更騒ぎ出しやがって。

「はいはい皆さんご静粛に。夜襲じゃないですからご安心を。私は洩矢国からの使いのものですよ」

「そのような嘘に我々が騙されと思ったか!妖怪なぞが神の使いとして現れるわけがなからう!!」

「いや、わからぬぞ? 祟り神などという賤しい者なのだ、もしかしたら妖怪と手を組んだのかもしれないぞ!」

「ふん! だとしても我ら大和国の遠征隊の本陣に一匹で攻め込んでくるとは、戦も知らないゴミのような妖怪なのであるう! このような奴はさっさと消し飛ばして早く宴を再開するぞ!!」

さっきまで馬鹿みたいに笑って酒飲んだやつらの大半がこっちにウザったい面^{つら}向けて怒鳴り散らしてきた。……ふう。妖怪なぞだとか、祟り神が賤しいだとか、ゴミだとか、なんか手加減してやる気がだんだん薄れてくるな。

神の中の大半が粗末な武器を抱えてこっちを見下したように見て来てやがる。そんなにはろくな奴がいねえな。動き出さないのは・・・・・4柱か、顔見知りもいるしオレの力量をなんとなくでも感じて動き出さないのは2柱。どっちかが軍神だな。

「こちらは交渉に来たというのに武器を持ち出すとは・・・まあ先に出したのオレだけだな。とりあえず今立ってる連中はしばらくぶっ倒れてろ」

「なに！？貴様何をいも」不快だ黙れ、さっさと終わらせてやるよ」
お前らなんかと話してても時間の無駄さ、というわけでさっきからB・Cロッドに流してる妖力を増加」

『オーバーリミッツ』

「な！？なんだ」だから黙れつつってんだろ」
こんだけ大量に湧いてるからちまちまやってたらめんどくせえ。
広域の秘奥義で一気に潰す！

「天地に散りし白き煌華^{いっか}よ」

詠唱を紡ぎつつオレの立っている宴の中心地点を基点として、円形の術式陣をを地面と上空に描く

「運命^{さだめ}に従い敵を滅せよ」

構えている神全員を射程に収めたところで陣の拡大を停止、戦意

「ふははははは！久しぶりだなマタビ！！今宵こそは我が鍛えた神剣が貴様を打ち倒して見せよう！！」

「抜刀！」

シュツ！キンツ！カランカラン・・・

さっきまで座っていた神の1柱が剣を抜き立ち上がり、高らかに勝利宣言している間にB・Cロッドを背中に戻し、左腰のデイスインテグレイトを抜刀。一瞬でそいつの持っていた剣を切り落とす

「わ・・・私の最高傑作が・・・。。くそう、なぜだ！なぜ奴の武器に勝てぬのだあああ！！！！」

久しぶりに会ったがやっぱりこいつはうるさいな・・・。ちなみにこのorzの状態で絶叫&号泣してるのは、鍛冶の神で名は天目あめのま一箇神ひとつのかみ。昔オレを討ちに來た中の1柱で、その時にご自慢の神剣を壊されて以来オレ（というよりオレの作った武器）を超えようと頑張ってる暑苦しくも今後が楽しみな神だ。どうでもいいが容姿は黒髪茶眼で隻眼のイケメン。

「目一箇まひとつのよ、まだまだ精進するんだな。鍛冶の神なんだから妖怪に負けたまま諦めるんじゃないぞ？」

いつかオレ以上の武器を作ってくれと期待してるんだからな

「なぜだああ！！まだ！まだ足りぬのかああああ！！！！いたい何が足りないのだああああ！！！！」

・・・聞いてねえし。外見はいいのにこの辺が何となく残念なんだよな、こいつは・・・。

「お久しぶりです、マタタビ様。ご機嫌麗しゅう」

つと、阿呆のほう見てたらいつの間にかもう1柱もこっち来てたか
「よお、つづめ鈿女の。相変わらず綺麗だな、お前さんは」

いやあ、美神を見るとやっぱり幸せな心持になるねえ。あ、ちなみにこの子はあめのつずめのみこと天鈿女命。艶のある青の髪に澄んだ碧眼をした舞や芸能の神で、あまていす天照のがあまのいわと天岩戸に引きこもったときは体を張った一発ギャグで引きずり出した、可憐な見た目からは予想のつかない芸人魂を持った女神だよ。

「あら、おだてても何も出ませんわよ？」

袖を口元にあてコロコロと笑うさまは本当に雅だねえ。いや、さつきまでのイラつきもこの2柱見てたらなんかどうでもよくなっちゃったな。こいつらはあの屑どもに混ざらずに静かに飲んでたみたいだしなあ、むしろなぜこいつらはこんなとこに居るんだ？よし、

聞いてみよう

「そいつぁ残念だ、それにしてもお前さんたちなぜ遠征軍になんているんだい？戦争になぞ興味もなさそうだが」

「我は洩矢国が鉄工を始めたと聞いたので、何か参考にならないかと思いついてきたのだ！」

「あゝ、いきなり復活して説明してくれたところ悪いんだが、目一箇のよ。お前さんの理由は予想通りすぎて面白くねえよ」

「orz」

にやはははは、また落ち込んだ。やっぱこいつ虐めると面白れえ。

「あまり虐めないで上げてくださいまし、慰めるの面倒なのですから。それと私はそこらに散らばっている汚物たちに、戦舞を踊れと連れてこられたのですわ。このような品のない方々でも神格だけは高いのですから嫌になりますわ」

毒舌だなおい。まあ居たのがこいつらでよかったぜ。あいつが来てたら本当に面倒臭いことになってただろうからな。・・・にしても「いや、宴会の邪魔をするなんて無粋な真似をしたかと思ったけど存外気にしてないようで安心したさ」

軽くキレちまって勢いで暴れたからちよつと後悔してたんだが、こいつらが気にしてないんならオレも気にすることはないわな、うん。

「ふつ、会ったこともない神を愚弄するような輩だ、お主が現れずとも我が黙らせようと思っておったわ！」

「「お前（貴方）では無理だと思う（いますわ）」」

「orz」

にやはっ、またへこみやがった。精神面弱すぎだろこいつ。

「確かにマタタビ様が現れずともすぐに黙ることになっていたと思いますわ、あちらの八さk!？」

・・・？細女のが何かしら言おうとしてたみたいだが、なんかオレの後ろ見て固まったな。なんかあったのか？まあ振り向いてみてみるk・・・

振り向けば 間近に迫る 御柱おとうぎ by 後日マタタビの語った一句

ゴスッ！！

「くぁ w s d r f t g y ふじこ 1 p ! !」
コロコロコロコロコロコロコロ

いたい！！すごく痛い！！めちゃくちゃ転がったし首とかすごい痛い！！なんだこれ、柱！？ものすごい神気が込められたでつかい柱が顔面めがけて飛んできた！？妖怪にこれはマジで堪える！！
こうかはばつぐんだ！

「痛い！これは痛い！なんだ、何が起きたよ！？」

「なんだじゃないよ、さっきから何べらべら喋ってるんだいあんたは。あたしと話しに来たんじゃないのかい？」

柱を放ったと思われる地点には、どこか芯の強そうな顔つきをしたグラマラスな女神がこめかみに青筋を浮かべながら立っていた。

・・・..
首イテエ。

九歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします

十歩目

「……………ああ、畜生。本当に首イテエ……。いや、これオレじゃなかったら死んでるよ？わりと切実に致命的ダメージだよ？なに、後ろからいきなり一撃必殺的な攻撃かましてくるなんて馬鹿なの？死ぬの？てか死ぬよ？」

「……………うん、まあ放置してたオレも悪いのはわかってるんだけどさ。それに細女たちとの話のほうに意識がいつて攻撃に気が付かなかったし、むしろ非は全面的にオレにあるって言うね。それにしても」

「交渉に来たって言ったのに、初っぱなから殺しにかかるとは何事だい。軍神さんよ？オレじゃなきゃ死んでるぞ？」

まだ首痛いもん。

「いきなり軍を壊滅させる交渉役なんて聞いたこともないわよ」

怒りと同時に呆れを感じさせる表情で軍神殿が言い返してきた。

あ、それはごもつとも。何も反論できねえわ、にやはははははは！

「にやはっ、それについてはオレの友神をバカにしたお仕置きってことで一つ。それに、どうやらオレがやらずとも御柱自ら制裁する

「気だったみたいだしいいじゃねえの。手間が省けたってハナシで」

「いや、そういう話じゃなくってだね？あんたのこれは交渉ではなくて宣戦布告か降伏勧告としか思えないわよ？まあ確かにそろそろ黙らせようとは思っていたけど…」

よし、ならおーけーだな。大丈夫だ、問題ない

「まあ、このような気にする必要もない些末な話は置いておいて交渉に入らせてもらっていいかい？」

さっさと終わらせないとまた脱線しちまいそうだからね。それでもってまたあれぶつけられるのはマジ勘弁、やっとう首痛いのが治ったのに。

「・・・はあ。この応対だけでなんとなくあんたがめんどくさい奴だったのはわかったわ。交渉だね？とりあえず聞くだけは聞いてあげるわ」

なに！？この短い会話でオレの何が分かったというんだ！？・・・
・・・はい、オレがマイペースで自分勝手ってことで
すねわかります。・・・あれ？マイペースと自分勝手って意味ほとんど同じじゃね？まあいいや

「ええと、まず乳をまっさじゃなくて、尻をもんでもなくて、洩矢国へ戦争を仕掛けるのをやめてくれないかい？」

あぶね、ちよっと本音が出た。聞かれ・・・たみたいだね、うん。

さっきまで以上にこめかみに青筋浮かび上がってるもん。これは怖い、なんか効果音つけるならドドドドドドド！って感じのオーラが出てる

「……前半二つに関しては聞かなかったことにしてあげる。戦争に関してはもちろんやめるつもりはないわ、解ってて聞いたのでしょう？」

大人な対応感謝します、さすがにまたあれ喰らったらむち打ちになりそうだけ。っておい、座り込んでまた酒飲みだすなよ。話し合う態度じゃねえだろうが。でもこれっていきなり秘奥義放った俺が言える発言じゃないよね。

「ん、それについては想定範囲内だ。断られたので次の提案だが、戦争の内容を軍神殿と洩矢の国王との一騎打ちにしてもらえないかい？……つってもほかの奴らの大半はオレがのしちまったわけだが」

無傷なのは軍神殿と、細女のと目一箇の、それとさっき動き出さなかったもう一柱……って失神してる！？ああ、なるほどね。シアリングソロウの段階で気失っちゃったから、動き出さなかったんではなく動けなかったのか、納得。

「まあ、これじゃ全面戦争なんて仕掛けようもないんじゃないかい？この状況作っておいていうのもなんだが」

さすがにこれは断られることはないだろう。……あれ？なんかこれフラグな気がs「断るよ」やっぱりかこんちくせう

「なんでさ！？」

これはさすがに聞き返すよ！なぜにwhy!?

「理由は教えられないねえ。．．．でもあんたがこっちの条件を飲んでくれたら、考えないでもないよ?」

軍神殿は座った体制のまま杯さかづきを持ち、酒のせいせいか些いさか紅潮した顔つきでこちらに問いかけてきた。うはっ、なんとなくエロス!!!じやなくて

「条件ねえ、オレに軍門に下れとかはなしよ?オレは不惑の不従を信条としてるんで」

「あんななんか味方にしたら、気分で暴れだしそうじゃない。そんなことじゃないわ」

おや?てつきりこれかと思ったのだが．．．。ってか俺がバーサーカーみたいなイメージもたれてね?まあいきなり大技ぶつ放した奴に理知的なイメージなどもてませんよね、わかります。でもほんとに条件ってなんじゃろ?最初に一騎打ちって言ってあるからオレの加勢は無し、とかとんちんかんな条件を出してくるはずもないし．．．．．ううむ、わからん

「にゃー、それじゃあ条件ってななんだい?オレにできることなら、可能な限り飲むさ」

ニヤリ

・ ・ ・ ? 何ぞその笑顔は? っ て! ?

「バックステッポー!!」
ズドン!!

「あつぶねえ。もうちょっとでつかいたんこぶができちまうとこだったぜ」

いきなり頭上からさつきも食らった神氣たつぷりの柱が降ってきた。まったく条件の話をしていたって言うのになんだっていきなりこんな……。ああはい、なるほどね。これが条件ってわけですか、ちくせう。

「その表情からすると気づいてくれたみたいだね。あたしと本気で戦ってほしい、それが条件だよ」

さつきまで座って酒飲んでたくせに、いつの間にか立ち上がったステンバイしている軍神殿がはつきりと言い放ちおった。何でこんなことになってるんだろ、やっぱり神って嫌いだよ。オレは平穩無事に過ごしたいのにさあ

「はあ。その条件以外じゃだめなのかい？こつちとしてはもつと平和的な内容だとありがたいんだけど「だめだ」ですよ……。」

「軍神のあたしの目の前であれだけの力を見せてくれたんだ、お相手しなけりや八坂神奈子の名が廃^{すた}るってものよ!」

「いえ、もうどんどん廃っちゃってくださってかまいません」

って聞いてないね、伸脚運動まではじめちゃってもうやる気满满ですね。いつのまにか目一箇の達はちゃっかり避難完了してるしさあ。・・・仕方ねえ、腹あくくるかね。あ、屈伸まではじめた、素晴らしい乳ゆりいややめておこつ。

「準備はいいかい？そろそろはじめようじゃないか！」

ああもう、おもちゃを前にした子供みたいに生き生きした表情しちゃって

「わっかりましたよつと」

あの柱相手だと弓やナイフじゃ突破力不足だね。今回はディスプレイングレイト一つに絞るかあ。

「それじゃあ、猫又のマタタビ、いくさ」

「大和の軍神にして風の神、八坂神奈子！いくわよ！！」

s i d e o u t

- - - - -
- - - - -
- - - - -

いま、マタタビと神奈子の間はだいたい15メートルほどの距離が開いている。

マタタビは右腰の変形弓と背中の中・矢立、服の内に仕込んだ隠しナイフを地面に置き、左腰の刀『ディスプレイグレイト』に手をかけた状態で右足を半歩前に出し構える。

対して神奈子は構えのようなものを取らずに堂々とした様子でマタタビを見据えている

「・・・武器をださねえでいいのかい？さっきの柱とかさ」

マタタビが怪訝^{けげん}な表情で神奈子に尋ねる。当然と言えば当然だろう。いくら神とはいえ体を傷付けられないはずはない。はるか格下の相手の攻撃ならばわからないが、マタタビは一撃で数十柱の神の意識を奪っている。それだけの力があるのなら神の体とて容易に切れる。それを理解しているであろうにもかかわらず神奈子は武装しないのだ。

「武器を手放したのは自分も同じでしょう？不満なら自分の力で出させてみたらどう？」

どうやら神奈子は先ほどの術を見たうえで、マタタビの力量は自分

より下であると判断したようだ。おそらく自分の強さに相当の自信があるのだろうが、彼女は先の術がかなり加減して放たれたものであることを知らない。そしてこの発言はマタタビの機嫌を損ねることとなった。

「・・・そうか、人、じゃなくて猫には本気を求めるくせに自分は加減してあげる、か。上から目線だねえ。やっぱし神様つてのは傲慢だ、自分より上の存在を考えもしない。とりあえず、お前がオレより強いって考えをぶち壊す！」

マタタビは左腰の刀を抜かずに右腕を軽く後ろに引き、小さくアッパーのように振りぬいた

『魔神拳ましんけん！！』

ズバンッ！

拳の軌道をなぞるように拳圧が衝撃波となって放たれる

ヒョイツ

「おっと、また別の術ね。あなた結構器用なのね」

拳圧は速度こそ早いものの、直線的な弾道なうえ地を這うという性質上小さく跳ねることで容易に避けられる。しかしもとよりそれは攻撃目的で放たれたものではなかった。

「お褒めに預かり光栄だ、それならもつと見せてやんよ」

『封翼衝ほうよくしゅう！！』

神奈子の意識が拳圧に向かっているすきに、その陰から迫っていたマタビが納刀したままの刀の鞘を左手で持ち、軽く跳ねた神奈子に殴り掛かる

「なっ！いつの間に！？」

ガッ！

かろうじて反応が間に合った神奈子は右腕で防御するが、服越しとはいえ生身で受けたためにその個所にはダメージが残る

『せんろうが旋狼牙！！』

ザシユザシユザシユッ！ ブンッ！

「くっっ！」

マタビが鞘を振り上げると彼の目の前、神奈子を包むように真空の輪が現れ、彼女の体に爪痕を残す。真空波が消えた直後、追撃とばかりに蹴りが神奈子の左腹に迫るが

ガシッ！

「調子に、乗るなあ！！」

ブオン！

素早く体勢を立て直した加奈子が蹴りを素手でつかみ、そのままマタビを地面に叩きつけるために振りぬく。・・・しかし

「あらよつと」

「何!？」

叩きつけられる前に体をひねり、その螺旋を利用して神奈子の手から逃れる。そして起き上がりざまに左足で水面蹴りを放ち神奈子の体勢を崩し、さらに攻撃を重ねる

『せんしんきゃく潜身脚!!!』

ビュッ!

「ちっ!」

下から顎を打ち上げるように放たれる蹴りを体制を崩した状態から、無理やり体を後ろにそらして躲す神奈子。だがまだ終わらない

『さいじんれいが砕陣霊牙!!!』

ズオッ

神奈子を避けるように黒色の精神波が放たれ、その背後で方向転換しマタタビに引き寄せるように背中につかる

「しまっ」

『しそつてんげん四葬天幻!!!』

ガッゴッガガガドガッドン!

神奈子の周囲を回るようにしながら、蹴り・鞘での殴打を織り交ぜた連撃を加えるマタタビ。しかしまだ攻撃を加えられるはずなのに、自ら距離を取る。

「はあっ、はあっ・・・なんのつもり？」

畳み掛ける機会を自ら潰したマタタビに対して、今度は神奈子が怪訝な表情で問いかける。それに対し、今度はマタタビが堂々とした様子で答える

「ちょっとは立場ってものを理解してもらえたか確認したくてね」

「・・・立場？どういう意味かし」「気づいてないってことはないだろうが、言ってるよ」

とぼけようとする発言をかき消すようにマタタビが言い放つ

「お前さんは相手に本気でやれって言っておいて、自分は手加減し

た
」

• • • • •

「そして自信たっぷりになんか出させてみなさいよ？ 的な発言をしておいて、手も足も出せずにぼっこぼこ」

「ギリッ！」

「拳句の果てに自分の劣勢を認めようとせずにごまかすか。大した軍神様だよ、まったく」
いかにも相手を見下したような表情で言い放つマタタビ。対して神奈子は

「・・・ふう。悪かったわ、あたしの非を認める。」
一瞬表情をあからさまに曇らせたが、すぐに微笑を浮かべた表情になりマタタビに謝罪の意を示した。

マタタビも一瞬意外そうな表情を浮かべたが、次第に嬉しそうな笑みを浮かべはじめる
「にやはっ。あれくらいの挑発で激昂するほど餓鬼じゃないかい。ま、それくらいじゃないと一群を率いることはできないわな」

先のマタタビの発言は心底から神奈子を馬鹿にするものではなく、あえて怒らせることで本気を出してもらおうと考えてのものであった。

「確かにムカツとは来たけど、力量を量り損ねていたあたしが悪いからね。にしてもなんだってあたしを怒らせるような発言なんてしたんだい？ あんなこと言われたら、さすがにここからは全力でいかせてもらうよ？」

「上等さ。どうせやるんなら一步間違えりや死ぬような攻撃が来なけりや燃えねえよ。それにお前さんも全力出さずに負けたら煮え切らないもんがあるだろう？」

先ほどは相手の尊大な態度を非難していたマタタビだが、自分自身はあくまで負けることはないと言い放つ。普通なら妖怪が神にこのような口を利けるはずもないのだが、いかんせん彼は妖怪という枠から逸脱している。

彼の強さの要因の一つは、妖力の質と量の高さにある。

妖怪の妖力の強さとは、差こそあれど大抵は妖力量と妖力質の掛け算で決まる。これは人などの持つ霊力や、神の持つ神気にも言えるが多いほど強い。世界の頂点に立つ神、いわゆる主神と呼ばれる者たちと、地にあふれるさまざまな由来を持つ神、八百万の神や土着神などと呼ばれる神の間では、およそ100倍にも達するほどの差が存在する。マタタビは妖怪でありながらその主神たちの神気と同

程度の強さの妖力を持つ。もし彼が加減をせず妖力を解放したら、それだけで十数メートル程度のものは吹き飛ばされるであろう。しかし今現在は大妖怪程度の強さに制限しているため、これが要因とはならない。

何よりも彼の強さを構成しているのは技術である。彼自身はもともと剣術などの才能はないが、あまりある時間を用いて修行を続けていたために達人と呼ばれる存在すら軽く凌駕している。妖術に関しても、自分独自の構築・展開方法などを模索し続けてきたため、少ない妖・魔力から多大な威力を出す方法を作り上げている。さらに言えば彼は自分以外のものが使う術式を【理解】することにも長けている。

しかしそれだけではさすがに大妖怪程度の妖力で全力の神に勝つのは難しい。なぜ彼がこうも余裕を持って戦えるのかと言えば、彼が持つ異世界の英雄譚の知識の影響がある。この知識とはただ単に『テイルズオブシリーズ』このような出来事があった』だとか『こんな技術がある』とかいったものではなく、物語に登場する英雄たちの経験や感情の起伏、人格、思考の癖などが『知識』として彼の頭の中に入っているのだ。それは言い換えれば世界を救うような英雄の力が彼に詰まっているといってもいい。彼自身に才能はなくとも、英雄の戦い方を『再現』することで達人を超える技術を身に着け、英雄の知力を『再現』することで様々な術を放つ。英雄の経験による判断で戦闘を優位に進める。力は弱くとも何十もの英雄が集まっているものと考えれば、この強さにもうなずけるだろう。

これを見ると英雄の知識がなければ戦えないようにも見えるが、あくまでこれは再現して戦う場合の話である。彼の妖力操作の技術は先天的に高く、身体能力も高い。実際はそれを使って自分自身の戦

い方をしたほうが強いのだが、彼は英雄になりきって戦うのが楽しいため、長い時間をかけて知識を生かした戦い方を極めてきたのだ。長々と語ることとなったが、ようはこの猫又の強さは理不尽であるということである。

それでは、戦いに戻るとしよう。

先のマタタビの言葉に対して、神奈子も嬉しそうに笑顔になりしやべりだす

「そうかい。今の体調でどこまでいけるかわからないけど、燃えさせてやるうじやないのさ！」

この言葉が示すように、すでに神奈子は先までの戦いであちこちに打撲などの怪我を負っている。マタタビが抜刀していないために刀傷などは受けていないが、それでもこの傷では全力で体を動かすことは難しいだろう。それでもまだ戦う姿勢を崩さないのは、彼女も強者との戦いを楽しみたいのであろう。

「考えを改めてくれたんなら仕切り直しだ、ちょっと待つてな」

「？」

いぎ、戦闘再開！かと思いきや待ったをかけるマタタビ。そんな彼の足もとには、彼が先ほど地面に置いた武具がある。距離を開けた際にそこへ戻ったのだろう。彼はその中から杖『B・Cロッド』を拾い上げて詠唱する

「こぼれた酒の水気を使ってF O F変化！ 清純なる命水よ」

『メディテーション！』
ポウッ

淡い水色の光が神奈子を包む。するとあちこちについていた傷跡消えていく。

「えっ！？な、なんだいこれ！？傷が治った！？」

「回復術さ。こいつは傷を治して、同時に解毒などを行える便利な術だよ。これで酒も抜けただろう？」

マタタビがいやらしい笑みで神奈子に問いかける。

「・・・ああ、確かに頭も軽くなった。重ね重ねすまないねえ。これから先はきちんと本気で殺^やるからさ」

神奈子の表情は凜々しく、神としての貫録を感じさせるものとなる

「にやはっ、いいねえ。戦^やるからにはやっぱこうじゃなきゃ！先手は譲るよ、レディーファーストだ！！」

おおよそ通じないであろう横文字を使うマタタビ、しかしその表情

は本気で楽しそうである。

「れでいーふぁーすと？ってのはわからないが、仕掛けさせてもらうよー！」

加奈子が宣言とともに右手を掲げる、マタタビはそれだけで察して刀を鞘ごと頭上に掲げる
ガキン！！

掲げた刀とマタタビをつぶさんと降ってきた御柱おんばしらが激しく衝突する。マタタビの体調を優に超える大きさの柱の落下を受け止めた刀の強度はすさまじいものがある。

「~~~~っ！いつてえ〜！そうそう、こっじゃなきゃな！っと！」
ブオンッ！

先ほどの意趣返しとばかりに、防御に気がいつていたマタタビに向けて神奈子が御柱を投げて追撃する。しかしマタタビは難なくかわす。

「甘い甘い。お？それが戦闘態勢かい？」

回避したマタタビが神奈子のほうを向くと、彼女の背には4本の御柱が放射状に配置している。見ようによっては背負っているようにも見えるかもしれない。

「そうさ。あんた相手にちまちまやってるわけにはいかなそうだからね。一気に決めさせてもらうよー！」

神奈子が今度はマタタビに向けて腕を突き出す。すると背後の御柱の一つがマタタビに向けて飛び出す。

「短期決戦かい。そんならこっちも激しくいくぜ！」
マタビは左手に持つ納刀状態の刀に流している妖力を増やす。すると杖や変形弓の時とはまた違う力があふれだす。

『エレスライズ』

「その柱がどんぐらい丈夫か確かめてやるよ！一閃！！すべてを切り裂く！！」
ザン！

刀を抜き放ち、そのまま横に一閃。さらにその刀を回転させ、右下から全身の力を使い跳躍しながら切り上げる

『獣破轟衝斬！！！！』

ギヤリギヤリギヤリ！ズパンツ！

この技は『大切なものを守る者』の第一秘奥義である。それを用いても切るのに一瞬で済まないのは、御柱の強さを示している。

「にやははっ、かつてえなおい！つとあぶね！？」

『崩雷殺！！』
ほうらいころ

御柱が両断されたことに一瞬驚いた神奈子だったが、すぐさま飛び上がったマタタビの真下から最初に放った御柱を打ち上げ追撃を狙う。しかしマタタビは刀に雷を纏わせ、突き立てることによって勢いを弱める。さらに放たれていた御柱を避けるために、足元の御柱を蹴り神奈子のほうへ駆ける。

「近づかせないわよ！」

神奈子はさらに攻勢を強める。マタタビの武器は刀のみのため、遠距離では有効な戦闘手段が少ないと考えたのだろう。その判断は正解であった。マタタビにも遠距離攻撃の手段はあるものの、一瞬のためが必要なものばかりであった。そのため間断なく攻撃が打ち込まれているときは放つことができない。そのため神奈子に接近しようとしている。

「よっ！あらよ！ほいさっ！」

掛け声こそふざけているが、彼に向かって何本もの御柱や何重もの霊弾が連続して放たれている。それをとときには躲し、時には撃ち落しながら徐々に神奈子へと近づいていく。しかし近づくにつれて、さらに攻勢は激しくなっていく。

「はあっ!!」

『しょうおうしん
衝皇震!!』

神奈子の霊弾が正面から迫るが、刀を前方に薙ぎ払い衝撃波でかき消す。

「せいっ!!」

『おぼろつきよ
朧月夜!!』

全方位から霊弾と御柱に狙われると、横に一回転しながら満月のような軌跡を刀で描き、霊弾を消し御柱が勢いを失った隙にさらに距離を詰める。

次第に二人の距離は最初の半分ほどまで狭まっていく。これ以上つめられるのは危険と判断した神奈子は、一気に締めに入る。

「これで・・・!!」

神奈子の周囲に二十を超える御柱と、百を超える霊弾が展開される。

「終わりだあ!!」

マタタビから見れば、ほぼ隙間なく放たれる攻撃であり、通常ならこれで積みだろう。それでも彼には問題はなかった。

「最後の一撃ってわけか！ならこっちも相応の技を見せてやるよ！
」

刀を鞘に一度おさめ、そのまま神奈子の攻撃に向かってかけていく。

「なっ！？死ぬ気！？」

「誰が死ぬか！？遠慮はしない！けどちょっと省略！！」

『斬空刃！！無塵衝！！』

ザザザザザザザザザザザンッ！！

全力の疾走から急停止に近い形で立ち止まり、居合の要領で刀を抜き放ち、以前放った『裂空刃』のように連続で真空波を放つ。本来なら対象を蹴りと鞘の殴打で吹き飛ばすのだが、今回は無理だと判断して短縮したようだ。しかしそれでも威力は圧倒的で第一秘奥義では切るのに手間取った御柱、しかも大量にあるそれを一瞬で細切れにしたうえにすべての霊弾をかき消した。この技は第三秘奥義であり、一度世界の敵を倒した際にも使用された技でもある。

神奈子の全力の攻撃を切り抜けたマタタビの前には、疲弊した神奈子の姿がある。全力の攻撃で消耗したのだろう。マタタビは決着をつけるため神奈子に駆け寄る。

が。彼の足もとは『シアリングソロウ』で開いた穴があった。
ガッ！

「ぬるぽ！？くぁwせdrftgyふじこip！！」
ゴロゴロゴロゴロ！！

勢いよく駆け出そうとした分、すさまじい勢いで転がっていくマタ

タビ。その間に神奈子はマタタビから距離を取り、間に藤の蔓を張り巡らせて時間稼ぎを図る。

「はあっ・・・はあっ・・・。儲けたね、少しは休めるよ。」

藤の蔓には鉄を錆びさせる力が込められている。マタタビの武器が鉄だけで作られているとは思えないが、それでも鉄が含まれていれば何かしら効果があると考えたらしい。

「おうふ・・・いてえ。全力でこけちまった・・・。ん？なんだあの蔓は？」

ようやく起き上ったマタタビが藤の蔓の存在に気付く。そして注意深く何かを探るように眺めはじめる。

「んんん・・・。なるほど、鉄を錆びさせる概念が組み込まれてるな。ディスインテグレートこいつには鉄は使っていないが、触らんに越したことはないな」

藤の蔓の力を瞬時に見抜き、理解する。これは英雄の力抜きで彼自身の【能力】の一端である、・・・のかもしれない。

立ち上がり軽く足元をならした後、おもむろに刀を右上に掲げて技名を叫ぶ

『はてはめい霸道滅封！！』

ゴオッ！！

右肩の上からいったん背後を通して振り下ろされ、『魔神拳』の時のように刀を振り上げる。だが放たれるのは強力な貫通力を持った炎。瞬間に藤の蔓を焼き落とし、神奈子への道を開く。続けざまに、振りぬいた刀を目線の高さに構え足に力を籠め突進の準備をする。

『風牙絶咬！！』

- - -
- - -
sideマタタビ

『霸道滅封』の炎が消える前に、神速の突進刺突『風牙絶咬』で炎の中に突っ込み、炎の射程距離からぎりぎり外れるようにしていた軍神殿の目の前まで一気に突き進む。それでもって喉もとすれすれに切っ先を突き付けて終了、かな？

「降参、するかい？」

「っ！？・・・ああ、参ったよ。」

唐突に突きつけられた刀に驚いたみたいだけど、すぐに察して降参してくれたね。いやあ、これでまだ終わりじゃないとか言われたらどうしようかと思ったよ。おもっくそこけたせいでなんか気分が冷めちまったからな。

「・・・あたしも強いつもりでいたんだけど、完敗だね。結局一撃もまともに入れられなかったよ」

ふむ、天狗になつてた鼻が折れたかな？まあ、これからまた強くなれるんじゃないかね。何はともあれ

「これにて交渉、完了だね」
チンッ

十歩目（後書き）

一応書いておきますが、最後のチンツは納刀の音です
けして夜雀が現れたわけではありません

十一歩目

ぷひっ、やっとこさ終わったぜ。戦闘は当分こりこりだなあ、もつと自由に武器振ってるほうが気楽でいいや。

「・・・はぁ~~~~、結局本気出してからもまともに戦えなかったわ。一撃ももらわずに負けを認めてしまったのなんて初めてよ」

軍神殿が不服そうな表情でつぶやく。まあ、オレ相手なら仕方ないんじゃないかねえ。最強だし。でもここ最近の相手の中では一番楽しめたな。この頃は知性の低い妖怪くらいとしかやってなかったから、久々に齒ごたえあったぜ。

「・・・はっ！？洩矢国の王もあんたぐらいに強いのかい？
だとしたらあたし結構まずいんだが・・・」

何かに気付いた表情をしたのちに、冷や汗だらだら流しながら問いかけてきた。ああ、オレに負けたから一騎打ちはほぼ決定だもんね。その上相手がまた俺みたいな理不尽級かもしれないと考えたら、そらあ焦るわな。

「それについては安心しな、戦ってみた感じお前さんと洩矢のにはそこまで強さに差は感じなかったよ」

言つと軍神殿は安堵の表情を浮かべた。まあ軍神がそうそう負けるわけにはいかねえもんな。にしても洩矢のがオレぐらい強かつたらつて・・・、もしそうならこれぐらいの島はすでに洩矢国の傘下になってるだろ。この（大妖怪級程度の）状態でも、この島でオレに勝てるのはもはや天照のぐらいじゃないかねえ？でもあいつは戦闘向きの性格じゃないし・・・。

あ、いた。この状態のオレに勝てるやつ。前に会った時にはしばらく大和の世話になるとか言つてたけど、今回はいなくて助かつたぜ・・・。あ、でもこの思考がそのうち会つフラグにしか思えない・・・。

「ま、何はともあれこちらの提案は飲んでいただけかい？」
これ以上あいつのこと考えてると、ホントにそのうちできそうだから思考を変えよう。

「ああ、わかつてるよ。敗者は従うのみだ」

うん、殊勝な心がけで何よりだ。ふてくされた表情がかわゆい。
・む、さっきまで戦闘のいざこざでよく見てなかったが
「お前さん、見れば見るほど美神^{びじん}だねえ」

いやあ、この世界は力量と顔の良さが比例すのかねえ。洩矢のは可愛らしいし、天照のはおっとり美人。あいつも見た目は整ってるし、ゼウスやオーディンもちと老けてるがイケメンだ。なのにおれはこの目かよ、なに？これって贗品？教えてエロい人。

「はあ？なにいきなり口説こうとしてるんだい？少しは話の流れを考えなさいよ」

おうふ、辛辣。これが天照のとかだったらもつと照れたり可愛らしい反応してくれるのになあ。まあでも、このぐらいの年齢に少女らしい反応求めても無理kドゴオ！！a・・・。やつぱり、神様の・・・、読唇術スキルは、・・・デフォですか？そして・・・、なぜ、戦闘中よりも・・・、こういった攻撃のほうが、強力なんですか？

「げふつ、・・・オレの腹痛が有頂天」

「あゝ、なんかついイラツとして攻撃しちゃったけど、大丈夫かい？」

・・・謝るくらいなら最初からやらないでくれ。オレ攻撃力と回復力が高いけど、防御は基本的に紙装甲なんだから。死にはしないけど物凄く痛いんだよ・・・。

「まあ、悪いことをしたとは思ってないけどね」

「お前さん・・・酷いぞそれは」

「まったく、マタビ様が関わるとなんでも喜劇のようになってしまえますわね」

歩いて近寄ってきた細女のが右手を頬に当てながら やれやれ
って感じで言うてくるけど、仕方ないじゃない俺だもの！あ、痛い
の治った。

「悲劇よりも喜劇のほうがいいだろう？みんな笑顔が一番さ。特に
女性と子供は」

野郎はどうでもいいや。

「・・・あんだ、さっきも思ったけどいくらなんでも丈夫すぎやしないかい？二発も御柱をまともにくらってケロツとしているなんて、
いくら大妖怪でも異常だよ」

あ、そこ突っ込んだじゃう？ただマツハで自然回復しているだけなんだけど。

「いー」マタビ様に通常を求めてはいけませんわ、八坂様。この方は存在がすでに異常なのですから」

いくらなんでもひどくないか細女の！？」

傷付くよ？いくらオレでもハートに傷がつくよ？ってあれ？いつの間にかまた話が脱線してる！

「話を戻すとして、とりあえず細女のはあとでエクレーラルムな？んで軍神殿、洩矢のとの一騎打ちは今日から・・・えっと八日後の夜明けからでいいかい？」

オレはもともとこういつた話をするために来たんだからさつさと済ませないと。じゃなきゃ物語が進まないじゃないか！え？メタイ発言すんな？知ったことか！

「八日後・・・ええ、かまわないわ。一騎打ちならもとよりこの身一つあればいいしね。その間にそこらに転がってる邪魔なモノ（モブ神）を本国に送り返してしましましょう」

軍神殿、モノ扱いはひどくね？まあ同情する気もないが。あ、細女の顔色が真っ青だ。そんなに俺の術くらうのが怖いのかね？殺しはしないってのに

「よし、なら一騎打ちの際にはオレが立会人になるさ。だから周りへの被害は考えず全力で戦^やってくれや」

符と合わせれば洩矢の領地ぐらいならアレで囲めるはずだからな

「あんたが立会人って・・・すごく不安だけど、わかったわ」

不安って何ぞ。俺ほど頼りになる存在はいないと俺の中ではもっぱらの評判なのに！はい、自画自賛ですなわかり

「よし。とりあえず今決めるべきことはこれぐらいかな。あとは死合いの前にもこまごまと伝えらると思っさ。あ、場所は洩矢国の社の真上に来てくれや」

「はあ！？いや、そんなところで戦ったらそっちの国に被害が出るんじゃない・・・」

軍神殿が驚いたように聞き返すけど、そんなもん俺が出させるわけないってえの

「だからそれは俺がどうにかするから気にすんなって言ったろい」

まったく、人の、じゃなかった猫の話はちゃんと聞けっての。

「神々の戦いを一匹でどうにかするって・・・でも完敗した私がどうこう言える話でもないか」

ん。そういうことさね。

「まあ、それじゃあさつさと俺は帰るさ。こんな敵陣の真つただ中にいるなんて、怖くて生きた心地がしねえからな」

ハハッ、我ながらなんという皮肉。さてさて、さつき置いた武器を回収して、つと。………ん？

「これは……緋緋色金か！？いや、少し違うな。しかしこれほどの硬度の金属をどうやって加工しているのだ？おそらく熱への耐性も持っているはずだ、生半可な熱量では打つことすらできぬだろう。我でも持たぬ技術をふるうとはさすがマタタビ、侮れん！！」

目一箇の。話に参加しないで何してんのかと思ったら、オレの武器を観察してやがったのか。今見てんの『デイヴァインキャノン』だな。まあ、技術の進歩には先駆者の模倣も大切だからな。咎めはしないさ。

「ぬ？こつちの小刀に使われている金属も見たことがないな。鍛冶の神である我すら知らぬ金属を用いるとは………いったい奴は何者

なのだ!？」

そっちのナイフは『B・Cロッド』の付属品の、ミスリル銀製の名無しの品だな。ちなみにオレはただの旅好きな異常に強い猫又です。にやおん。

「ぬぬ?さっきの奇妙な形の刀は変形するのか?ただ打ち上げるだけではなく、このような機構まで作るとは・・・あ奴と我の差はいったいどれほど離れているのだ・・・」

おお、『デイヴァインキャノン』の変形機構に気付いたか。鍛冶の神だけあって、さすがに武器に関しては鋭いな。ちなみに今の差は、デリス・カーラインと地球が一番離れた時ぐらい?がんがれ。にしても、もう真後ろまで歩いてきたのにいつまで熱中しとんだ、こいつは。はよ帰りたいから武器返せ。

「ぬおお!?!矢じりに使われている金属さえ極限まで鍛えこまれている!ただの鉄にこれほどの高度と輝きを持たせるとは!！」

・・・いいかげんに・・・

「なんと!?!こり」気づけ阿呆が!!!」ガシッ!　ぬ!？」

『礫岩迫落撃!!!』

ブンッブンッ!ズドオン!!

目一箇のの後頭部をわしづかみにし、ジャイアントスイングのよ
うに回転したのち地面にたたきつける。本来は足首をつかんで行う
技だけど、まあ神なら首折れて死んだりしないだろう。ほら、ぴく
ぴく痙攣してるし。

ちなみに今の技は『シスコ^ッn』……もとい『仲間^{セネル・クーリ}を知った海の
守人』の中量級までに対する投げ技だ。今は再現する武具は持つて
ないけど、格闘技術だけで行える技はある程度までならいつでも使
えるのよね。完全再現にはやっぱり武具が必要だけとさ。

「ったく、人の武具に夢中になりやがって。見るのは構わんが持ち
主に迷惑はかけんなよ」

やれやれだぜ、まったく。変形弓に矢立に杖にナイフに符、全部
持ったな？……うん、よし

「さて、それじゃ軍神殿、次は戦場で会おうや。もっとも戦うのは
俺じゃあねーけどな。んじゃ、おさらば」

ん、今から洩矢の社に帰ったらさらに一日かかって残り七日か。
そんぐらいあれば準備は余裕だあね、焦らずゆっくり帰りますか。
「にやにや」　　「と」

いい星だねえ。……ん？なんか忘れてるような……まあ、

いいか。

s i d e o u t

- - - - -

s i d e 神奈子

天鈿女たちがマタタビと呼んでいた猫又は、最低限の要件だけ伝えたと歌を口ずさみながらさつさと帰って行ってしまった。・・・結局あの妖怪は何者だったのかしら？何か知ってそうな天鈿女に聞いてみようかしら？

「なんだか嵐のような妖怪だったわね。そういえばあなたたち、あの妖怪と知り合いだったみたいけど？」

「ええ、あの方とは顔なじみですわ。そこで無様に悶えている方がどのように知り合ったかはわかりませんが、私がマタタビ様と出会った時もなかなか凄まじかったですわよ。お聞かせいたしましうか？」

この子、かわいい顔して結構毒舌ね……。でもあの妖怪が以前どのような行いをしていたのかは、なかなかに興味がある。自分よ

り強い存在など久しく見ていなかったせいだろうか。

「ええ、お願いするわ」

「かしこまりました。・・・ええと、それではまず天照大御神様が、
あまてらすおおみかみ
以前に天岩戸の中に引きこもってしまった件についてはご存知ですか？」

当然知っている。引きこもってしまった理由は確かあのお方の弟であるスサノオノミコトが、天照大御神様が大切にとっておいた大福を食べてしまったせいだと聞いている。話を聞いたときは全力で呆れた覚えがある。

しかし、天照大御神様が引きこもってしまったことによる被害は甚大で、日の光は弱まり妖怪が力を強め、死者と生者の国の狭間があいまいになったりと大変なことになっていた。かくいうあたしも狂暴化した妖怪の鎮圧に駆り出されていたのだ。ほどなくして天鈿女たちが天照大御神様を引きずり出して、問題は解決されたと聞いている。

「知っているわ。あなたより古株なのだから、話ぐらいは、ね」

「あら、失礼いたしました。それでマタビ様についてなのですが、私たちが天照大御神さまを天岩戸からおびき寄せようと宴会の準備をしているところに、いきなり「イェアアアア！」と叫びながら乱入してきたのですわ」

「・・・・・・・・・・は？」

え？何その表現しがたい叫び声は？あいつも妖怪のはずだし、狂暴化でもしていたのかしら。

「それと、たしかその時はウサギの妖獣を連れていましたわね。因幡の、と呼ばれていましたわ。そのお二人がいきなりやってきて、
「なんか面白いことが起きそうな気がするから見学に来ました」と言って、くつろぎ始めたんですの」

聞いた限りでは別に狂暴化していたわけではなさそうね、とする
とあいつは素でそれなのかしら？にしても見学に来たって・・・・・・・・
・、あいつもその連れの因幡のとやらも神をなめきってるわね・・・・
。

174

「そこで準備の邪魔になると考えた天手力雄神様^{あめのたちからおのかみ}が誅殺しようとなされたのですが、「野郎がオレに近寄んなあーーーーー！！」と叫んだマタビ様に殴り飛ばされてしまわれて……。あ、天手力雄神様はさらにウサギさんによって首まで埋められてましたわ」

「ちょっと！天手力雄神っていえば神の中で一番の強力^{ちから}の持ち主じゃないか！！それを一撃でのしたのかい！？」

山を持ち上げたと言われてるのよ彼は！？

「ええ、一撃で。顔が変形してとても面白いことになってましたわ。

そしてすぐさま私を含めた残りの神も臨戦態勢に入ろうとしたのですが、「こつちに戦う気はねえっつーの、今は正当防衛だろ？だから武器を下ろせ、えぐるぞ？」と、マタビ様がすさまじい殺気をまき散らしながら言われまして、そこからは誰も手出しをしようとしませんでしたわ。あそこの一柱を除いて」

どれだけ常識はずれなのよあいつは・・・、それとどうでもいいけどこの子芸達者ね、さつきから真似してる時の声とか喋り方があいつにそっくり。

「すさまじいわね・・・あら？その場にあれ（目一箇）もいたの？」

「ええ、そのころすでに顔見知りだったようでして、先ほどのように斬りかかって剣を折られて最後に天手力雄神様みたく殴り飛ばされてましたわ。それと埋められていました」

つまりまったく進歩してないわけね。まあ、あれの話はどうでもいいわ。

「それで、そこから？」

「そのあと本当に襲ってくる気配はなかったので作業を再開したのですが、さすがに二柱を欠いたために準備に手間取っていましたが、すると「にゃー、なんか大変そうだし手え貸すぞ？この事態を招いたのはオレの責任もあつからな。ほれ、やるぞ因幡の」「え？なんであたしまだ痛い痛い！耳引っ張らないで、手伝うから！」と言ってお二人が手伝ってくださったんですの」

「妖怪が神を手伝う？本当に珍しいわねあいつの行動は」

「ええ、ですがあの時は本当に助かりましたわ。あの方は料理から大工まで宴会の準備をほとんど御一人で終わらせてくれましたの、そのため結果的に予定より早く天照大御神様を天岩戸からおびき寄せることになりました、最後に岩戸から天照大御神様を引きずり出す役目もマタタビ様が引き受けてくださりました。「さつき殴り飛ばした奴の仕事だったんだろ？ならオレが引き受けないのは無粋つてもんだろうよ」と言われまして」

やはり話を聞くと悪い奴ではないみたいね。行動が突拍子もないだけで。

「ですがこの後またひと騒動ありまして……………」

「…………？あいつがまた何かやらかしたのかい？」

「いえ、岩戸から天照大御神様を引きずり出していたいたのです………どうやら天照大御神様とマタタビ様も顔見知りだったようでして、「お前さんは何を大福程度で引きこもつとんのじやい！」「程度ってなんですか！？マタタビさんが作った大福おいしいから、すごく楽しみにしてたんですよ！」「お前さんが引きこもつたせいで周囲にどんな被害が出たと思ってるんだ！？大福

程度いつでも作ってやるつての！」「え！？そ、それって婿入り宣言ですか？・・・ですが私は神であなたは妖怪・・・でもこの胸の暖かさは・・・」「にゃ！？な、なんだ、なんか妙なふらぐが立った気がする！やばい、逃げるぞ因幡のーーーーー！！！！」「ちょ、待ってよ兄貴ーーーー！！！」と言った寸劇を始めてお二方は走り去ってしまわれましたの」

「・・・・・・・・・・はあ？」

いや、わけがわからないんだけど？

「私とてよくわかりませんわ。そのあと天照大御神様はしばらく目をつぶってブツブツつぶやいた後「きめました、マタビさん、まずは健全なおつきあいかな・・・あら？マタビさんは何処に？」と不思議そうにしましたわ。その日以来、あの方とはたびたび会いますがその都度こんな出来事ばかり起こってますわ」

・・・・・・・・だめだ。もうほんとに理解ができない・・・・・・・・でも

「つまり、あいつに関しては深く考えずに行動するのがいいわけね」

「ええ、あの方とは真面目に付き合っただけ馬鹿を見ますわ。ですが、あの方とあれば楽しみには事欠きませんわよ？」

はあ。あいつについて知りたいと思って話を聞いたのに、よけい理解できなくなっただわ。でも、あいつがあたしよりも強いのは事実

- - -
- - -
Side マタタビ

「よしつと」

さつき細女のと軍神殿が立っていた中間あたりに矢を射ったから、誰にもあたってはいないだろう。約束を破るのは粹じゃねえからな、やるって言ったらきっちり攻撃しないと。

「さつき忘れごとをしたと思ったのはこのことだけだよな。いやあ、気が付いてよかったよかった」

細女にとっては忘れられてたほうが良かったらうけどな。

「さて、それじゃあ皆様方。次のお話までお達者で」

ん？話のキャラクターが読み手に話しかけるなって？知るかそんな決まりごと！

十一 歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします

十二歩目

「時は流れまして決戦の日！！会場は洩矢の社前やしらからお送りいたします！」

「いきなり何言ってるのさ、マタタビ」

はい、猫又のマタタビでございやす。前回から日にちは変わって、洩矢のと軍神との一騎打ちの日になりました。いやあ、小説って便利。

「さて、こちらにはすでに現在チャンピオンである洩矢諏訪子さんがスタンバイしております。チャンプ！現在の心境は？」

「だから何言ってるのかわからないんだけど？ちゃんぶって何？」

「はい！ありがとうございます！昨日の夜に、侍女長が隠しておいたお酒もこっそり飲んだし調子は良好ということでした！」

ギリ

「ひっ！ちょ、ちょっとなんでそれを知ってるのさ！？しかも今言うこと、それ！？」

侍女長の嬢ちゃん怖え、ものすごい睨んでるよ。やっぱりあの子

が戦ったほうがいいんじゃないか？すごい闘気出てるぜ？あ、ちなみにオレと洩矢のと侍女長のほかに、社にいる侍女の嬢ちゃん全員集合してるさ。

「え、ちなみに本日まで私共が何をしてたかという、まず洩矢の戦争のことを黙っていたのを侍女の嬢ちゃんたちに怒られているのを見て爆笑」

あれは面白かった。かわるがわる交代に説教されていたらしく、オレが発してから戻るまでずっと正座しっぱなしだったらしい。足をつつくたびに「ひぎい！」って悲鳴あげるから、しばらく遊び倒したよ。

「それからしばらくは洩矢のが一騎打ちに向けて鍛錬し始めたので洩矢のがやるはずだった政を侍女の嬢ちゃんたちと分担してこなし、みんなに料理教えたりして今日まで過ごしてきました」

客人に、しかも妖怪に政治を任せるのはどうよ？とは思ったけど、嬢ちゃんたちが必死に働いてるのを見て自分だけのほんとしてるのは粹じゃなかったからね。まさか政をやる羽目になるとは思わなかったけど。

「何なのその説明口調は。それよりあの子の視線を止めて……・だんだん死線になり始めてるから……。これって今から戦いに臨む上司に向けられるものではないよ、絶対……。」

あら、ほんとに。でもその死線が向けられてるのはお前さんじゃないんだけどねえ。気づけよ洩矢の、そこまで侍女長が怖い。い

やまあ、オレも怖いけど。

「ようこそおいでくださいました、軍神殿。洩矢の王に変わりました、此度の決闘の見届け人を務めさせていただきます拙せつがご挨拶させていただきます」

オレと侍女長の嬢ちゃん以外は気づいてなかったけど、すでに軍神殿が一柱でやってきていた。やっぱり天細女達は大和に帰したみたいだね、まあ余計な軍勢連れてくるようならそっちの相手は俺がしてたがな。

「・・・あんたがそんな丁寧なしゃべり方をするとすごく不気味ね」

あら酷い。ちょっとふざけただけなのに、そこまで変なものを見る目をしなくなっただけじゃない。こうなったら意地でも続けてやる。

「気分を害されたのなら謝罪させていただきます。ですがこれが拙の本来の話し方なので、ご容赦願いたい」

「こんな時までふざけられるマタビの根性はすごいと思うよ・・・。私からしても気味が悪いからそれ止めてくれない？」

洩矢のにまで否定されてしまった。くやしい・・・でも感じない。
ビクンビクン

「……にや？　なんか軍神殿が洩矢のを見て「？」って顔してんなあ。どないしたんでしょ。」

「……なんでこんなところに子供が？」

ブチッ！

「あ、それ地雷」誰が起伏が全く見られない見事な直線体系を持つ小柄でとつてもかわいいう幼女だ――！――！！！！」そこまで言われてねえし何気に自画自賛してんじゃねえよ洩矢の」

あゝあゝ、これはめんどくさくなりそうだね。

「え？ 洩矢のつて．．．もしかしてこの小さな女の子が洩矢神！？ あたしはその後ろで殺る氣に満ち満ちた表情をしてるのがそうだとばかり．．．．．」

同感だよ、軍神殿。侍女長の嬢ちゃん、殺気はもはや低級の神なら全力ダツシュで逃げ出すぐらいになつてゐるからね。武神と言われても違和感ないんじゃないの？ かくいうオレも尻尾がモファってなつてます、モファって。

「ちーがー！うー！私が神様！！洩矢の国の崇り神、洩矢諏訪子！！な

んでみんな体つきで判断するんだよ！！神様は胸と尻が大きくなっちゃいけないのか！？あんなの余計な脂肪の塊じゃないのさ！！」

叫び訴える洩矢の目尻から、特に話で胸や尻について言い出したところから血涙が流れ出す・・・さつきから体系については何も言われてないのに自分で言っで自分で傷付いてんな。確かに侍女長の嬢ちゃんはナイスバディだけどそこで判断したんじゃないと思うぞ？なんというセルフバーニング・・・侍女の嬢ちゃんたちのツルペタ組も涙流しながら同意してるし。

「脂肪の塊・・・ねえ。ふっ、持たぬ者のひがみは無様としか感じないわね」

軍神殿が哀れなものを見る表情で洩矢のに言い放つ・・・
「つておiiiiiiiiiiii！！ノっちゃうの！？その話題にあんたノっちゃうの！？そこは何言っでんの的な対応で流して話の軌道を修正するところだろ！？」

「諏訪子様・・・敵に同意したくはないのですが、今のあなた様が何を言おうとそれは負け犬の遠吠えにしかありません。ですが耐えてください！いつかは・・・いつかは大きくなるはずですよ！！」

侍女長——————！！きさまもかあああああ

ああ！！誰か、誰かこの流れとめてくれえええええ！！このままじゃ話が進まん！・・・・・・・・え？オレがとめろって？ハハッ、無理に決まってるだろうが、見てろ？

「お前らしいk」「男は口を出すな（出さないでください）！！」「・・・・・・・・はい、すいませんした」

・・・・・・・・な？こりや沈静化するまで待つしかないな・・・・・・・・あ、そうだ。今のうちに下準備終わらせちまおう。

「乙女の会話にや混ぜれない」 だから一人でお仕事さ・・・・・・・・
「はあ」

うん、落ち着いて準備ができると思えば「マタタビは小さな女の子の魅力は老けた女とは比べ物にならないって言ってたよ！」・・・・おもえ「あの妖怪ならこの前あたしを口説こうとしたわよ！」よし、もっと離れよう。

猫又移動中
・
・
・
・
・

「ふう、このへんでいいかねえ？」

社のある山の裏にまで来ちまったけど、やっとこさ静かな場所を見つけたぜ。そこそこ規模の大きい術を使うから多少は集中したいからな。・・・さて

「取りい出しますは2枚の符。この符はただの符にあらず、向かつて右は『術の領域を広げるのに必要な力』を、左は『術の効果時間を延ばすのに必要な力』を生み出す世にも不思議な符でございます」

隅々まで真つ赤に染まった二枚の符、赤い理由はオレの血をまんべんなく染み込ませてあるためさ。物質への能力貼り付けつつてもなんにでもほいほい貼れるわけじゃなくて、ある程度の強度がないと物質が能力に耐え切れず崩壊しちゃうんだよね。だからオレの血を染み込ませて、その血に能力を張り付けるのさ。

符こいつを使うメリットには、事前に作成しておけば少ない妖力消費量で複数回能力が発動可能なことや武具などに比べて持ち運びが容易つてのがあるけど、逆に作り置きしなきゃいけないし武具より発動可能時間が短い、さらに使い捨てつつ一難点があるのよね。発動時間については全体に血が染み込んだこの符でも半日が限度つてここだね。それぞれ20枚は作ったから大丈夫だと思っけどさ。

「此度こたひ使います術は『魔界ティア・グランツに咲く花』の第二音素譜歌、すべてを守る響きをどうぞお聞きください」

客もいないのに演劇口調なのは御気になさらず。

杖に張り付けた能力により、この世界には存在しない力『音素^{フォニム}』
が発生。今回は水の特性を持つ第二音素^{セカンドフォニム}を使用する。神の二柱は対象から除外、構築する術式に符によって発生する二つの力も組み込んで……と。

「堅固たる守り手の調べ クロア・リュオ・ズエ・トウエ・リュオ・レイ・ネウ・リュオ・ズエ」
『フォースフィールド!』

キュ〜〜ッキン!!

「……ん、術式安定、問題なしと」

事前に試したから発動範囲は洩矢国すべてを覆えるのはわかってる。あとは……

『流れ星!!』
ヒュッパァン!!

木に向けて少し強めに矢を撃ったけど、傷一つついていない。よし、成功だね。

『フォースフィールド』の効果は『範囲内の対象に対する攻撃の完

全無効化』。さっきの技も普通ならただの木ぐらい貫通するけど一枚貫けなかった。防御面ではチートな性能を誇る譜術だけど、本来は効果時間が5秒しかないうえに範囲も結構狭いのよね。ま、それを補うための符だけだね。

「さて、これで民が傷付く心配はなくなっただけどドゴーーーーン！！あいつらおっぱじめたか・・・」

まったく、ルールの説明まだしてないのに・・・まあいいか、自分たちの気のすむようにやってもらえれば。結果の予想はついてるしね。

「まあ、とりあえず社に戻るかね」

わざわざ移動することなかったかねえ。武具背負ってると獣道
は歩きにくいぜ。

てくてくてこ・・・

マタタビが去って少し経った後、彼が先ほどまでいた場所の近くが唐突に裂けた。その中はいくつもの不気味な目が開いており、まともな空間とは思えない。

そしていつの間に見えたのか、金髪の女性が先ほどマタタビの射った矢を拾い上げ妖艶に微笑む。

「ふふっ……なかなか面白い妖怪がいるじゃない、これはいい見付けモノしたかもしれないわね」

女性が矢を放り投げ、その矢が地面に落ちる頃には現れた時と同じように音もなく女性は消えていた。

猫又移動中・
・
・
・
・
・

「はあああああ!!」

「くらえええええ!!」

おー、派手にやってるねえ。きちんと真面目に「胸の大きさが実力の差につながることを証明してやる!!」「その貧相な体でどこまでもつか試してあげるわ!!」「やってねえのかよ!!」

「侍女長の嬢ちゃん、どうしてこうなった」

「あら、マタタビ様戻られたのですか？」

うん、戻ってきたんだけどそこは置いてさ？

「なんで国をかけていたはずの戦いが女の意地をかけた戦いになっちゃってんの？」

「マタタビ様、諏訪子様は王である前に一人の乙女なのです。乙女にはすべてをかなぐり捨てても守らなきゃいけないものがあるのですよ」

かつこよくまとめたように聞こえるけど、要は己の体格に対するコンプレックスが国を守る責任感を上回っただけだね？急に洩矢の民が可哀そうになると同時にいろいろアホらしくなってきたぜ……。

「侍女長、オレ昼寝してくるわ……。あいつらの戦いにおける影響はないからそこんこは心配無用だよ。」

もういろいろ面倒臭いよ。術には自動で妖力が供給されるようにしてあるし寝てしまおう、そしてすべて忘れてしまおう。

「ああ、以前試されていたあの術ですね。でしたら安心です。私たちはここで諏訪子様の聖戦を見守っています」

「了解、飯時になったら差し入れ持ってくるよ。そいじゃ」

聖戦で……。後々にこの戦いが『聖おっぱい大戦』とかって語り継がれたらどうすんだよ。ああ、もうほんとにアホらしい。

社の客間にある縁側、最近ではオレの定位置になりつつあるそこに猫の姿で寝そべる。一応防音効果のある結界を周囲に貼ってあるため上空の戦いの音は聞こえないし、これからオレの呟く独り言が誰かに聞かれることもない。

「実力はやっぱり互角っぱかったけど・・・、この戦争洩矢のが負けるな。ほぼ確実に」

これほどまでに実力が伯仲してる戦いにおいては切り札、その強さや相性が最終的な戦果を決める。

「洩矢のの切り札はおそらくあの鉄輪、対する軍神殿の切り札は鉄を錆びさせる蔓つるだろう。極限に消耗した後には切り札の出し合いになったら確実に洩矢のが潰される・・・」

今回は純粹に相性が悪すぎた。切り札を使うほどお互いに消耗する前に勝負を決められれば可能性はあるかもしれないが、あれほど

拮抗した相手との戦いでイレギュラーが起こることはまずない。

「オレの作った武具を渡せば錆びる心配もないから洩矢のが一気に有利になっただろう、だけどそれじゃあ勝ったのは洩矢のの力ではなくオレの武具によるものになっちまう。オレにとってそれは粹とは思えねえからな」

洩矢のが敗北することによってこの国は大和の傘下に入る。オレが洩矢のに協力できるのはあとはその時ぐらいだろう。

「ま、それもしゃなくてもいいかな。．．．．．くああ、さて、寝るか．．．．．」

そして三日の時間が流れた・・・

「・・・ふむ、そろそろ終わるな」

この三日の戦いは全くの互角、どちらが先に力尽きるかの根比べ。ただどそれともうすぐ終わる。

「互いに切り札を出そうとしてる、オレの予想通りの結果になりそうだねえ」

「……マタタビ様？……予想通りとは一体？……」

侍女長が血色の悪い顔でふらっふらしながら聞いてくる。ほかの侍女の嬢ちゃんたちも含めて三日間一睡もしてないから当然だが。

オレが幾度もお前さんたちまで起きている必要はない、神や妖怪と人の体の構造は違うのだから無理はするなと説得しても誰も聞いてくんなかったんだよねえ。諏訪子様が戦っているのに私たちだけ休んでなどいられない、とさ。さすがに侍女長の嬢ちゃん以外は限界に達したのか、次々に倒れ始めたから屋内に移動させてあるけど。

「いんや、こつちの話さ（いろいろと想像の通りに進みそうだねえ）む、最後の一手だな」

霊弾同士が衝突して炸裂、その閃光に乗じて洩矢のが鉄の輪を取り出して軍神殿に投げつける。

しかし、軍神殿の袖口から以前見た蔓が伸びだし鉄の輪をからめ捕る。ただの蔓なら斬れただろうがあれは鉄を錆びさせる蔓、一瞬にして鉄の輪は錆の塊となる。その光景に驚愕した洩矢のの隙を突き軍神殿が接近、眼前に手を突き付け何事か洩矢のに話しかける。まあ、これ以上続けるかどうかの確認だろうな。

洩矢のが何らかの答えを返したのを確認して、軍神殿は手を下ろす。そして手が下りきったのを合図にしたかのように二柱が地面に向かって墮ち（…）始める。

「諏訪子様!!」

「ふう、世話の焼ける」
ダッ!

憔悴しきつた身とは思えないほどの速さで侍女長が駆け出す、それに倣いオレも動く。幸いにも落下地点はすぐ近くだと思われるから余裕で間に合うだろう。

「よつと」

洩矢のは侍女長が受け止めに行つたためオレは軍神殿を受け止める。うむ、このふくよかな柔らかさが……さすがに攻撃してくるほどの余裕はないみたいだな。

「見届け人、人つつつても人間じゃねえけどマタタビが宣言する。
この勝負、大和国の軍神の勝ちである!!」

「あう……ごめんよ……マタタビ……あんたが
協力してくれたのに……負けちゃった……」

はあ、喋んのもつらそうな顔してんのにまずオレに謝罪かよ。律儀な神様だぜ。

「謝ることじゃねえよ、それにな?まだ完璧に負けたわけじゃねえ

ぜ？」

「……？……それってどういう……？」

「気にすんな、今は寝とけ。疲れただろ？後片付けはしといてやるからさ」

「……うん、ありがとう」

「諏訪子様……、お疲れ様でした。今はお眠りください」

「お前さんもな、侍女長。社の本殿に床を敷いてあるからお前さんたちで使いな」

戦闘後の洩矢のに負けず劣らずへろっへろだからなあ。さつさと休んでくれないとオレの精神衛生上よろしくないよ。

「はい……、ありがとうございます。……それでは失礼いたします」

洩矢のを背負った侍女長の嬢ちゃんが社のほうに歩いていく。……ん、もう十分離れたな。

「なんでだんまりなんだい、軍神殿？」
ビクウ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いや、さっきビクッ！してたのにごまかせると思ってんのか？

「・・・・・・・・・・なんでばれたのよ？」

「呼吸、気の流れ、体温。ほかにも27個の理由があるがお前さんに理解できるのはこれぐらいだな」

「・・・本当にあんたは訳が分からないわね」

「私はこれからこの国を支配する・・・・・・・・あの娘たちにとっては侵略者であり、略奪者よ。・・・かけられる言葉など無いでしょう」

ああ、そういうことね。この国を支配できるとは全く思えないけどね、ま、おいおいわかっていくさ。

「そーですかー。まあいいや、お前さんも休みな。疲れてるだろ？」

「ええ………そうさせて……もらっわ」

「……ん、眠ったみたいだな。さて、もう必要はないから『フォースフィールド』は解除してっと。」

「神は二柱ともダウン、侍女も全滅、洩矢国の一般の民は社に入るのを禁じられている……。つまり、全員の看病を俺がしないといけないわけだねえ」

ハハツ、ワロス……。これは忙しくなりそうだな。みんな女性なのが唯一の救いだな。

「はあ、とりあえず軍神殿を寝かせてくるかねえ。それでは皆様、またの機会に」

十二歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします

十三歩目

「神奈子ー！早く準備終わらせろー！」
バタバタ

「ちょっとは待ちなさいよ！かぶればいいだけの諏訪子と違ってあたしは時間かかるんだから！」
バタバタバタ

「諏訪子様！神奈子様！お二人とも早く出てきてください！！」
バタバタバタバタ

はい、皆さんこんにちは。猫又のマタタビです。ちなみに人型形態。

いやあ、後ろがうるさいうるさい。まあうるさいのはれっきとした理由があるんだけどね。ああ、ちなみに今日は前回から数えて五日後ね。

あの戦いが終わった後、消耗した二柱は丸一日寝込んだだけで回復。神の回復力ってすごいね、でもそれより早く全快した侍女長はもっとすごいね、彼女ホントに人間？

それでその翌日、つまり今日から三日前に洩矢国が大和国に支配され信仰の対象が洩矢神から別の神様に変わるという発表をミシヤグジ様を通して行ったんだけど、その結果が大混乱。

大和国に支配されるつつても民に直接大きな影響が出るわけじゃないしそこはスルーだったんだけど、信仰の対象が変わるつてここに問題があつたんだよねえ。

侍女の嬢ちゃんたちには手のかかる子ども扱いされている感のある洩矢のだけど、その実態を知らない連中からしてみれば彼女はとても恐ろしい祟り神だ。洩矢神が生きているのに別の神を信仰したりしたら、洩矢神にたたられるのではないか？つてな考えが生まれるのもある意味当然。民はみんな八坂のを信仰したくありませんってね。

それでスムーズに征服が進まなかった八坂のがどうしましょ？つてことで大和本国に手紙を送って（御柱にくくりつけてぶん投げてた。御柱文？）指示を仰いだ。一日遅れで本国から返信が来て（こっちは鳥が運んできた。ちなみに美味しくいただきました）今後の方針が決まったんだけど、その内容は回りくどいけど結果的には大和にも洩矢にも損が少ないものだったんだよねえ。

大雑把に説明するよ。まず信仰の対象を変えるのはそのままに、その対象を八坂のから洩矢のと守矢神（八坂のが新たに作った存在しない神）を融合させた者に変えたのさ。これなら民も洩矢神であ

ったものを信仰することになるから問題もないだろうってね。

でも実際は信仰は以前通り洩矢のへ向けられる。新しい神なんて存在しないから当然だけどね。それでもって洩矢のはその信仰を八坂のに譲渡する、これで国内では信仰の対象を変えずに八坂のが支配する形が出来上がり、国外の奴らにもあたかも八坂のが支配しているように見せかけることができるって訳さね。

それでも完全に八坂のが支配するわけじゃなく（本国の意向に沿っていないらしいが）洩矢のとの共同統治って形に落ち着くことになった。当人曰く「あたしが完全に勝ったわけじゃない」からだとか。切り札の相性で勝ちが決まったのが若干気に入らなかったのかねえ。

つまりはこれまでの政治に八坂のが加わっただけってことになるのさね。それでもってその表向きの政策を国内に発表するための準備に今てんでこ舞いってわけさ。

それと目に見えて互いの立場を示すために洩矢のはカエルを表す帽子を、八坂のは蛇を表すしめ縄を身に着けることにしたらしい・
・ってこれは別に言わなくても良かったかな。

・・・・・・それにしても、だ

「なんでかこの結果がほとんど予想できちゃってたんだよねえ。英雄達の記憶による予想じゃなくて、まるでどうなるか知ってたみたいに」

不思議なこともあるもんだ。洩矢のとあって少ししたぐらいから、なんとなくこうなるだろうっていう気がしていた。予想というより予感だねえ。

「まあ、オレの頭ん中が変なのは今に始まったことじゃないし気にするほどでもないか」

バタバタバタ！

ん？足音がこっちに向かってきているような・・・・・・

「マタタビ！なんで私たちが忙しそうにしてるのにあんただけ暇なのさ〜〜〜！！！！」

「あくまでこの国の情勢とは関係ない旅の猫又ですから。ってかそんな愚痴言ってる暇があったらさっさと八坂の連れて本殿行つて来いって」

「あゝ！そうだ！加奈子〜〜！！急げ〜〜〜〜！！！」
バタバタバタ・・・

まったく、今朝方まで酒盛りしてっからこうなるんだっての。

ああ、そういえばオレや洩矢のから八坂のへの呼称が変わったのは気づいただろう？共同統治って形に決まった時に対等な立場にあるものとして洩矢の達が名乗り合ったのさ。そのついでにオレも八坂のに名乗ってお互い呼び方を改めたのよ。

オレの呼び方が変だっていう突っ込みももらったけど、癖だからしゃあないよねえ。

ドタドタドタ！

またか？

「マタタビ！諏訪子はどこ行っただの！？本殿にいないのよ！」

「今しがたお前さん呼びに向こうへ行っただよ」

「入れ違い！？まったくもう！」
ドタドタドタ・・・

・・・ふむ

「洩矢のよりだいぶ足音が重い気が　ズドォン！　ナンデモナイデスヨーーーー」

こっちに背中向けながら正確にオレの足もとに御柱を落とすとは・
・・・・オレと戦った時よりすごい気がする。

「・・・さてと、荷造りを再開するかね」

とはいっても、もとより武具ぐらいしか持ってないから大した手間ではないけどねえ。

この国にもそろそろ十日以上滞在しているし、そろそろ旅を再開しようとな。あの二柱ならきちんと国を治められるだろうし、オレがここにいてもすることなんて無いからな。

「よし、荷造り完了つと」

手入れを済ませた武具とまだ能力を張り付けて無い符を各所に装備して、そのまま猫形態に変身。
ぽふんっ

「ほんとと、どこに消えてるんだろうな。重さもなくなるし……。でも便利だし気にするほどのことでもないか」

人型のままで行動していると重いしガチャガチャうるさいし、この猫形態の時のほうがそういった点では便利なんだよねえ。手を使った細かい作業はできなくなるけど。まあ、物を掴んだりする程度はしっぱでできるしね。

さて、日はまだ東の空にあり。明るいうちに動くのもなんだし日が落ちるまで昼寝でもしようかねえ。人間なら明るいうちから動き出すだろうけど、妖怪にとっては夜こそ活動時間。ぽかぽか陽気の日中はお昼寝が一番さ。

「ここの縁側で寝るのも最後かな……。くあ……。もう眠くなってきた」

長い旅暮らしのおかげで寝たいと思ったらすぐに眠くなる体質になってるからねえ。起きたらばれないようにこっそり旅立つとするか。なんとなくね。

・・・それではみなさん、おやすみなさい。

side out

side 諏訪子

「あー、やつつと終ったあ!!」

ミシヤグジ様を通して国中に今後の政策を伝える作業、日が東にあるころから始めたのもう日が沈み始めちゃってるよ!

「でも今日のうちに民が納得してくれてよかったじゃない。前向きに考えましょうよ」

神奈子はいんだよ神奈子は！ただ喋ればいいだけだからさ！私は国中のミシャグジ様を制御しなやいけなかったから大変だったの！

「・・・はあ、でも確かに民が今回の政策で納得してくれてよかったかもね。これ以上いいものは考え付かないだろうし」

「そうそう」

「・・・あーうー！それでも疲れたしなんか憂さ晴らしがしたい！！」

「あら？あそこで寝てるのマタタビじゃない？」

え？寝てる？

「やだなあ神奈子、いくらマタタビでも私たちが頑張って仕事してる間に昼寝なんてしてるわけ「zzzz」・・・ヨシブチ殺ス」

「諏訪子……？冗談にしては顔が笑っているように見えないのだけど……？」

何言つてるのかな冗談に決まつてるじゃないくら疲労している
うえに昼ご飯も食べてなくてなんかむしゃくしゃしてるとはいえ本
気で殺すなんてあははははははははははははははははははははは
はははははははははははははははははははははははははははははは

「さて、殺すのは冗談にしておいて何をしてあげようか？」

「すでにマタタビ相手に何かするっていうのは決定なのね……」

当然じゃない！私がイライラしてる時にこの無防備な姿、これはマタタビが言うところの前フリってやつだよ！

「でも本当に何をしようか？あんまり変なことをすると報復が怖いからね・・・」

神奈子と戦う前にマタタビが木像を彫った時があっただけ、ちよつと邪魔してみたなら「これで眼球えぐられるのと今すぐ謝るのどっちがいい？」って文字通り私の目の前に短刀突き付けて笑顔でブチぎれてたからね……。正直あいつの沸点がよく分からない。

あ、そうだ

「ねえ神奈子、こいつの全力の妖力見たことある？」

「え？マタビの妖力？いつもはほとんど隠してるけど大妖怪の中でもだいぶ上位に入るぐらいの大きさでしょ？」

神奈子はやっぱり知らないんだ、こいつの妖力は私達の神気の10倍ぐらいあるってこと。私が見せてほしいって頼んだ時もしぶしぶって感じだったからね。あまり見せたいものじゃないみたい

「違うよ。マタビのしっぽに二つの飾り帯があるでしょ？それが封印になってて本当は私達よりもっとすごい力を持つてるんだよ、こいつは」

「・・・・・・・・・・・・・・は？」

おー固まってる。私と同じような反応だね。

「はあ！？じゃあ何！？こいつは封印されてる状態で大和の軍を壊滅させて、さらにあたしを無傷で倒したっていうの！？」

神奈子の反応ももつともだと思うよ。普通に考えたらありえないもんねそんなの。

私も封印解いた状態を見せてもらった時はマタビにボコボコに

された直後だったからなんとなく納得したけど、ふつうあれが封印された状態での戦闘力とは思わないよね。」

「そ、こいつが言うには本気で戦^やると確実に殺しちゃうってさ」

普通の大妖怪がいったらただの戯言だけど、マタタビが言うとな説得力があったよ。・・・あ、神奈子がプルプル震えだした。怒ったのかな？

「・・・妖怪に手加減される軍神なんて・・・・・・・・我ながらみつともない」

「怒ってたんじゃないくて落ち込んでたのね。でもしょうがないよ、マタタビはいろいろぶっ飛んでるから普通の妖怪とひとくくりに考えるほうがおかしいよ」

マタタビが本気の状態で戦ってたら私も神奈子も10秒ともたないでしょ、たぶん。

「っとそんなことよりマタタビの本気の妖力、見たくない？」

ぶっちゃけた話、私がまた見たいだけなんだけどね。封印を解いた時のマタタビの妖力はただ大きいだけじゃなくてきれいだった。実際目に見えるわけじゃないんだけどなんだか澄んでるっていうん

だろうか・・・とにかくこれまで感じたことのないすごさがあつた

「え、でも封印されてるんでしょう？あたしは封印解いたりするのは得意じゃないわよ？」

「ああ、それならたぶん大丈夫。自分で自分に封印かけてるだけらしいから、あの帯をほどけば私たちでも封印を解けると思うよ」

「・・・・・・・・・・また固まった。あのときの私もこんな顔してたのかな？だとしたら相当恥ずかしいよ。」

「自分で自分に封印って・・・・・・・・・・何がしたいの、こいつ？」

「マタタビなりの事情があるらしいよ。それより見たいの？見たくないの？どっち？」

「・・・・・・・・見たい」

よし決定！寝てる時のマタタビは無防備だし問題はない！この間侍女の子が物凄い笑顔で撫でまわしてても熟睡してたもん。

「それならすぐにやるよ。ぐずぐずしてたらマタタビが起きちゃうかもしれないし」

足音を立てないようにそ〜つとマタタビに近づいて……。しつぽに巻かれている帯を指でつまむ。蝶々結びにしてあるから端を引っ張るだけでほどけるはず。神奈子も少しおびえてるみたいだけど帯をつかんだ

「（ねえ諏訪子。本当にやるの？なんかものすごく嫌な予感がしてきたのだけど……。）」

「（いまさら何を尻込みしてるのさ！いい？せーので引っ張るよ・・・せーのっ！）」
シュルツ

わき目に神奈子が帯をほどくのを見ながら自分も帯をほどいたのを認識した瞬間、私の意識は暗転した。

s
i
d
e
o
u
t

- - -
- - -
sideマタタビ

・・・ん？なんか体が軽いような気がする

「んゝゝっ、あれ？オレってば外で寝てたっけ？」

確か寝た時は洩矢の社にある縁側にいたはずだと思ったが、今は普通の土の地面の上にいる。ちょっと荒れてるような？

こっつ、背筋を伸ばすあの動きをしながら考えてみる・・・..
けどわからん。だめだ、寝起きすぐは頭が回らん。とりあえず毛づくろいしよう

「えーと？確か寝る前に荷造りして、目が覚めたらこっそり旅立とうとしてたんだよな」

そうそう、ちょうど今は日も落ち始めて妖怪が動くにはいい時間なってるしねえ。

荷物は人型の時に身に着けたから原理はわからないけど猫型の時はどこかにしまわれている。だから今体に着けてるのはしっぽのリボンだk・・・・・・・・あれ？

「無い。グレイプニールが巻かれてない」

・・・・・・・・なるほど。現状をおおよそ理解した。

「振り向きたくないけど・・・・・・・・ええい、ままよっ！」

振り向いた先にあったのは、半壊どころか7／8割壊した洩矢の社。

そして社それの残骸にめり込んだ洩矢のと八坂の。

その二柱を引き抜こうとしてる侍女の嬢ちゃんたち。

少々お待ちください

「理解・・・してくれた？」

あれからしばらく侍女長にお仕置き（という名の拷問）をされながら必死の説得を続けてました。・・・本気で死ぬと思った。

「もっ、申し訳ありませんでした！マタタビ様に非がないのにないのにあのようなことまでしてしまって・・・。具体的には尻尾を二本ともつかんで思いっきり「ごめん止めて、思い出たくない」わかりました」

オレの妖生最大のトラウマになりそうだよ、これは・・・。

「それで、すでに引き抜かれて意識も戻ってる二柱はいつまで寝たふりをしてるのかな？」
ビクビクウ！

最強スベック状態のオレ様が気づかないとでも思っていたのか？
そして寝たふりしておけば己に被害が来ないとでも思っていたのか？

「オレが受けた痛みと苦しみ、お前らにも味あわせ」誂訪子さま、
神奈子さま覚悟はできていますか？」侍女長？君はオレにあれだけ
やってまだやり足りないのか？」

ここはオレに譲ってほしいかなと。

「そう・・・ですね。被害者であるマタタビ様の采配にお任せする
べきですね」

「加害者は侍女長だけだね・・・さて、なぜおれの封印を解いた
のか説明してもらおうか。崇り神と軍神よ」

命じてもないのに二柱とも正座をしてこっちを向いてきた。

「私は神奈子がマタタビの封印解いた状態を見たいって言い出した

から協力だけだよ」

「ちよつと諏訪子！？話を持ちかけたのはあなたでしょう！？」

「それでも神奈子だって見たいって言ったじゃん！」

「でも最初に言い出したのは諏訪子じゃない！」

「ガキかお前らは……………」

呆れて怒る気も失せてきたわ。まったくもって阿呆らしい……………

「あれ？そういえばマタビの妖力あの時よりも小さくない？」

「確かに諏訪子から聞いたほどの大きさではないわね？」

怒られる側のくせに勝手に話を転換すんなよ。…………まあいいか

「基本的には日常用に妖力を大幅に抑えてるから当然だろう。それでもお前さんたちと同じぐらいの量はもれと思うが」

「え、本当に？全然そんな風には感じないんだけど」

「お前さんたちは封印解けた直後のでっかいのをもろに食らったみたいだから感覚が麻痺してるんだろうよ。侍女長たちはきちんと感じてるんじゃないかい？」

「ええ、たしかに諏訪子さま達の神気と同等の大きさの妖力を感じます」

その割には怯みもせずにオレに暴虐の限りを尽くしてくれたけどね！

ちなみに封印時（大妖怪級）の妖力はその二柱のだいたい十分の一ぐらいかな？日常用はさらに百分の一ぐらいで、これが平々凡々な妖怪ぐらいだね。

人里に紛れ込むときなんかはほぼ完全に妖力を遮断するんだけど、その状態だといまいち体の調子が良くないのよね。日常用もそうだけれどちょっとでも妖力使おうとすると抑制ができなくなっちゃうし。

「・・・あれ？大幅に抑えてあたし達と同じくらい？それじゃああなたの本気って・・・」

おっ、八坂の気が付いたか。この際だし披露してやるか

「そういうこと、お望み通り次元の違う力ってやつを見せてやるよ。まずは人型に戻って・・・っと」
ぽふんっ

それから少しずつ妖力を解放していく。少しずつやってるのはそのまま全開にしたら侍女の嬢ちゃんたちの魂がつぶれちゃいそうだからさ。

いきなり開放すると、それこそ神の霊弾をもろに食らう以上の衝撃が生まれるようだからね。
ピシッ
ピシッ

「あゝ、始まった。安定するまでうるさいんだよね、これ」
ピシッ
ピシッ

「え？何この妖力・・・それに空間が軋んでる...?」

オレやオーデイン、天照のぐらいの力量になると自分の力で空間が悲鳴をあげちゃうことがあったり。主神クラスにならないとこんな現象は起きないんだけどね。さらに主神クラス同士の争いになると空間が歪んだりすることも結構あります。

「あゝ、これは ピシッ ほつといたらそのう ピシッ ちおさま
るから気に ピシピシッ すんな。ってホントうるせえなこれ」

まあ、うるさいのですんでるだけまだましか。以前ゼウスと戦った時は、昼間なのに周囲が突然暗くなったりオーロラができたり海の水が天に落ちてったりいろいろひどいことになったしねえ。
ピシピシッ、ビシッ！

「ん、よし。空間も安定したし、妖力もこれで全開。世界最強の猫
又ここに降臨！！しゃきーん！」

別に見た目はいつもと変わらないけど一応これが最強形態です。
英雄譚のラスボスみたいに变身とかできたら面白かったのになあ・・。

あ、でも今のオレからは霊的素養のないものでも目に見える上に
触れる妖力が周囲にあふれだしてるのよ。

主神クラスの存在が力を解放すれば、それだけで平々凡々の神程度の攻撃ならすべてかき消す妖力（霊力や神気）の鎧が出来上がるのさ。いわゆる後光ってやつだね。八坂のの御柱も届く前に消滅します。

あー、そうだね。この際だし主神クラスと普通の神、妖怪とかの大まかな力関係を説明しておこうか。

まずオレがよく言う主神クラス。

これは一応この世界の存在の頂点だね。オレとか天照の、オーデインやヤハウエだとかが当てはまる。実際にはまだまだいるけど挙げていくときりがないので割愛。

神気だとかの量・質は普通の神の中でも上位の奴の七十〜百倍ぐらいが大半。ゼウスが百十倍ぐらいでオレがだいたい百倍ぐらいだけどそれ以上の奴もちろほら存在してる。

存在の強さは単純に表すと妖力等の量×質だから、だいたい普通の神の一万倍ぐらいの力量って考えてもらえばいい。技量によって大いに差はあるけどね。

次に普通の神。

主神クラスより強さはガクツと下がるけど物凄いたくさんいる。でも強さは妖怪程度の中から洩矢のぐらいのまでピンキリ。一応あの二柱は上位の強さはあったしね。

洩矢国とかのあるこの島の神は、まだ大陸の神に比べると全体的

に力不足な印象があるかな。洩矢の達ぐらいのは大陸には結構いるしね。神の強さは信仰の量によってそこそ上下するから人間の少ないこの島国はまだ多少不利だね。

そんなもって妖怪。

一番数が多いのはこれだね。強さも中位程度の神なら倒せるぐらいから普通の人間に倒される奴まで幅広い。

大妖怪なら上位の神の十分の一ぐらいの妖力量・質を持つてるから、だいたい洩矢の達の百分の一ぐらいの力量かな？もちろんもつと強い奴もいたりするけど。

一番数の多い妖力レベルを妖怪の基準とすると、だいたい大妖怪の百分の一ぐらいだね。俺の妖力の十万分の一ぐらいになるのかな。

ま、大雑把だけどこんなもんかな。さてそこそ長く説明してたはずなんだがどうにも静かだねえ。洩矢の達は何してんだ？

「（。。（ポカーン）」

「ぶはっ」

「マタビ（様）の目が開いてる――――
！――！――！？」

「ツツコムところそこか――――
！――！――！――！――！」

もつとないの！？妖力の多さとか、オレの放ってる後光みたいな光とかさ！？いや実際後光なんだけど。目に見える変化が少ないのはわかるけど何でそこにまた注目すんだよおおおお！！

「いやそこも驚きだけどその妖力何！？もはや大きさとか何もわからないよ！？」

「お前さんが一番最初にそこに突っ込んでくれると信じてたよ、洩矢の」

「えっ、マタビどうして泣きそうになってるのさ！？その目つきで涙目だとすごく変なんだけど・・・」

ほっとけ。それにしても別に意識してるわけでもないのに、何で目が開いてると周囲に認識されるぐらい開いてしまってるんだらう

？もしかして解放状態だと昔からこうなのかもしれないな、全力で戦う時はたいてい相手がオレと目を合わせようとしなかったし。

「それに俺の妖力がなんだって言われても、オレは最強だってたびたび言ってただろ？このくらいはないととても最強は名のれねえって」

「あーうー、聞いてはいたけどまさか本当にここまで異常だとは思ってなかったよ・・・」

異常って言うな異常って。若干傷付くぞ。

いまだに洩矢の以外が再起動しないな。絶賛現実逃避中？ああ、ちょうどいいし八坂のからグレイプニール取り返して封印しなおしちゃおう。いまだに握りしめてるからね。

「というわけで洩矢の、八坂のからあれとってきて」

「あれ？あれって飾り紐のこと？もう封印しちゃうの？」

「ああ、あんまり長い間この状態でいるとやかましい連中がここに来るかもしれないからな。それとやりたいこともあるから早くとってきて」

「やかましい連中？まあいいや、とりあえずとってきてくるよ」

感謝感謝。あんまりでかい妖力出してるどほかの主神クラスに説教されるからね。一応封印が解けてるのに気付いてすぐにこの一帯を結界で覆ったから平気だとは思うけど。

「はい、とつてきたよマタタビ。神奈子ったら何度呼びかけても反応がないんで無理やり手を開かせてとらなきゃいけないから大変だったよ」

「ありがとさん。そして自分がほいた分をなぜ後ろ手に隠しているのかな？」

「いやあゝ、この紐きれいだからほしいかなゝとか思ってたみたい？」

「自分に結びつけた瞬間、二度と自分からはほどけないくらい強く肉体も神気も意識も縛られてもいいならあげるよ」

「お返しします」

それが一番だろうよ。グレイプニール一本でこの二柱ぐらいなら完全に封印できちまうからな。

さて、再び尻尾に結ぶ前に少し作業をしちまいますか。これから先を楽しくやっていくためにも、ね。

「それじゃあとりあえずつと……なぜそんなにこつちを注

視するんだ、洩矢のよ」

「何か面白いこと始めそうだから」

いや、まったくもって面白くないうえにすぐ終わることなんだけ
ど。

「まあ見るのは止めはしない。・・・貼り付けてある『妖力量・質
を大妖怪程度まで抑えるために必要な力を生み出す程度の能力』を
それぞれ解除」

「ほーほー」

「そんでもって黒いほうには『妖力量を一万分の一に抑えるのに必
要な力を生み出す程度の能力』を、白いほうには『妖力質を一万分
の一に抑えるのに必要な力を生み出す程度の能力』を貼り付けつと」

「ふむふむ」

「以上、終わり」

「なるほどなるほどって早っ！そして地味！そんな物凄い妖力しと
いてやるのがすごい地味！」

だから言ったのに。って口には出してなかったか。でもこれだけ
の作業でオレの妖力の六割が持っていていかれてるっていう。ホント燃
費悪すぎるよ、オレの能力って。

「誰も面白いものだとは言わなかったろうが。さて、しつぽに結んで妖力供給開始っ」と
キユツ

「おー、体が重い重い。これでそこら辺の木端妖怪クラスか」

あふれ出ていた妖力が収まり、さらに以前よりもはるかに小さく弱い妖力だけがにじみ出る。

「あれ？前よりも封印強くしちゃったんだ」

「ああ、元からこのぐらいなら手加減とかしないで済みそうだからな。むしろこの妖力で神相手に手加減してたら殺されそうなのが」

「確かにそこら辺にいる妖怪程度だもんね。でもそれぐらいの妖怪に対して神がちょっかいかけることはそうそうないからいいんじゃない」

それもそうだな、洩矢のと戦うことになった理由だってオレが人里で不用意に攻撃行動をとったからだし。これで少しは平和的に過ごせるといいんだけどねえ。

「ふむ、これでやりたいことも終わったし、オレはこのまま旅立ちと行きたいところなんだが・・・」

いまだに後ろには固まったままの八坂のと侍女軍団、そして崩壊した社。このままにしとくわけにもいかねえよなあ、洩矢のもなか寂しそうな目でこっち見てくるし。すごく抱きしめたいです。

「マタタビ・・・いなくなっちゃうの？」

「こういうしんみりした空気が嫌だからホントはこっそり旅立とうと思ってたのにねえ。・・・仕方ない、自分で壊したもんは自分で建て直すか。ってことでもう一日だけ世話になるぜ」

「そっか・・・明日にはいなくなっちゃうんだ・・・・・・・・って明日！？一日で社建て直すつもりなの！？」

「大工仕事は得意だからな、この程度なら半日あれば十分終わる」

「ああ・・・そう・・・」

なんか洩矢のに異質なものを見る目で見られてるような気がするが気にしないことにする。さて、まずは固まってる連中を起こしちやうかね。

ということでは一段落するまでしばしお待ちを。

そして一日の時間が流れた・・・

「早くみんな戻ってこないかねえ。そろそろ日が沈むんだが・・・」

すでに再建の終わった社の本殿前に寝そべり、ひとり呟く。日没ごろに帰ってくるように伝えてあったはずなんだが・・・お、戻ってきた。

「おかえりー、羽は伸ばせたかい？」

侍女の嬢ちゃんたちも含めて最近はみんな働きづめだったから、オレが社を立て直している間に水浴びに行ってきたんだよ。この間の戦争でできた湖に。

絶対濁ってるだろとか突っ込まれそうだけどその辺はすでに処理済み。まだ魚はいないけど、そのうちいい湖になるだろう。

「うん、久しぶりにみんなゆったりできたんだけど……」

「ん？けど、どしたんだ洩矢の」

なんか不具合でもあったのか？

「本当に一日で建て終わっちゃってるんだね……」

なんだそんなことか。材料は侍女長が近くの人里に手配してくれて十二分にあっただし驚くほどのことでもないだろうに。

「社なら昼前には建て終わってたってえの。それよりはい、これ」

「昼前って……あれ、これ……私の人形？」

「そ、洩矢のの分だけじゃなくほかのみんなの分もあるぜい」

オレの力作、全高約三十センチメートルの木製人型。ひとがたリアル頭身に加え外見でわかる体型的な特徴も完全に再現！ですが服の着脱機能はありません。いかがわしい代物じゃないし、何より服の下を見れるような関係でもないから再現しようがないしねえ。

「再建が終わってからって、もしかしてこれを彫ってたの？」

「そうさ。本当はすでに全員分作り終えてたんだけど昨日の騒動で粉々になっちゃってたからな」

ちょうどオレの寝ていた縁側の真下に隠してあったから、見事に木端微塵の木片と化していました。泣けるぜ。

「あう、ごめん・・・今度のは絶対に壊さないようにするよ」

「いや、そんな気にしないでいいさ。それだって気に入らなければ薪にしてくれたたっていい」

「ええ！？この間は作ってる途中に邪魔したらすごい怒ってたのに！」

「それは作っている最中だったからだ。オレは武器も料理も細工物も作る時は魂を込める、それを邪魔されたらキレるのは至極当然だろう」

何かしら作ってる最中は精神的に高揚してるって理由もあるけどね。

「じゃあ作り終わったらもうどうされても構わないってこと？」

「そんなわけねえだろが、一つ一つがオレの大事な作品だ。でもすでに所有権はお前さんたちにある、それなら所有者が自分の持ち物をどうしようと自由だろう」

人の持ち物に対してその作成者だからってあーだこーだ言うのは、オレにとっちゃ粹じゃねえ。個人の所有物はその個人だけが好きにする権利があるんだからな。

「……まあでも、やっぱり大事にしてくれたほうが送り主としてはうれしいけどな」

「……うん、やっぱり私は絶対にこれを壊さない。壊させない。みんなもきつとそうだと思う」

ぎゅっと胸元に人型を抱きかかえる洩矢のの後ろでは、他のみんながそれぞれの人形を満足そうに眺めている。

所々で「私ここまで絶壁じゃありません!」とかって声も聞こえるけど、それでも人型を手放そうとしている様子はみじんも見られない。

「にやはっ、こいつぁ職人冥利に尽きるねえ。それじゃあ置き土産も渡したことだしオレはそろそろ行くとするさ、元気でやりなよ」

猫の姿のままするつと洩矢のの横を通り抜け、そのまま歩き出す。

「……………」と思ったら八坂のに首筋を持たれて持ち上げられた。ええい離せ、子猫ならいいけど成猫はこの持ち方されると痛いんだよ。自重で首が絞まる!

「あたし達には何のお別れの言葉もなしなのかしら、マタタビ?」

「そうですよマタタビ様。私などは今生の別れになるかもしれないのに酷くないですか?」

二人とも（正確には一人と一柱だが）人型を持ちながらこちらに微笑んでくるがなんか目が笑ってない気がする。

「いやいやきちんと声かけようと思ってたってば。だから離して」

「はぁ・・・、まったく。たまにはここにも顔を出しに来なさいよ？それなりには歓迎してあげるわよ」

「マタタビ様、短い間でしたが本当にありがとうございました。あなたがこの国に来てくれたおかげで私たちは今もこうして笑顔で過ごせるのです。人の身ではもはや会うことはかなわないかもしれませんが、また出会うことができたならば必ずやこの御恩を返させていただきます」

「八坂の、気が向いたなら酒でも持って会いに来るよ。侍女長、流れる時間の違うオレらではもう会うことはないかもしれないけれどもしも廻^{めぐ}った君の魂と出会ったなら、その時は酒の酌でもしておくれや」

後ろ脚を前に思いっきり振りつつ背を曲げ、その勢いを使い八坂のの手から離れる。空中で一回転してから侍女長の肩に一瞬だけ乗りすぐさま跳躍。社の敷地と外の境界そばまで一気に跳ぶ。

「マタタビ！」

洩矢のの声にそのまま進もうとしていた体をいったん止め振り返る。その先には笑顔を浮かべる二柱と大勢の侍女の嬢ちゃんがいる、誰も涙を流してはいない。

「またね!!」

「ああ・・・またな」

みんなに背を向け今度はそのまま歩き出す。話しているうちに日もくれた、真っ黒いオレの姿はすぐに見えなくなるだろう。

しみみりした別れは性に合わない。最後は軽薄に見えるくらい淡泊なものでいい。なぜなら彼女らも、オレも、次に会う時まで生きていられるかはわからないのだから。

旅をする者は土地や人に情が移りきる前にまた旅に出る。別れがつらくならないように、自分が消えても悲しみを与えないように。

「なんてな、そんな気取った理由じゃないさ。オレの名前はマタタビ、漢字で書けば股旅。旅が大好きで止まっているのが苦手なだけだよ」

今度の目的地はオレの屋敷だ。ここからなら七日七夜も歩き続ければたぶん着くだろう。

「それでは皆様、また次回」

社から離れ夜の闇の中歩き続けるマタタビの頭上、森の木々に隠れて見えない位置に傘を差したひとつの人影がある。

「やっとあそこから離れてくれたわね、それじゃあそろそろ試させてもらおうかしら」

十三歩目（後書き）

ご指南ご指摘ありましたらお願いいたします。

十四歩目（前書き）

だいたいこのぐらいの長さでやってみようと思います。

十四歩目

皆様こんにちは、猫又のマタビで「・・・・・・・・・・！」
ん、何？飛ぶの疲れた？それなら背中に乗っていいからちよつと
静かにしてておくれ。今挨拶してるところだからさ

改めましてこんにちは、マタビwith妖精でございます。

洩矢の社を離れてすではや四日。昼も夜もなく歩き続け・・・
とはいかずに、まるで人間のように日中歩いて夜は睡眠といった感
じで進んでおります。

なぜかと言えばオレの背中（猫形態）に乗ってる妖精のお嬢ちゃ
んがいるからだね。この子は日が落ちるとすぐ寝ちやうから夜中に
動くわけにもいかないのよ。

む、正確に言えばこの子達、かな？これで今回すでに六人目だし
ね。どこからともなくやってきてしばらく付いてくるんだけど自分
の住処から離れすぎるとふらふと帰っていく。するとまた別の妖
精が、って感じで入れ替わりにオレのそばにやってくるのだよ。

どうにも昔から小さい子には好かれる体質でねえ、独りで旅して
いてもそこら辺の妖精たちがしょっちゅう付いてきちゃうからあま
り孤独に過ごした時間はないんだよ。

ま、退屈しないでいいんだけどね。

「・・・・・・！！・・・・・・？」

え？おなかすいたからそろそろ帰るって？かまわないけど自分の家にはちゃんと帰れるかい？

「・・・・・・！！」

コクコク

そっか、気を付けて帰りなよ。この辺は妖怪も出るから襲われなように。まあ妖怪のオレがする忠告じゃないような気もするが。

「（＜―＞）bグッ」
パタパタパタ・・・

さっきは飛ぶの疲れたとか言ってたのに（そう喋ったわけではないけどなんとなく理解できる。こればかりは慣れだね）普通に飛んで帰りおったわあの妖精。ま、別にいいけどね、妖精のワガママにやあ慣れてるし。

まだ日中だしおそらく妖怪に襲われることはないだろ。よっぽど低級な妖怪でもない限りわざわざ妖精を襲うやつもないしね。

さて、近くにほかの妖精はいないみたいだしそろそろ今の状況を
打開したいから行動を起こしますかねえ。まずは人型になって・・・
っと。

ポフンッ

体を不自然に後ろに傾けつつ右手は表情を隠すように顔を抑える
！そして左手で近くの木陰を指さし言い放つ！

「きさま！見ているなッ！」

洩矢の社を出たあたりから、いやそれよりも前から何かに見られて
いる気がしていた。この二日はさらにその視線が強くなってきた
いる。このオレが気づいていないとでも思っていたのか！？

スウツ

「思っていたより鋭いんですね。まさか感づいているとは思いませんでしたわ」

木陰からゆったりした紫の服を着て日傘を差した美女が姿を現す。

指差したのとは反対方向の木陰から。

「恥ずかしいっ!」

自信満々に指差しておいて反対方向とか・・・これは痛い。物凄く痛いぞおおおおおお。穴があつたらいれたじゃなくて入りたい。

「・・・・・・・・何をしているんですの?」

頭を抑えながらうねんうねんとおそらく誰が見ても気色悪いと思うだろう動きで悶えていると、女性が再び声をかけてきた。そうだ、今は悶えているよりもこのレディーに話を聞かねば

「あゝ、ちよつと大地への感謝をささげる儀式をしていたただけだか

「気にしなさんな」

「はぁ・・・」

あつ、頭の可哀そうな人に対する視線を送るのはやめて！自分見られて感じる趣味はないから・・・いやちょっと目覚めそう。

じゃなくて！ホントにオレの思考は脱線が多いな、仕方ないとは思うが。

詳しく話を聞く前にこの女性の容姿をもう少し詳しく見ておくか。

服装は先ほども言った通りに紫のドレスで肘上まである手袋をはめている、髪はゆるくウェーブした長い金髪で頭にドアノブカバーのような帽子をかぶっている。

目の色は紫色に近いような淡い色で顔立ちは十人に聞けば十一人は美人と判断するであろう程に整っている。

全体を総括してみてもこの上ない美女だ、美女なのだが・・・

「お前さん、なんか胡散臭いな」

そう、胡散臭いのである。どこが、と聞かれれば返答に困るのだけれどなんか簡単に信用してはいけなそうな気がする空気を纏ってるのさ。

まあ、オレが言える立場ではないのだが。それこそ耳にタコがで

きるほど何度も胡散臭いと言われてきてるからねえ。

「なっ！？初対面の女性に対してそれはあんまりな言いぐさじゃありませんこと・・・？」

あら、意外と素直な反応が返ってきたな。意外と少女的？幼いつて言うのか。笑って流すかと思ったんだがね

「いや申しわけない。別に貴女を怒らせようと思って発言したわけではないですよ」

「覗き見好きの大妖怪殿？」

おや？驚いた表情してるな。もしかして大妖怪って言い当てたのに驚いてるのかな。

一見すると今のオレと同じくらいの些末な妖力しかないように見えるけど、隠遁してるのはバレバレだって。

ふむ、でも隠し方が奇妙だな。なんかあいまいな感じっつーのか・
・なんかの能力かな？

「それに初対面ではないでしょう。もっともきちんと顔を合わせるのは初めてですがね」

スッ

大妖怪殿の表情が真剣さを帯びたものになる。いやはや、美しい女性はどうな表情しても様になるねえ。

「それはどういう意味かしら」

「おやおや怖いですねえ、できればあなたのような美しい女性とは穏やかに話したいものなのですが」

「ふざけていないで答えなさい、この場で消されたいのかしら？」

「おお怖い。それでは消されないうちにお答えしましょう、昨晚とその前の夜確かにあなたとお会いしたと思うのですが」

「あら、私にはそんな覚えはないわね。夢でも見たんじゃない」

大妖怪殿最初と口調が変わってるね、ちょっと動揺してるのかな。これぐらいで動揺するってどうよう……うん、つまらん。

ちなみにこういった際の口調は『ジェイド・カーティス陰険腹黒鬼畜眼鏡』を参考にしています。オレってば素だと敬語で話せないのよね。

「いえいえ、たしかにお会いしましたよ。……あなたの式を通して、ね」

「っ！式を貼っているのに気が付くなんてほんとに鋭いわね」

あれぐらい乱雑に貼った式ならオレじゃなくとも気づくと思うがねえ。

ああ、ちなみに式つてのは術『式』だとかの式じゃなくつて『式』神の式のことさ。この場合は自分より低位の妖怪に貼り付けて自分の支配下に置く技術のことを言うよ。

ただ支配するだけじゃなく自分で式を操作することで一時的に実力以上の力を出させたりすることもできるし結構便利なんだけど、術者の力量が足りないと言うことを聞かなかったりするんだよね。

昨日一昨日と妖精の嬢ちゃんのために夜は休んでただけど、その時に妖怪の襲撃を受けたんだよね。まあ因幡の直伝スペシャルトラップ（即席）に引っかけかって勝手に死んだんだけど。獣型だったし朝食においしくいただきましたよ。

sonでその妖怪には式が貼り付けてあつて、妖怪越しにこの大妖怪殿がオレの力量を量ろうとしたのかな？まあトラップで仕留められちゃったからよくわからないので自分の目で確かめようとしてたつてところかな。

「それで、オレはあなたの御眼鏡にはかかりましたか？」

「・・・ええ、及第点どころか満点をあげてもいいわ。あなた、私の式になりなさい」

やっぱりそういうことが、至極面倒臭いっただけやしない。オレは少なくともオレより弱いやつに仕えるつもりはないってえの。

「全身全霊でお断りいたします」

「あら・・・なぜかしら？私はこれでもこの島国で最強の妖怪を負っているわ。私の式になればあなたにも相応の立場を与えてあげてもいいわよ」

ほう、最強の妖怪・・・ねえ。主神クラスの存在は知らないみたいだね、た・だ・の妖怪の中での自称最強ね。

妖力量・質は確かになかなかのものがあんだけどこれだけで最強を名乗ろうとは思わないだろう、よっぽど自分の能力に自信があるのかな。

「そんな恐れ多い。オレは旅好きなしがない猫又です。最強の妖怪である方の式になるなどオレの器ではありません」

「謙遜しなくてもいいのよ。あなたが剣術のみで軍神を倒したのも見ていたのだから。よくその程度の妖力でこれまで生き残ってこれたわね・・・もし私の式になるなら今とは比べ物にならないくらいの妖力をあなたに与えることもできるわよ？」

いえ、いりません。もともと腐るほど持ってますので。

それにしてもこの妖力で八坂のに勝ったと思ひ込んでるのか。さすがにきついつてそれは。

どうやら以前の大妖怪程度の妖力にしていた時のことはよく知らないみたいだねえ。おそらく基本的には式越しに映像だけを見ていたのかな。解放したのも知らないみたいだし。

「ふむ・・・何故たかが式を一匹手に入れるためにそこまで躍起になつているのですか？あなたほどの大妖怪なら御一人で大概のことはできるでしょうに」

「・・・いいわ、特別に教えてあげる。私には何としても成し遂げたい目標があるの・・・それは」

『幻想郷』を上げること

……げんそうきょう？なんぞそれ。

「幻想郷、それは幻想に住まうあらゆるものの楽園。そこは神でも悪魔でも妖あやかしでも、すべての幻想を受け入れる理想郷」

……この嬢ちゃん、発想のスケールがなかなかすごいな。まさか一妖怪が箱庭を作ろうとするとは……。

「今の世界は人間と幻想がつり合っている、けれど人間は強いわ、いつしか幻想の居場所はなくなっていくでしょう。その時のために私は幻想のための世界を創る」

その通りだ、いつか幻想は全てではないにしろ消えていくだろう。まさか今の世に一部の神以外でそれを見越している者がいるとは思わなかったがね。

「まだどこに作るかすらも決まっていなくてもいいだけだね。でも私は必ず作り上げてみせる、そのために信頼できる優秀な式がほしいのよ。とても一人で成し遂げられるものではないもの」

あゝ、なんか話を聞いたら協力してやりたくなってきちゃった。でもなゝゝ、うゝゝゝん。

「一つ、質問させていただいてもいいでしょうか？」

「あら、式になる気になったの？」

「いえ、それはありません。．．．あなたはその国において神になりたいのですか？．．．そう、存在としての神ではなく絶対的な象徴である【神】に」

オレとしては一応立場つてやつがあるのでこれは聞いておく必要がある。返答によつては世界の調和を乱す可能性のある者として相応の対処をしなければならない。

それほどの内容なんだよねえ、この嬢ちゃんの考えていることは。

「神？．．．そんなこと考えたこともなかったわね。別に支配者を気取ろうつてわけじゃないわ。私はただ幻想の友が消える恐怖に襲われない世界を作りたい、それだけよ」

言い切った大妖怪の嬢ちゃんの目には邪な感情よこしまはなく、ただ世にあふれる幻想を想うような優しさのみがあるように見える。

「そう．．．か、うん、やはりオレはあなたの式にはならない。それは断言する」

もとより式になるつもりはなかったからその選択は変わらない。
けれど別の選択はいま決まった。

仕えることはしないがこの嬢ちゃんにちょっと協力してあげよう。
ひたすらに我を通すことができるぐらいの立場はあるからね。

一妖怪ではできないことを少しだけ後押ししてあげればこの嬢ち
ゃんならなんとなくできそうな気がするしね。

幻想の楽園を歌うなら旅の終わりに腰を落ち着けるにはいい場所
になるかもしれないし、先行投資みたいなものと考えよう。

つらつらと頭の中で今後のことを考えていると

いつの間にか目の前には無数の妖力弾が。

「っ！？最近っ多いなこっついうの！あらよっ！」

封印を強めたせいで思ったより鈍っていた動きに驚きつつもすべて回避する。弾幕の発射元は……まあ確認するまでもなく大妖怪の嬢ちゃんだよねえ、やっぱり。

「いきなり何すんのさ、驚くじゃねえの」

「あら、かわすなんてびっくり。やっぱりあなたならいい式になりそうね」

大妖怪の嬢ちゃんは特に悪びれた様子もなくくすくすと笑っている。ああ、その様も絵になるのになんか嫉妬。

「べつにね？あなたが私の式になりたいかどうかなんて本当はどうでもいいの、私の式にしまえばいいんだもの」

「あゝ、はいはい。つまり断られたから力づくで調伏して式にしようってえわけね。．．．．．なんで俺の日常こんなのばっかなんだよ、もう！」

「物分かりがいいじゃない。痛い目にあいたくないなら大人しく私の式になりなさいな」

なんかもう眼にサディストの光が宿り始めてるしゝ、きっと今降参してもしばらくおもちゃにされるしゝ、っていかもともと降参する気ないしゝ．．．．．はあ。

あれだよね、別にここでバカ正直に戦闘に應じることもないよね？逃げちゃっていいよね？協力するのは別の式イケニエが見つかってからでもないよね？
と！いうわけで

「おさらば！！」

「あつ！ちよつと待ちなさ．．．．．」

秘技！走って逃げろ！！

「フーハハハ！あんな動きにくそうなドレスじゃ追いつけまい、
って重！？からだ重っ！？」

全然スピードでねえ！それでもそんじょそこらの妖怪よりかは早
いと思う。いやまあ走るのが得意ってわけじゃないけど身体能力に
は自信があるからさ。

やはり後ろから追いかけてくる気配はない、よし、撒いたか。・
あれ？なんか逃げ切つてないフラグが立ってる気がする「いきなり
逃げるなんてひどいじゃない」・・・Why？

あるえ？なんで右側からこえがきこえるんだろ、ちよつと見
てみよ。

「つてぎゃー！！！！生首が逆さまに浮いとるー！！！！？しかも俺
と並走してるー！！！！」

なにこれグロい！！！！あれよく見ると首のあたりになんか裂け
目が・・・・・・んん？

「よそ見しながら走ると危ないわよ？」
ドゴォッ！！

「あふん!？」

わき見運転事故の元、いい勢いで大岩に直撃いたしました。うん、いてえ。そして視界が赤に染まりました。自滅乙。

「あらいい音。生きてる？」

「大丈夫だ、これぐらいじゃまだ死なん」

「それはよかった、死んでしまったら式にできないものね」

心配した理由そこか。

さっき見た裂け目に首がいったんひつこんだと思ったら、裂け目がさらに大きくなり今度はそこから上半身だけを（きちんとした向きで）出して話しかけてきた。

これが能力か？ いや、能力の応用かな？ 興味深いな。

「私はあなたの妖力さえ感じる事ができたならこの世界のどこまでも追いかけることができるわ。逃げたりするのは諦めなさい」

「空間をまたいで移動できる類の能力か？ だとしたら逃げるのは面倒そうだねえ。あ、やべえ、血が止まらねえ」

岩にあたっただぐらいで出血とは・・・いま八坂のの御柱くらった

ら即死しそうだな。つとと、応急処置しとかねえと。『BCロッド』に妖力流して〜

「癒しの力よ」

『ファーストエイド』
ポウッ

・・・よし、回復の速さはそこまで変わらないな。けど身体能力に防御力がかなり落ちてるな、この分だと攻撃力もまずそうな気が・・・。まあ、確かめるにはちょうどいいか。

「今は・・・怪我を治す妖術？そんなの聞いたこともない・・・ますますあなたがほしくなってきたわ」

「その台詞、もう少し色っぽい場面で言ってもらえると心躍るんだけどねえ。まったく」

ザッザッ

靴裏で二度ほど足元の感触を確かめる。ふむ、この辺は少し湿り気が強いからあまりきつい踏み込みはしないほうがよさそうだな。

「あら、ようやく観念したの？」

「ちがうよ、オレと少し賭けをしないかい？」

「賭け？」

「そ、お前さんが勝つたらオレは式にでも何でもなってる。オレが勝つたらお前さんの能力についての情報をオレに与え、そしてオレを式にするのを諦める。どうだい？」

「私だけ条件が二つというのは不平等じゃないかしら」

「オレは人生をかけてるんだからそのぐらいは許しておくれよ・・・

」

お、思案し始めた。この賭けに乗ってくれとかなり助かるんだよねえ。オレの好奇心は満たせるし身の安全は確保できるもん。負ける気？ねえよそんなもん。

「その賭け、乗ってあげるわ。どうせ私が勝つんだから条件を気にする必要なんてないもの」

「お、いいねえ。それじゃオレのやる気がうせないうちにさっさとおっはじめますか」

妖力差は大きいから一発必中の大技狙いでいきますかね。

「それでは、猫又のマタタビ。粹に参る」

「妖怪の賢者、八雲紫。^{やくもゆかり}すぐに終わらせてあげるわ」

side out

八雲紫はすでに裂け目から全身を出し、地面から浮かんだ状態でマタタビを見据えている。

対してマタタビは「どのぐらいでやればいいのか加減が分からん・・」などと今になってぶつぶつつぶやいている。

マタタビが動き始める前にまず八雲紫が先手を打つ。

自身の目の前に先ほどから幾度か目にしている裂け目をつくりそこに片手を添える。ちなみにもう片方の手ではいまだに日傘を差している。淑女のたしなみか？

「んにゃ？なにしとんって!？」
スウッ

状況が読めず一瞬固まったマタタビだったがそこは百戦錬磨の雄、即座に嫌な予感を感じ頭を膝に叩きつけるほどの勢いで下げる。

すると先ほどまでマタタビの頭があつたすぐ後ろに八雲紫の目の前に開いているモノと同様の裂け目が現れ、さらにそこから妖力弾が放たれる。

「あつぶね、いきなり頭狙いつて殺す気かい」

「あなたは怪我を治すことができるみたいだから多少やりすぎても平気でしょう？」

そういった八雲紫の言葉とともにマタタビの周囲に数えるのも面倒なほどの裂け目が現れる。

「・・・マジデスカ？」

冷や汗をたらだら流しながら乾いた笑顔で問いかけるマタタビ。

「マジですわ」

紫がほほ笑むと・・・すべての裂け目から不規則に大量の妖力弾があふれだし、全方位からマタタビに向けて殺到する。

「え？これ避ける隙間とかノオオオオオオウ！！！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「弾幕結界、とても呼ぼうかしら。・・・生きてるかな？」

全ての妖力弾が消えた後にはボロボロになったマタタビが・・・
・いなかった。代わりに先ほどまで彼がいた場所にはぽっかりと丸
い穴が開いている。

「っ！？いない！まさか穴を掘って逃げた！？」

そう、避ける空間がなかったため唯一妖力弾のこない方向に、つま
り地面に向かって穴を掘りそこに潜ることで回避したのだ。という
より猫が穴掘りをするな、犬じゃないんだから。

そしてマタタビが穴を掘ったのは逃げるためではない。あくまで避
けるためである。つまり・・・

「油断たいてkブハアッ！！」

紫が位置を把握できていない隙を突き、地面から飛び出したマタタ
ビが奇襲を仕掛けたのだがなぜか唐突に出血しそのまま八雲紫の横
を通り過ぎ着地した。

カウンターをくらったのだろうか？鼻からはおびただしい出血が・・・
・鼻？

「黒のレースとは……眼福でした」

「黒？……なっ！？ななななななな！？」

マタビの発言に数瞬思考したのち、何を言われたのか理解し顔を真っ赤にしてスカートを抑える八雲紫。なかなか少女らしい反応である。

マタビの出血、それは八雲紫のほば真下から飛び出したために見てしまったパツによる鼻血であった。こちらはこちらでなかなかに初心である。

「……見たのね？」

「焼き付けました！」

サムズアップとともにいい笑顔で返答するマタビ。

「クロス」

「え？いや殺しちゃったら式にできなふおっはあああぶねえええ！ー！」

「クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス」

スコロススコロススコロススコロススコロススコロススコロス
スコロススコロススコロススコロススコロススコロス

般若のような表情を浮かべつつ、うつろな瞳でひたすらマタタビに弾幕を放ち続ける八雲紫。

「え、なにこれすごく怖い！？オレそこまで悪いことした！？別に腿のあたりがちょっとプヨプヨしてそうだとか思ってたな「コロオオオオオオス！！」やっちまったＺＥ」

さらに勢いを増す弾幕、しかし最初のころより放ち方が雑になっていくため所々に隙間ができていく。いくら身体能力が落ちていようと体が通るほどの幅ができていれば躲し続けるのに何ら問題はない。しかし躲せるとはいえ間断なく放たれているその中を逆走して紫のもとにたどり着くのは今のマタタビでは難しい。少なくとも2、3発は被弾するだろう。

「その2、3発が問題なんだよな、この状態（木端妖怪クラス）だとそれですら持たなそうな気がするもん」

距離を詰めなければ刀はふるえない、避けつつ矢を放ったとしても途中で弾幕に当たれば軌道がそれてしまいまともにあてることができないだろう。

「てえことは、やっぱり上か下からダイレクト、だな」

マタビは背負っていたBCロッドを手に取り、器用に弾幕を躲しながら詠唱を始める。

これは余談だが、杖を背負っているとはいっても縄でくくりつけた
りしているわけではない。

彼が着ている若草色の羽織。これはいわゆる特別性でありかなりの
耐久性を誇っている。

さらにこの羽織にはある能力が張り付けられている。その能力とは
『物質をくつつけるのに必要な力を生み出す程度の能力』
である

それにより生み出される力はいわゆる『吸着力』。それに使って羽
織の背中には杖や矢立を、腰には刀や変形弓をくつつけているのだ。
マタビが妖力を流すのをやめさえすれば簡単にはがれるため、戦
闘中に武具を持ち帰る際の邪魔にはならない。というよりは邪魔に

ならないようにわざわざこの羽織を作ったのだが。

「破邪の天光煌く神々の歌声　クロア・リュオ・クロア・ネウ・ト
ウエ・レイ・クロア・リュオ・ズエ・レイ・ヴァ」

いつも通りに詠唱は終わった。術式の構築もいつも通りに済ませ、
発動させるためのポイントは先ほど一瞬弾幕の隙間から八雲紫が見
えた時に特定してあるようだ。

あとはタイミングを計って放つのみである。そう、今のように弾幕
にさえぎられて八雲紫からマタタビの姿が見えない時に。

『グランドクロス!!』
カッ!!

「!しまっ」

紫の足もとに白い魔方陣が展開され、それに紫が気づいた時にはすでに術は発動していた。

そう、いつも通りに

「……やったか？」

それはやってないフラグである。

光が晴れるとそこにいたのは

「・・・あら、派手な割に全然痛くなかったわね」

まったくもって無傷なうえにダメージを負ったそぶりもない八雲紫がいた。

「え？ちよ、ええ！？これ一応譜歌の中では威力高いほうなんだけど！？」

マタタビは驚いている。まあ当然だろう、いつも通りに放った術がいつも通りに命中したにも関わらず、相手には何の効果もなかったのだ。

だが、彼はひとつ失念している。

「・・・はっ！妖力前より抑えてんのにいつも通りに威力押さえたらだめじゃん！」

以前に比べると、妖力量・質ともに百分の一になっているのだ。そこからさらに加減したらそれこそ見た目だけ立派なハリボテの術が出来上がるのは当然だろう。

馬鹿である。重ねて言おう、馬鹿である。

「ふうん・・・女性の下着を見たうえに体形に口出しして、さらに大妖怪である私に対して手加減ねえ。ずいぶん生意気なことしてくれるわね」

いつの間にか冷静になっていた八雲紫は今のマタタビの発言を聞き、再び不機嫌になったようだ。もっともさっきまでのように我を忘れるほどではないようだ。

「これは式にしたらまず最初に徹底的に躡けてあげないといけないわね」

「全力全開で遠慮いたします」

しかしてこれでマタタビの勝機はとても薄くなった。先ほどのように八雲紫があからさまに隙を見せることはもうないだろう。

長期戦になれば妖力量の少ないマタタビには勝ち目がない。かといって被弾覚悟で特攻したとしてもおそらくあの裂け目に入ることでは逃げられてしまうだろう。

ただ単に封印を外せばいいのだがそれをするつもりはないだろう。なぜならマタタビに勝ち目がなくなっただけではないのだから。

「・・・ふう、仕方ない。妖力差のハンディを考えればこれを使っても卑怯ってハナシにはならないだろう」

「？ あなた何を言って「さあさあ皆々様！本邦初公開、オレことマタタビの創作妖術を披露いたしましょう！」！？」

妙なマタタビのテンションに驚く八雲紫。それを置いてゆき暴走は続く。

「オレの妖術は複雑な効果などほとんどありません。シンプルイズベスト！だからこそ練り上げられた絶対的効力！」

語りながらも己の中で妖術の術式を構築するマタタビ。そう、これはあくまで時間稼ぎのためであり久々に使う妖術にちよつと興奮しているわけではない・・・・・・と思う。

「それでは行きます。マタタビ妖術、妖力の檻」

呆氣にとられていた八雲紫がマタタビのしようとしていることによ

うやく気が付き、阻止せんとマタタビに向けて妖力弾を放とうとする。

「やらせな「今更遅いさ」

『ようかん
妖檻』

キンッ

マタタビが唱えた刹那、うすいガラスのような結界が八雲紫の周りを囲む。

「結界なら外に抜けてしまえばいいだけよ!」
スウッ

足元に開いた裂け目にすぐさま飛び込む八雲紫。結界に触れずに直に外の空間に出るつもりなのだろう。しかし

「さあ、観念しなさってええ!? 結界の中!? なんで!？」

再び裂け目が現れ八雲紫が飛び出したのは結界の内側であった。

「結界とは内と外の干渉を断つためのもの。その結界に刻んだ術式は『内から外への空間干渉を』完全に絶対に断つ」

「なら弾幕で！」

今度は妖力弾で結界を壊そうとする。マタビは言っていないが、今の妖力では完全にこの妖術を扱うことはできない。そのためこの結界の強度はそれこそガラスのように脆い。

もし妖力弾を撃ち込まれればすぐさま壊れてしまうだろう。撃ち込まれてしまったら、の話だが。

「羽^{はね}が為^なすのは牢獄」

『羽^{うしろ}為^な牢^{ろう}』

シュトトトトトツ！

今度は妖力でできたと思しき巨大な鳥の羽が八雲紫の周囲に突き刺さる。体すれすれに縫うように刺さるそれは妖力弾を放とうとしていた八雲紫の動きを封じる、まさに牢獄のように。

「牢獄は捕らえた者を逃がさぬためのもの。無理やり出ようとするならば、手足や首が堕ちても知らないぜ？」

圧倒的な状況だろう。片や平然とたたずみ、片や結界の中で刃のような羽に囲まれ身じろぎ一つできない。

たとえ隙を見て八雲紫が行動を起こそうとしても、マタビに気が付かれた瞬間その体は羽に切り刻まれ細切れになるだろう。

妖怪や神と呼ばれるものの中には肉体よりも精神の重要性が高く、肉体の損傷が大きな問題とならないものもある。それでも妖力でできた刃で切り刻まれたなら死ぬ可能性もあるかもしれない。

そこそこの死線を渡り歩いてきたと自負している八雲紫は当然そのことを理解していた。そして、今の自分には現状を覆せるだけの力量がないことも。

「こ、これで終わりだと思っているのかしら？ 私にはまだとっておきが残っているわよ・・・」

そう、強がりで言ったつもりだった。しかし彼女はすぐにそれを後悔することとなる。なぜなら・・・

「とっておきか、それは面白そうだ。ぜひ見せてもらいたいね。それまで君が生きていれば、だけど」

悪魔のような目つきをした男が光を飲み込むかのような深い黒の瞳を鈍く輝かせながら、その瞳よりもなお暗い刃を手を微笑んでいたのだから。

その姿を見た直後、のちにスキマ妖怪と呼ばれることになる八雲紫は妖生において初めて恐怖で意識を失った。

s i d e マタタビ

ちよつと冗談と思つて微笑みを浮かべながら脅してみたら、絶望に満ちた表情を浮かべて失神しちゃったでござる。

倒れる前に妖力刃も妖檻も羽為牢も消して抱きとめたから怪我はしてないと思う。ふむ、この柔らかな乳の感触が・・・役得役得。いや、このまま襲いかかったりはしないよ？だって紳士だもん。

「でも、オレの笑顔つてそんなに怖かったのかな。そこは少しシヨックだな」

あゝ、久々にオリジナル妖術使つたらなんか疲れたな。なんとなく精神的に。

「今回使った妖術の説明は次回以降に回させてもらふよ、今回はこの大妖怪さん寝かせてあげたいからこの辺で失礼しまゝす」

あ
っ
つ
か
れ
た。

十四歩目（後書き）

あまり本編に深くかわらない余談をまた一つ。

たびたびネタにされるマタタビの目ですが、本人の気づいていない法則性があります。

日常においてまったりしていたり、戦闘中でもそこそこ遊びながらの時は糸目。それはもう開いてるのかわからないぐらいの糸目。

封印を解いた状態や、日常ではまだ描写していませんが鍛冶作業のときや料理中、細工物をしていて集中しているときは少し怖いかな？程度の糸目。

わりと本気な戦闘中や喜怒哀楽などの感情が激しくなったとき、また意識して目を見開いているときは悪魔も逃げ出す目つきの悪さになります。

以上、これからもネタにされるであろうマタタビの目つきについてでした。

十五歩目（前書き）

いろいろ急展開となります

十五歩目

side 八雲紫

．．．．．ん、あれ？私いつの間に
眠って
「っ!？」

まどろみから覚めた刹那、先ほどまで何をしていたのかを思い出
し飛び起きる。

しかし警戒したかいもなく周囲に危険は無いようだった。

先ほどまで戦っていた相手（マタビと言っただろうか？）は一
部が血に染まった岩に背を預け目をつぶっている。彼は目が細いの
でわかりづらいがおそらく本当に開いていないのだろう。

あの血の跡は．．．ああ、そうだ。逃げ出した彼がよそ見をしな
がら走った結果、あの岩に見事にぶち当たったのだ。

私と言えば、若草色の風呂敷の上に横たわっていた．．．．
．．．．．と思っただけが袖が付いているのを見るに、これはあの猫又が来てい
た羽織なのだろう。湿った地面に直に触れないよう私の下に敷いて
くれたのかもしれない。

．．．．．少しずつ頭の中がはつきりしてきた。

私はあの猫又が提示した式になる条件を満たすために戦っていたはずなのだ。だが私は今の今まで意識を失っていた。．．．つまり戦いには負けたのだろう。

正直に言えばくやしい。そして認めたくない。私は自分の妖力と能力に絶対的な自信があった。そこらの神に引けを取らずに戦えるとも思っている。

それが．．．負けたのだ、己よりはるかに妖力の劣る相手に。油断はしていなかったと言えは嘘になる、しかしそれでも自分の負けが信じられない。

「どうして？なぜ負けたの」「目え覚めたかい」「ひいっ!？」

私が起きたのに気が付いたのか猫又が声をかけてきた。いや、それよりも私は今悲鳴を上げたの？何に？この妖怪に？

自分が何に恐怖したのかを思案した瞬間、意識を失う直前の光景が完全に頭の中によりみがえった。

結界の中で鋭い刃物のような羽に囲まれ身じろぎ一つできない自分。

そしてそれをさも愉快そうに眺めながら、それでいて目はゴミや汚物を見るかのように、手には触れただけで魂すら断ち切られてしまいそんな暗い刃を持った目の前の男。

その瞬間、私の中で何かが決壊した

「い．．．や．．．．．」

「ん？どした」「いやあああああああああああああああ！！！」
「！！」錯乱状態！？」

Side
マタタビ

はい、どうも皆さんこんにちは。猫又のマタタビです。

[illegible]

ただ今ディスプレイで串刺しにされてます。いや、淡々と言つていい状況じゃないんだけどね。いい具合に動脈やら内臓やら貫かれてやばいことになってるよ。

大妖怪の嬢ちゃんが目を覚ましたのはいいんだけどさ、いきなり錯乱して近くに置いてあったディスプレイボード持って切りかかってきたっていう。一撃目を躲したらそのまま縫い付けるように岩

に向かって刺されました。

……オレ、ヤンデレはあんま好きじゃないんだよね。つ
て言ってる場合じゃねえよ、マジで死ねるわこれ。

いやあ、敵意がないのを示そうと思つて武具をあえて嬢ちゃん
そばに放置したのが裏目に出たね。さすがオレの傑作、いい切れ味
してるわ。素人が使ってるにもかかわらず、後ろの岩に半分以上突
き刺さってるや。

にしてもホント錯乱してるみたいだな。一心不乱に刀を押し込み
続けてるもん。本気で殺したいなら今のうちに能力でなんかするな
り他の武具を手にとって何かすればいいのに、それすら考えつか
ないみたいだもんなあ。

まあ先ほども言つたようにオレは猟奇的な女性に何かされて喜ぶ
趣味はないわけでして、早急に何とかいたしましょう。

嬢ちゃんを今殺しちゃえば早くて楽なんだけどね。この場で殺
すのは惜しそうな逸材だからやめておこう。あんまり女の子を手
にかけたくはないしね。

さてほかの手段だけど、まず嬢ちゃんを拘束するのはNG。これ
以上恐怖を与えるとマジで壊れちゃいそうだからね、精神こころが。とい
うよりオレの微笑みがここまでの恐怖を植え付けていたという事実
にオレのハートが壊れそうです。

それにどてつばらに突き刺さった刀のせいで満足に動けないっていう。刃が腹の中心を向くように刺さってるからあんまり動くと内臓がぐちゃぐちゃになってしまう。いやまあすでに結構やばいんだけどね？

殺せない、拘束できないってなるとあとは嬢ちゃんに落ち着いてもらうほかないんだけど難しいよね。ここまで錯乱した状態で説得に応じるはずないし。

スヒリア
精神に干渉できる武具ソーマがあれば楽だったんだけど手持ちにはなし………。あ、やばいそろそろ視界がぼやけてきた。

仕方ない、とっておきを使うかな。

「手が届く範囲にいてくれるのが救い、か」

しゅるり、と尻尾に巻きつけているリボンの二つのうちの白い方をほどく。妖力は可能な限り自力で抑制して嬢ちゃんに刺激を与えないようにする。

「グレイブニールよ。恐怖を縛りつけろ」

無我夢中で刀を押し込み続けていた嬢ちゃんの左の手首にリボン・
グレイブニール
・『神縛り』を結びつける。

神縛りとは神の作りあげた、どんなものでも縛りつけることのできる鎖。

オレの妖力を封じるような使い方もできれば、感情や理性・記憶といった精神的なものにも作用することができる。

この力を使つて嬢ちゃんの中の恐怖の感情を縛りつける。おそらく我を失つた原因は恐怖のはずだから。ちょっと無理矢理だけこれが一番手っ取り早い方法だと思う。

「殺すころすころ……え……私、何を……？」

ほらおさまった。

「あゝ、大妖怪殿？落ち着いたのならこの刀を抜いていただきたいのですが」

割と死にそうです。余裕そうに見えますが若干彼岸花が見え始めております。抜いたら出血がひどいことになりますがこのままじゃ何もできません。

「これ、私がやったの？」

そうDEATHよ。ってか予想よりむちゃくちゃ落ち着きましたね。

「ごめんなさい、今抜いてあげるわ」

「その発言に若干のエロスを感じたオレってあゝ ああああゝ ああ！
！グリグリしながら抜くのやめて！でちゃう！血とか内臓とか出ち
やうからあゝ ああああゝ あ！！！！」

うん、死ぬかもしれない。

「すごい出血してたみたいだけど大丈夫なの？」

「とりあえず大丈夫だ。・・・顔見知りの死神が手招きしてたけど」

我ながらよく生きていたと思う。もう少しで旅立つところだったかもしれん。岩によりかかることでようやく立っている状態だし。

「それは大丈夫とは言わないと思うのだけど・・・そんなことよりもなぜ私はあなたを殺そうとしていたのかしら？そこまでするつもりはなかったはずなのだけれど」

「あー、直前の記憶とんだ？・・・まあ簡潔に言えば、恐怖の対象であるオレを・・・抹消しようとしたってとこだね」

「恐怖？べつに今の私はあなたを見ても怖くもなんとも思わないわよ？」

「それは・・・説明がしんどい。その左手の帯のおかげとだけ・・・
・・・言っておく」

そこまで言っていると怪訝な表情を浮かべた嬢ちゃんが、左手の神縛りへと右の手を伸ばしてゆく。

「解くなー!!」

「・・・なによ、ちょっと落ち着かないから結ぶ場所を変えようと

「ただけじゃない」

不機嫌そうな表情で嬢ちゃんが言い返す。……ああ、恐怖の感情がないからふてぶてしい態度なのか。

普通なら自分に勝った相手にここまで傲岸不遜な態度をとるとは思えないしな。……いや、もしかして素か？

「今解かれたら……また錯乱して襲い掛かってくるだろうが。それは遠慮したいんで……ね」

「これを解いただけでそうなるとは思えないのだけれど……」

「結構強力な神器なんだ……それぐらいの効力はある」

この世界に神縛りはオレの持つてるリボン二つと、魔狼を縛りつけてるオリジナルの鎖一本しか存在しないはずだ。結構貴重品なんだよね。

神器つてのは……神様の作るものつそい道具の総称だ。オレの武具も一応神器に含まれます。

「神器つて……なんでそんなもの持つてるのよ」

「まあオレにもいろいろ事情が……おろ？」

不意に視界が傾き、そのまま横倒しに地面に倒れこむ。足元には血だまりができていて、ドチャツと飛沫しぶきをあげる。

「ああ・・・結構やばいな。血い・・・流しすぎか」

「ちょっと！なにしてるのよ！？あなた怪我を治す妖術を使えるんでしょう！？早く治療なさい！！」

そうしたいのはやまやまだけど・・・無理なのよね。

「オレの治癒術は・・・オレの生命力を治癒力に変換して放つ・・・のよ。今生命力消費したら・・・確実に死ねる・・・」

「なっ！？馬鹿！！なんでそれを先に言わないのよ！？」

「聞かれなかったから・・・というより・・・オレ自身ここまで生命・・・力が枯渴するのは久々だから・・・忘れてた・・・ぬお？」

ああ、頭がボーっとしてきた……。と思つたら急に大妖怪の嬢ちゃんに腕を掴んで引き起こされ、肩を貸される状態にされた。

「どした……。？……。ドレスが汚れんぞ？」

「そんなこと言つてる場合じゃないでしょう！あなたにはいろいろ協力してもらいたいことがあるんだから死んでもらっちゃ困るの！私の屋敷に運んでそこで治療するわ！！」

……。ふむ……。デレか？

……。我ながらこんな時になんつアホなこと考えてんのだ。それどころじゃ……。ないっての。

「お気遣い……。感謝するが……。不要だ。それより……。傷を治すなら……。行きたい場所がある……」

「どこ！？早く言いなさい！私のスキマですぐに連れて行くから！」

あー、スキマっつーのか……あれ。

「いや・・・移動はこちらです・・・。ってことでちよつと・・・協力してもらっていいか？」

「？　あなた何を言っ……？」

いや、嬢ちゃんじゃなくて……ね？

(ん．．．久々にうまい血をたくさん飲ましてもらつたから構わない？．．．それは．．．．．なんとというか、怪我の功名か？いや、すぐに了承してもらえて．．．こちらとしてはかなり助かる。)

（ああ、血止めの加護はありがたい・・・これ以上失血するとシャレに・・・ならなそうだから。いやいや、力不足なんてとんでもない・・・十分すぎるくらいだよ。）

（そのうち別に礼はさせてもらう．．．．．気にするな、命を間
接的にとはいえ救ってもらえるんだ．．．．．礼を欠かさない
のが粹ってもんだろう。）

（何？血まみれで女に肩を貸してもらってる時点で粹じゃない？・・・
言っな。）

（まあ今作ってる酒がこなれたら・・・それでも持ってくるよ・・・
・・・ん？酒もいいがまた血を飲ませろ？・・・
・・・覚悟はしとく。それじゃあ・・・頼む。）

いつの間にやら血だまりがなくなっている地面は大して気にせず、
つま先で地面を軽く二回叩く。

「何なの・・・これ」

するとオレ達の目の前には先ほどまでなかった一対の障子戸が現
れる。・・・成功してよかった。

「この先だ・・・入るぞ・・・？」

「よくわからないけど・・・わかったわ」

大妖怪の嬢ちゃん（これからはスキマの嬢ちゃんと呼ぶことにする）に肩を貸してもらいながら障子戸を開き、その先へ歩き出す。
・血止めのおかげでかなり楽になった。それでもまだやばいが。

血だまりの分だけでなく己の作務衣やスキマの嬢ちゃんについていた血さえ一瞬で消えていたのを見て、礼に行くのが恐ろしくなったのは秘密だ。

障子戸を抜けた先は足元の飛び石以外はすべてが白い空間。十間じっせんほど先にまた障子戸があり、そちらが出口だ。この空間についての説明は後々にさせてもらう。

いつの間にやらスキマの嬢ちゃんは、オレに肩を貸しているのは反対方向の手でオレの羽織にくるんだ武具たちを抱えてくれている。・・・ありがたい。正直、失念していた。

「大妖怪殿・・・、わざわざ荷物を持ってもらってすまない・・・。
羽織さえ着せてもらえれば・・・自分で持つよ」

「自分一人で歩くことすらできないのに馬鹿言ってるんじゃないわよ。それよりあっちが出口でいいの？」

「ああ、そうだ・・・そこを出ればすぐに治療にかかれる・・・」

「ならさっさと行くわよ」

そう言って視線を戻したスキマの嬢ちゃんに引かれ、オレも足を進めていく。

それにしてもこれほど死を意識したのはいつ以来だろうか？ テュポーンとエキドナを因幡のを守りながら殺した時？ 七十を超える爵位持ちの悪魔と戦った時？ それとも初めて主神クラスと出会った時かもしれないな。

いずれにせよ木端妖怪程度に妖力を抑えた状態では、普通の戦闘がそれほどの危険があるかもしれないってことだな。・・・今後は気を付けよう。

「着いたわよ。開ければいいの？」

「ああ、頼むわ。オレの屋敷にようこそ・・・ってとこかな」

この障子戸の先はオレの屋敷・・・その中の道場につながっている。本来ならすぐさま目的の場所に行きたかったけど、そこにはちよつと結果みたいなのを張っているから直にはいけない。

まあでも、道場の裏戸を出れば目的の場所は目の前だからそこま

で問題はない。血止めのおかげでだいぶ意識もはつきりするようになった。

満身創痍だが、久々に自分の家に帰るとなるとやはり楽しみだ。道場にはことのほか手を入れているからなおさらに。

少し空間をいじって広げてあるそこには英雄たちの武具が飾られている。もちろんオレが作り、振るってきた自慢の作品たちだ。屋敷にいるときは大半をそこで過ごしてきたようにも思う。

それに・・・花は、咲いているだろうか。かれこれ数千年ここを離れていたが、きっと今でも毎年美しい花をつけているのだろう。

懐かしの我が家への期待を込めて開け放った障子戸の先には

見る影もないほど穢^{けが}れた空間が広がっていた。

壁に掛けられていたはずの武具は投げ出されている。

剣が槍が盾が杖が矛が細剣が斧が拳が刀が弓が投げ槍が棍が銃剣が大剣が鎚が、放り捨てられ床に落ち積み重ねられ壁に刺さりあるべきものはあるべき場所になく。

獣の死体がそこかしこに散らばり、見れば今にも悪霊になりそうなほど憎悪の思念に満ちた魂が漂いあつてはならぬ場所にあつてはならぬものがあり。

かつて神聖な空気さえただよっていたそこは今や悪魔ですら敬遠したがるような汚くよどんだ気配に包まれている。

「汚いわね……………」
「ここで治療なんてできるの？」

「……………」

「ちょっと、聞いてるの!？」

スキマの嬢ちゃんが何か言っているがどうでもよかった。貸してくれていた肩から腕を外し、道場の裏口に向かって足を引きずる。

ここはどこだ？ああ、オレの屋敷だった。おかしいななんでこんなに汚れてるんだ。なんで？わかりきってるじゃないか、誰かが入り込んで汚したんだ。

だれが？どうやって？屋敷の周りには絶えず濃い霧が張っていて、どんなに動き回ろうと屋敷にたどり着けないようになってるはずなのに。いや、そんなことも今はどうでもいい。

「そんな体でどこに行く気！？」

嬢ちゃんに腕を掴まれる。・・・・・・邪魔をしないでくれよ。

『離れる』

オレの言葉を聞いた嬢ちゃんが手を放す。そして自分の行動が理解できない様子でオレから少し距離を取る。

「えっ！？なんで・・・・体が勝手に動くの・・・・？」

「ごめんよ嬢ちゃん・・・・少し『静かに』していてくれ」

「・・・・・・？・・・・！」

スキマの嬢ちゃんがいかにか口を大きく開けて息を吐き出そうが声は出ない。オレが『静かに』しろうと言ったから。

血の跡を残しながら……いつの間にか止血が利かなくなつてな……裏口にたどり着く。そして金車かなくるまが錆びているということではなくスムーズに戸が開く。

戸の先には一寸先も見えぬほどの霧が広がっている……が。
「『デープミスト解除』」

あらかじめ設定しておいたコードにより徐々に霧が晴れる。この先にあるもの。あるはずのもの。それが少しでも穢されていたら、きつとオレはブチ切れる。すでに十分キレそうだが。

「……!……!」

霧が晴れたその先には一本の木があった。大樹と呼ぶには小さいけれど、とても大きなその木は前にここを発った時と同じように綺麗にそこに生きていた。

「ああ……よかった。お前は無事だったんだな」

「貴様は誰だ。俺の屋敷で何をしている」

後ろから声が聞こえたと思った刹那、背中に斜めに痛みが走る。
振り向いた先には、背中から黒い羽根をはやした黒髪赤目の男が立っていた。・・・血で濡れたとても見覚えのある細身の剣を手に持
つて。

「・・・・・・・・!!!!」

「イテエなあ・・・だれだてめえ」

「先に聞いたのはこちらだ。答えろ下郎」

・・・うぜえ。なんか嬢ちゃんが知ってそうな顔してるから嬢
ちゃんに聞こう。

「『話して』いいよ」

「っあ！やつと声が出る！天魔！あなたはいきなり切りかかるなんて何をしてるの！？マタタビも何ぼけつと突っ立ってるのよ！！」

「………天魔？」

「おや妖怪の賢者殿、鯉のように口を開け閉めしてるから宴会芸の練習でもしてるのかと思ったよ」

「黙りなさい天魔！私にそのような口をきいてタダで済むと思ってるの？」

「そちらこそ口には気をつけたほうがいい。俺を敵に回すというのはこの“天狗の山”を敵に回すということだぞ」

天狗の山？…………ああなるほど、だいたいわかった。
つまり

「お前ゴミか」

「貴様……それは俺に言って」「うるさい。」「黙れ。」「動くな。」「見るな。」「聞くな。」「感じるな。」「」

オレの発言を耳にしたゴミ屑は立ったまま固まる。今はこいつはどうでもいい。

「なあ嬢ちゃん、この天魔ってやつ。それと天狗の山ってのがどういふものかわかる範囲で教えてくれるかい」

「あなたそれより怪我のちりや」『教えてくれ』「この天魔は天狗の頂点に立っている男」

「天狗ねえ・・・それでここは天狗の山の中なのかい？」

なぜかオレの質問に答えてしまうスキマの嬢ちゃん。なぜ答えてしまうのかわからないって表情をしている。

「天魔がいるということはそうだと思う。天狗は自分たちの住処から出ることは少ないわ。それにさっきまではもやがかかったようではわからなかったけど、ここは以前来たことのある天狗の山の妖力を感ずる」

もや・・・ああ『ディープミスト』のことが。

「以前大天狗から聞いた話では、彼らは何千年も前からこの山に住んでいるらしいわ」

「それだけ聞ければ十分だ『もういいよ』」

「!？ あなたさっきからいったい何してるの!？それよりも早く治療しないと！ キャツ！」

「貴様・・・俺に暴言を吐いた罪、許さぬぞ」

『もういい』と発言したことにより嬢ちゃんへの命令は解かれた。けど同時にゴミ屑の拘束も解除されてしまった。

自由になったゴミ屑が背中中の翼から突風を放ち、それにより油断していたスキマの嬢ちゃんが吹き飛ばされる。まあ、先回りして受け止めたけど。

オレ？あんなそよ風でよろけるわけないじゃん。今は神縛り一本分の封印しかないから妖力五割五分解放されてるんだぜ？でも大半を生命維持に回してるから放出してるのは大妖怪程度だけだね。

今も後ろまで貫通してる腹の傷と背中中の刀傷から血があふれている。

「貴様がいかなる攻撃を放とうと、俺の『天魔の盾』は貫けない」

ゴミ屑が左手にはめた赤と白を基調とした独特の形状の小盾を掲げながら、こちらを見下した目で見てくる。

同時にオレの中で何かが切れ始める。

「大人しくこの『天魔の剣』で殺されるがいい」

今度は鐔の部分に大きなレンズがはめ込まれた青を基調とした細剣を構え、どうだとも言いたげな表情をしてきた。

さつき切れ始めたのが何かわかったわ。あれだ・・・堪忍袋の緒ってやつ。うん、今それが音を立ててキレた。

こいつがさも誇らしげに自分の武器だと宣言した武具は、両方オレの作品だ。小盾は『アステリア』、細剣は『イクティノス』。

こいつがオレの武具を私物化しているということは、オレの屋敷を穢したのもこいつってことだろう。よし

殺そう

っと思っ
たらスキマの嬢ちゃんに腕を掴まれた。
後ろにはスキマ

も開いている。

「逃げるわよ！さすがに天狗全員を敵に回すのは分が悪いわ！」

ああ、そつか。天狗ってたくさんいるんだっけ。じゃあみんな殺さなきゃ。とりあえずこの山にいる中で強そうな連中を・・・いた、八匹か。オレの土地に勝手に住み着くダニどもは根こそぎ駆除しないとね。

『来い』

一言つぶやきゴミ屑の後ろを指さす。次の瞬間そこには八匹の天狗が存在した。

「なっ！？もう天狗たちが！？急ぎなさいマタタビ！！」

オレが呼んだのに騒ぎ始める嬢ちゃん。状況がつかめず困惑する八匹の新たなゴミ。・・・ああ、女の子もいるけどいいや、ゴミはゴミだ。

嬢ちゃんがまだ持ってくれていた武具の中からディスプレインテグレイトを抜き取る。ああ、頭がぐらぐらする。

「にやはっ」

[illegible]

オレの笑いに呆気にとられていたゴミどもの目の前にエレスライズによって強化された脚力を用い一足で近づく。

まず、輝力を込めた右手の爪による斬撃で天魔のゴミ屑の手から小盾と細剣を弾き飛ばす。出血がさらにひどくなる。

返す爪撃で粗末な武器を構えようとしたゴミを五匹まとめて床にたたきつける。同時に喉の奥から上がってきた血が口からあふれる。

三撃目で逃げようとしていた天魔のゴミ屑を含めた全員を一か所に集めるように吹き飛ばし、その後高く跳躍しながら抜刀する。のけぞった体勢を取ったために腹の傷口から勢いよく血が噴き出す。

刃には輝力を纏わせている。その様は強く輝き、天に覇を唱える神すら断つ雷の刃と化す。

それを下で呆然とした表情をしているゴミどもに向けて、全霊の力を持って叩き落とす。

「断ち切れ極光」

天霸神雷断

ズッガアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!

・・・生命維持に回していた妖力すら攻撃に回した、オレの全妖力の約五割の攻撃。

重ねて加減せずにはなった『天覇神雷断』。第四秘奥義であるこれは、たとえ木端妖怪程度の妖力で放ったとしても、本気でやれば大妖怪を絶命させるだけの威力は十分にある。

それを現在出せる最大の力で放ったのだ。こんなゴミどもは肉片すら残っているはずがない。

・・・邪魔さえされなければ。

オレの刀の切っ先にあるのは、ゴミどもを消し飛ばした後の道場の床ではなく、頭から角を生やし緑の長髪をなびかせる男児。素手で刀を掴んでいるが傷一つついた様子はない。

オレはこいつを知っている。今の自分じゃこいつに傷一つつけられないのも知っている。でもうぜえ。

「阿呆が。久方ぶりに帰ってきたと思ったら何をとち狂っておるのだ」

「邪魔だド阿呆。後ろのゴミを消させる。『離せ』」

「くたばりかけの貴様の命令など効くわけなかるうが超ド阿呆。・
・少し落ち着け、お主そのままでは本当に死ぬぞ」

「・・・・・・チッ。わかったよ」

さつきから目の前の景色がぐにやぐにやになってる・・・。さすがに生命維持を切ったのは・・・まずかったか・・・。

デイスインテグレイトから手が離れてしまう。・・・。。さすがに立つのもおぼつかなくなってきた。と思ったら超絶ド阿呆に肩を貸される。・・・今日は情けない姿をさらしてばかりだな。

「外に出るぞ。ここの空気はお主の怪我によくない」

「ああ、・・・悪いな」

ここの空気が体に悪いのは事実だ。まずは怪我を治し、それから屑どもの処遇を決めるとしよう。

視界の端に目を見開いたスキマの嬢ちゃんが映る。・・・なに驚いてんだ？・・・オレの腹？

視線を下に移すと先ほど手から離れたばかりのディスプレインテグレイトの刀身が腹から突き出ている。

「なんだ？」

後ろを見ると、先ほど呼び寄せた天狗の中の一匹、結構可愛い嬢ちゃんが涙目になりながらオレの背中側から刀を突き刺していた。
・・・あ、やべ、致命傷。

「『・・・』すまん・・・オチる」

意識がなくなる直前、最後に感じたのは古くからの友神が身構える感覚と、そいつからオレの全開よりもさらに大きい神気があふれだした感覚だった。

三秒後、マタビの屋敷のうち道場・母屋・離れの三分の二がこの
世界から消失した。

十五歩目（後書き）

あれ？主人公死亡？

いやいやいまだに原作キャラとほとんど絡んでないのに、こんな早いうちに死なせるわけにはいきませんよ。

これから十日後二週間程度の間隔で投稿していくことになると思います。

皆さんからの声援・罵倒雑言をお待ちしております。

十六歩目（前書き）

若干短いです

十六歩目

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・釣
れん」

「いや、だから釣れないって言ってるじゃないですか」

これだけいるんなら釣れてもいいと思うんだが……。おっと失
礼、皆様こんにちは猫又のマタビです。

現在大絶賛釣り中です。え？なんで前回の終わりからいきなり平
然と釣りしてるんだ、話がつながらないだらって？

いやいやそれがつながるんですよ。なぜならここは

「三途の川の魚は幽霊だから絶対に釣れませんか」

はい、三途の川でございます。つまり進行形で死にかけです。

まあ体のほうはあいづがいるから死ぬことはないだろうし、ぶっちゃけた話が黄泉^{よみ}返り待ちだねえ。

「そんなことしないで早く死んでくださいよ」

「おいてめえこら、死神がその発言は洒落にならねえよ」

ちなみにさつきからやいのやいの言ってるのは以前から顔見知りの死神だよ。名前は………忘れた、野郎の名前はあまり頭に入らん。

「本気ですもん。僕の夢はマタビさんの魂を船で運びながら辞表を書くことだっていつも言ってるじゃないですか！」

「それならお前さんの夢はかなうことはないし、退職も永遠にできないな
あ、釣れた」

「だからこそ今夢を叶えるためにここにいるんじゃないですか
ってええええ！！なんで釣れちゃうんですか！？」

ケツの下で騒ぐな鬱陶しい、釣れたもんは釣れたんだからしゃあないだろうが。

ちなみにこつちに来てすぐに死神この四葉は鎌を持って襲ってきたから返り討ちにして椅子代わりしております。ケツの下って言っても決してウホツ的な状況ではありません。

「なんで釣れたって・・・ああ、そういえばこの竿オレの魂を変化させて作ったからじゃねえの？」

普通の竿なら釣れないけど魂でできた竿だから魂同士こう・・・なんていうか、相性的な？

「魂を変化って・・・本当マタビさんって何でも有りですね。彼岸に来たのに魂が生前の形を保ってるのも初めて見ましたし」

「いや、それはただ単にオレが完全には死んでないってだけだろうよ。にしても釣れたはいいいけど魂じゃ喰いようがねえな、逃がすか」

魚の魂を逃がし（川なのにカツオが釣れたのはちよつとびっくり）また糸を垂らす。釣りとは過程を楽しむもの、さっきはああ言ったがただ竿を振っているだけでもなかなか面白い。

「そういえばお前さん死神局の局長になったって前に言ってたなかつたっけ？なんでそんなお偉いさんがいまだに河の船頭やってんだ？」

「いやまあ・・・たしかに偉くはなっただけですけどね？その分仕事も増えまして・・・書類仕事は部下に押し付けて、そのかわりにここの仕事をしてるんですよ」

「押し付けんなよ！？部下泣くぞ！？」

「いやでも本当に最近仕事の量が尋常じゃなくて・・・死神局だけじゃなくて閻魔省も最近は雇用数を増やそうと募集をかけてるみたいなんですよ、死神局も呼びかけてはいるんですけどね」

ああ、最近人間がどんどん増えてきてるしそれに比例して妖怪も増えてるからなあ。そら仕事も増えるか。あ、また釣れた。今度はシイラか、リリース。

「大変だねえ。それで職員は集まってるのかい？」

「まだ何とも・・・ああでも、閻魔省のほうは地藏尊の方々に新たに閻魔の役職を与え始めてるみたいです。まだまだ少数みたいですが」

ほう、地藏尊にか。そういえばあそこのお地藏さんはまだいるのかな？見に行くたびにやつれていくように見えて不憫なんだよなあ。よし、今度見に行こう。おお！？カジキマグロ！ってさっきから海水魚ばっかじゃねえか！

もはや手で外すのも面倒なので手首のスナップを利かせて空中で魚を逃がしたところ、体が引つ張られるような感覚が来た。

「んあ？そろそろこつちとはおさらばみたいだな」

「え！？ようやく死んでくれるんですか！？」

「違いよ。男が目え輝かせんな、美形にやられるととても腹が立つ。

「そうじゃなくて現世に戻るんだよ。」

ところでなん

で閻魔大王はオレの魂を狩って来いって言ったんだ？」

「いやぁ最近^{タレさん}は閻魔大王様の求心力も落ちてまして、^{マタ}ここらで主神^{タレさん}の魂を裁いて立場の維持をと……………あゝ」

「ほーほーそうかそうか。珍しくこいつが実力行使に出たと思ったら、やっぱり閻魔大王（小物）の命令だったか。」

「なるほどなるほど、閻魔省つてあつちの方角でよかったよな？」

「ま、マタタビさん？合ってますけど、ソノドデカイマハウジンハナンデスカ？」

「おやおや死神君？なんかすごい汗かいてるけど大丈夫かい？オレ

の頭上にある半径十メートル超の魔法陣が何かってそりやあ

「閻魔省を消し飛ばすためのものに決まってるだろい！マタタビ妖術、撃ち落とす銃撃！」

落銃！！

カツ！！！！

まばゆい閃光とともに極太のレーザーが魔方阵から放たれる。そして数拍おいて

あそれ大爆発、にやはつ。

「それじゃあ閻魔大王への説明たのんだぞ、つて口から魂出てる！死神にも魂つてあつたんだな、まあいいや。よろしく」

よだれとか魂とか「人生オワタ」とかいろいろなものが口から漏れてる死神を置いて、引き寄せる力に身を任せる。

起きたらスキマの嬢ちゃんが見病してくれないかな？とかちよつとした期待を抱えつつ、いざ現世へ！

「ちょっと前のオレの期待を返せ馬鹿」

「命の恩神に対しての第一声がそれか大馬鹿」

意識を取り戻したらね、目の前にあったのがね、野郎の顔っていうね？泣くぞこら。

っていつか顔ちけーよ。十センチぐらいしか離れてねーよ。

両手両足が神縛り^{グレイブニール}で拘束された状態で寝そべってるオレの腹の上に古くからの友神が胡坐^{あぐら}をかいて座り、オレの顔を覗き込んでいた。怪我猫の上に座んな。

「とりあえず儂^{わし}の生命力と神気を譲渡しておいた。傷はふさがってるはずだ」

「いや・・・生命力はまだしも、妖怪に神気送り込むなよ。普通浄化されて死ぬぞ？」

「お主が普通に浄化されるわけないだろうがっ・・・と」

超馬鹿が跳躍して何かを手に取り、空中で胡坐の体勢を取る。っ

て、ちょ、おまつ

ZUN!!

「ぐほぁ!!..!」

「ふむ、やはりお主の腹の上は座り心地がよいのお。ほれ、食え」

「今ので傷口開いたぞクソが・・・ってかその桃はもともとオレのだろうが、なにをさも自分のもののように振る舞ったのだおのれは！」

てめえは外見通り（12〜14歳ぐらいの少年程度）の体重じゃ

ねえんだから直に腹の上に落ちてくんない！いろいろ出そうになったわ！

そしてそいつが手に持っているのは一つの桃の実。前回オレが心配した道場の裏手にある木はこの桃の木だ。オレの命と同じぐらい大切な桃の木。

外見は普通の桃の木だが、その内面はオレと同じくらいの長い時を生きている神木（妖木じゃないぞ？）であり、その実は神族やオレのようにいろいろ超越した存在にとってはそんな所そこの薬なんか目じゃないほどの特効薬になる。・・・なんか仙豆って言葉が頭をよぎったが何のことだ？

「ったく、神縛りよ『ほどける』。それで？オレは何日眠ってた？」

「二日ほどだ。・・・ほっ」

「させるか」

ZUN！！

「ふぬお！！」

オレが拘束を解いて桃を受け取ると同時に、今度は自分の分の桃を取るために超馬鹿がジャンプ。そしてまたオレの腹の上に胡坐で落ちてこようとした。

今度は身体も自由なため、あらかじめ奴のケツの位置に向かって寝ながら蹴りを放しておく。見事に尾てい骨に入ったために悶絶してやがる、ざまあ。

「二日か・・・結構本気で危なかったかもな」

無様にケツを抑えて転がる阿呆は放っておき、右手に持った桃を食いつつ左手でしっぽに神縛りを結んでいく。我ながら器用だよな、これ。

あれ、神縛りが二本ともある？つてことは・・・

「おおう、これまたスキマの嬢ちゃんご乱心中か？」

「おお・・・尻が割れる・・・！」

だめだ、こいつは話を聞ける状態じゃない。どこか近くにいないかなーって、すぐ横にいるし！地面に布団（オレの屋敷のモノっぽい）ひいてそのうえで安らかな寝顔で寝てるけど

「胸の上で手を組ませるな。この表情でこの寝方は死んでるようにしか見えんわ」
ドスッ！

「ぬおおおおお！尻があああああ！！！」

絶対こんな寝かせ方したのこいつだろ。一瞬驚いてしまったのが悔しかったためさらにケツに追撃を加えておいた。

まあ、寝てるなら都合がいいか。これから先、長い付き合いになりそうだし顔合わせるたびに腹刺されたらたまらんからねえ。スピリタ精神の治療といきますか。

すでに桃は食い終え、傷は完全に塞がっている（HP/MAX：TP/MAX状態）。相変わらずすごい効き目で味も最高、この桃でピーチグミ作ったらミラクルグミより効果高いよ絶対。もはやエリクシールレベルだよ。

さてそれは置いて。スピルリンクできてさらに治癒術も使えるとなると・・・あれかな。

「『来い』エルロンド」

エルロンド・・・こいつは『コハク・ハーツ
アंकレットミソミソ娘』を再現可能な武具・・・
・・・なんだけど解放前はただの足輪なのよ。さらに解放すると出てくるのはバトン。いや戦闘には使いにくいったらありやしない。
まあ使えるけどね。

「そんじゃあ、レッツダ〜イブ」

オレの体が光の塊と化し、嬢ちゃんの体に入り込む。おえっ、酔いそ！

若干到着までに時間かかるから説明しておく、スピルリンクつていうのは対象の精神にスピリア潜り込むこと。

これができるのは神秘の武具ソーマって呼ばれる一部の武具だけなのよね。つまる話この世界ではオレしか使えない技術。

スピリア精神の中は、スピルメイズって呼ばれる入り組んだ迷路になっていてその最奥にはスピルンスピルンって呼ばれる宝石が存在する。

その宝石が生き物の精神であり魂であり感情をつかさどる器官でもある。心的外傷トラウマっていうのは耐え切れないほどの恐怖を感じた時にこのスピルンが傷付いちゃうことなんだよね。オレは少なくともそう解釈してる。

「っさて、到着つと。おー、見事にヒビ入ってるねえ」

スピルメイズの道中はさつさと飛んでスルーしてきちゃいました。だって長いし。

いざ嬢ちゃんのスピルンを見てみると、恐怖をつかさどるスピルンがもうヒビだらけ。……。オレの微笑みの破壊力っていい。

「イケメンでないのは知ってたさ。しってたけどさあ！」
『レイズウィル!!』

回復系思念術の効果によりスピルンのヒビはほぼ修復された。完全に治しちゃあオレに負けた教訓が無駄になっちゃうからね、多

少しは恐怖も残しておかないと。

本当にちよつと冗談のつもりで脅しをかけてみただけなのに……
。それだけで精神を破壊しかけるなんて……。

「まあ、過ぎたことを悔やんでも仕方ないか。嬢ちゃんもそのうち目を覚ますだろ。ってことでリンクアウト」

入ってきたときと同じようにオレの体が光の塊と化し、今度は一瞬で嬢ちゃんのスピルメイズから脱出する。すると目の前にはいまだにケツをおさえている阿呆の姿が。

「尻が……真つ二つになってしまった……！」

「待て、もともと尻は二つだ　　ってそっぴやお前の場合はそうとも言い切れんか」

今でこそ人の形をとってるけど、本当の姿はこんなもんじゃないからねえ。

ちなみに今のこいつの外見は、頭の両脇から二本の角が生え、淡い緑の長髪に服は微妙に和風で……んー、まあ簡潔に言えば『守る強さを知る物語』の『大？星竜』そのまんまだ。

本当にこの姿を始めてみた時はこの星がエフィニアなのかと思っ
たよ。でも外見はそっくりだけど中身は全然似てないのよね。

「お主、儂の尻にいたい何の恨みがあるのだ！」

「なぜそこでお前に、ではなくお前のケツに、なのかが激しく気
になるがまあいい。お前数分前にオレの腹に何をしたかもう忘れたの
か？」

「・・・？何かしたか？」

「阿呆！そのケツが腹の上に落つこちてきたせいで傷口開いたんだ
よ！お前はクソ重いんだから少しは行動を考えろ！」

「誰が阿呆だド阿呆！それに傷口が開いたのは儂のせいではないわ
！その程度で堪えるような鍛え方しかしてないお主の体が悪いのだ
！」

「あゝあゝ！？オレの鍛え方が悪いだと！？少なくとも人の土地に
引きこもって何万年も惰眠をむさぼってるやつよりは鍛えこんでる
わ超ド阿呆！」

「誰が引きこもりか！儂とて鍛えておるわ！見よこの引き締まった
肉体、いつもいつもへらへらとしまりのない口元のお主とは大違い
ぞ！超絶ド阿呆！！！」

「口元は関係ねーだろーが！つかへらへらじゃなくいつも笑顔を絶やさないと言」
うるさい「あべしっ」

阿呆と仲良く会話に興じていたら後頭部に側頭部に衝撃が

ってまあ、スキマの嬢ちゃんから妖力弾くらっただけなんですけど。

「妖怪が気持ちよく眠ってる横であなたたちは何をぎゃあぎゃあと

」

そこまで言っただけのほうを見たとき、嬢ちゃんの目に一瞬だけ畏れの色が浮かぶがすぐに取り繕ったのか見えなくなる。

うん、そうそうこれぐらいが程よいんだよね。

そしてオレが頭に攻撃をくらった瞬間から腹抱えて笑ってる後ろの阿呆を蹴り飛ばしてもいいでしょうか？

「第一あなたは重症じゃなかったのかしら？猫又さん」

「猫又さんって・・・普通にマタタビと呼んでくれて構わないぜえ、スキマの嬢ちゃん」

「質問に答えなさい」

睨むなよ、怖いなあもう。

「この木のおかげで万事快調さ」

そう言いながらオレの後ろにある桃の木を指さす。

「・・・どうにも居心地の悪い空気がすると思ったらこの木のせいね、妖怪にとつてはこの清浄すぎる空気は毒よ。なぜそれがあなたの快癒に繋がったのかわからないけど」

「まあ体質みたいなもんさ。」

ああそれと、居心地悪いからってこの木になんかしようとするなよ？」

「いや・・・と言ったら？」

なんとなく厭らしい笑みを浮かべつつ、こつちを値踏みするよう
に言ってくるスキマの嬢ちゃん。そんなこと言われたらすることは
一つに決まってるジャマイカ。

「殺すよ？魂の一かけも残さずに」

「ッ！」

「まったく嬢ちゃんさ、寝起きで機嫌が悪いのかもしれないけど発言は選ばないと危ないよ？オレの怒りの矛先がとある連中に向いてなかったらO H A N A S Iしてるとこさね」

第一この木に手をあげようとしたら、オレだけじゃなくオレの後ろでようやく笑いが収まった阿呆も敵に回すことになるぜ？この世界で敵対しちゃいけないトップ2だよ？

「ふーっ・・・ふーっ・・・笑いすぎて腹が痛い・・・」

・・・こいつのこの姿を見て、実際の姿を想像できる奴はいないと思うけどね。

「あら？その後ろで笑い転げている子は誰なのかしら？」

嬢ちゃんの冷や汗だらだら流しながらも話の矛先を変えようとした発言。そういえばこいつが出てきたあとはすぐさま大惨事になったから自己紹介とかしてなかったか？

大惨事の内容？それはもちろんオレの視界の端に移る屋敷の残骸のことに決まってるじゃないですか。

氣い失った後のことだから正確に何があつたかわかるわけじゃないけど、おおよその予想はできる。たぶん実行犯はオレだし。

オレが睡眠・失神などで意識がない状態の時に、外部から一定量より大きい敵意を受けるとオートで発動する術がある。それは『操^{うめいふ}冥符』っていう術で、発動した際に向けられていた敵意の分だけ周囲の存在を無意識に攻撃する。

まあ無意識に攻撃するってことで加減せずに暴れちゃうわけでしょう・・・、起動して天狗どもをボコリ始めるのに約一秒、あいつがオレを殺さないように注意しながら止めようとしたとして約三秒程度で屋敷が半壊したんじゃないかと思う。

そんでそのあとは嬢ちゃんに巻いてあつた神縛りもあいつが回収して、オレを一応拘束した状態で監視。その後現在に至るってところかな？まああくまで予想だが。

「ぬ？おお、そういえば挨拶がまだであつたのう。僕は「引きこもりで万年寝太郎の馬鹿野郎」と申す。っておい馬鹿者！かぶせるな！」

「間違つてねえだろうが。それよりどうせ挨拶すんなら一回にまとめちまおうぜ？ってわけで
『来い』」

二日前にやったのと同じように適当な場所を指さして命令する。
すると次の瞬間には見覚えのある九匹の天狗がそこに現れた。

包帯だらけの姿で。

「にやはっ、なんでこんなボロボロなんだよ？お前オレを止めたんじゃないのかよ？」

「いや、止めたことは止めたのだが・・・その余波で全員吹き飛んでしまったのう。そのせいで屋敷も壊してしまったわ」

屋敷壊れたのこいつらのせいだよ。ん？吹き飛ばしたのオレだからオレのせいかな？まあどうでもいいか。

いきなり自分のいる場所が変わったため呆気にとられている天狗どもの中から天魔を探しだし話しかける。オレの横ではスキマの嬢ちゃんも啞然としてるけどとりあえずほっとこう。

「やあやあお山の天狗のお頭さん？ご機嫌はいかがかな？」

「・・・き、貴様・・・いったい何を・・・なぜ俺はこんな・・・ところ・・・に・・・ぐっ！」

こいつ全身に包帯巻いてるけど絶対そんな重症じゃねえだろ。おかた軽傷でも大騒ぎしてしつかりとしすぎた治療を求めたんだろうな。

「ふむ、それでも会話しづらいのは面倒臭いな」
『リザレクシヨン』

ってことで天狗全員分の怪我を治してあげること。オレってばやっさし。

「・・・これは！？傷が治った！？」

「さて、改めましてご機嫌いかがかね、天魔さん？」

「くっ・・・礼は言わんぞ」

「いるかそんなもん、反吐が出るわクズが。感謝の念を持ったなら今すぐ生まれ落ちた罪をこの世のすべてに懺悔しながら愉快に滑稽に無様に死にさらせカスが」

「なっ！？」

おお、侮辱されたのを理解できるぐらいの頭はあるんだな。鳥っばい羽が生えてるから鳥頭で理解できないかと思っただ。

「べつに人様の土地に勝手に入り込んだ空き巣どもなんて即虐殺でもいいんだけどな？寛大なオレ様が話し合いの場を設けてやったんだ。感涙にむせび泣いてそのまま死ぬ」

「・・・マタタビ、あなたさっきから口が悪すぎない？」

「口が悪い？この程度で咎められてたら、オレの心中吐露した時にはこの小説が公開禁止になるっての」

「????」

あ、やべえ。言うてはいけない発言が。

「ッ覚悟!!」

治療の前から比較的軽症っぽかった一匹の大柄な天狗が腰に佩^はいていた大太刀を抜刀、そのまま首を狙い薙ぎ払ってきた。遅いし太刀筋荒いし力任せだし

ガシッ

「この程度で殺ろうたあなめられたもんだねえ」

武具で受ける必要すらないさね。

「何っ！？素手で我が必殺の一太刀を!？」

「雑魚はお呼びじゃないよ」と
バキンッ！！

そのまま握力だけで大太刀を粉碎。腰を抜かしたらしい天狗は・
・放置でいいや。

「まったく、こちらが至極平和的に紳士的に言葉という文化的な手段を用いて和解の道を示してあげようとしてるのに奇襲するなんて・
・あれか？殺されたいの？自殺志願者ならその辺の岩にでも頭叩きつけて死んで来いよ」
ベシッ

「あだっ」

「相手を馬鹿にする態度をとりまくっておいて話し合いも何もないだろうが、まずは名のろうとせんか阿呆」

「それを言いたいだけならわざわざ頭を叩くなつてえの・・・おゝ
いてえ」

身長的に届かないのにジャンプしてまで頭を狙うなよったく。

「我が友が失礼をした、だが貴殿らにも非があることを知ってもらったうえで話し合いをしたいと思う」

「……俺達に非があるわけがなかつ。まずは名を名乗れ無礼者めらが」

天魔がおのれの立場を理解していない偉そうな態度で命令したきた。ほれ見ろ、こういうやつらは丁寧な態度をとると図に乗んだよ。

「うむ、儂は序列二位『無名の龍神』と申す」

「おいおい、そっちまで言う必要があるか？まあいい、オレは序列一位『絶対狂者のマタビ』だ」

まあ、せいぜい実りある話し合いを期待するよ？

十六歩目（後書き）

はい、（ほぼ）オリキャラ扱いの龍神登場です。

原作では名前だけの登場で性格やらなんやらの描写がなかったため、外見はグレイセスのソロモスから、性格は子供のような大人のような・・・まあそのような感じのキャラとして書いております。

十七歩目（前書き）

話がなかなか進まないのは仕様です。仕様だけにしょうがなげふんげふん。

十七歩目

さて、皆様方こんにちは。猫又のマタタビと申します。

今のオレの境遇ですが

「「「「.....「「「「

天狗の面々＋スキマの嬢ちゃんから、はあ？何言つてんのこいつ？って感じの目で見られております。正確にはオレではなくオレの横の龍神が。

「ふむ、マタタビよ、どうして彼らは皆呆けておるのだ？」

龍神が小首を傾げながら聞いてくる……。男がそういうしぐさをするなど言いたいが、妙に似合っているために心の内だけにとどめておくことにする。

「あー、あれだ、うん。きっと皆『こんな童^{わい}が龍神サマなわけねえだろ』って思ってたんだろうよ」

まあ確かに外見は角が生えてる以外は普通の子供みたいなものだしなあ。しかも顔つきは見ようによつては女に見えなくもなかったりするし。

それに魍魎ちみょうりょうが知る龍神の情報なんて【でつかくてすっこい龍】
って感じだろうしね。この姿でも準主神クラスぐらいなら龍神だっ
てことに気付けるだろうけど、さ。

「なんと・・・儂が龍神であるのは確かなのにそれを理解してもら
えぬのか、今の世は・・・」

「人神妖魔が増えてきた昨今、お前さんを見たことのない若い衆が
大量にいるのも仕方ねえっての」

・・・それに、さ

「オレと違って名前だけでも知られてるんだからまだましだろうよ・
・・・」

「ぬ・・・そうかもしれぬな」

だいたい引きこもっているために交友関係を広めることのないこ
いつよりも、日常的に旅を続け世界中の者たちと親交を深めてきた
はずのオレのほう知名度低いつてどういうことよ？

いやまあ、龍神こいつみたいに自然の象徴だとか幻想の祖だとかって言
われるような扱いを望むわけじゃないよ？それでも一部の知り合い
以外には低級妖怪としか見られていないオレの扱いはさすがにひど
くね？

「……はあ、時代の流れはかくも無常也」

まあ信じてもらえずとも今はそれでいいや、とりあえず今はこの天狗の面々の処遇を決めるための話し合いが目的だからねえ。

「さて、オレらはお望みどおり名乗ってやったんだ。先ほどの治療に関して多少なりとも感謝の念を持つならこちらの質問に答えてくれないかい？できれば一番年経た天狗がいいんだが」

「それならば私がそうだが、何を聞きたいのだ。早く言うがよい」

大天狗の内で一番老けた外見のオスが名乗り出たな。まあ見た目通りか。態度はむかつくがとりあえず良しとしよう。

「ではまず一に、お前さん方……天狗はいつからこの山を己のものとしている？」

「私とてそのころから生きているわけではないが……伝え聞くにはおおよそ一万年前より代々この山を治めている」

てえことはオレが以前此処を発ってからすぐなのか？むしろ前回戻ってきたときはすでにいたのかもしれんな、矮小すぎて気づかん

かった。

「龍神よ、こいつのいつてることは本当かい？」

「僕はここ数千年寝とったからわからん」

「寝すぎだ阿呆」

だめだ、龍神^{こいつ}はあてにならん。

「二にお前さん方、この山の神にはきちんと伺いは立ててるかい？」

「神に？私はこの山に生まれて二千年は経つが神など見たこともない、居たとしても私たちにおびえて姿もみせん低級な神なのだろう」

むつかーん、予想はしてたけどこの思想は腹立つわ。なんでここが住みよい山なのか理解してないねえ。ってか最高齢の天狗がたった二千歳かよ、最近の妖怪は短命なのか？そーなのかー？

「そいでは三に、お前s彦山豊前坊！貴様は何をこのような妖獣風情の問いに律儀に答えている！さつさと切り捨てる！！」・・・イラッ」

オレと龍神の名乗りから今まで黙ってた天魔^{てんま}が、こちらを見もせずにおレの発言を遮りやがった。風情っていう野郎に言われたくないワード第三位にランクインしている言葉つきで。

っつーかさっきオレに切りかかってきた天狗を軽くあしらった姿を見たり、その前にオレに瞬殺されかけたくせにいまだに実力差っていうか格の違いを認識してないのか？このクズは。

いいかげんこれはもう

「紳士的タイム終了のお知らせ。龍神よ、これから【話し合い】をやめて【尋問】に移る。異論は？」

「無い」

不敬罪つてことで、ちょっと大人気なくイキますよ？

「さあ〜て天狗の子らよ・・・こつち見ろやゴルア！！」
ズドン！！

足元を軽く踏み鳴らす。するとそれだけで軽めの地震が発生します。本気でやるともつとすごいよ？

「なっ！？貴様いったい何をs「誰が発言を許可した？黙れやクズが！」ヒイツ！？」

年配の天狗さん、ちょっとだけ、本当にちょっとだけ放った殺気

で腰を抜かしてしまいました。おもらし（小）のオプション付きで。オムツしたほうがいいんじゃない？

「宣言通り、これより先は話し合いではなく【尋問】だ。テメエらの態度の悪さにより最善の解決方法は消滅いたしました、ごしゅーしょーさま」

さつきまでは抑えていた妖力を解放すると（とはいっても神縛りつきなので一割だが）天狗九匹＋スキマの嬢ちゃんの表情が驚愕と恐怖の色で染められる。

「こつ、この妖力・・・いえ、これは神気！？マタタビ、あなた神だったの！？」

「ん？いやいや俺はただの猫又さ。この質問最近されたような気がするねい、まあ嬢ちゃんはしばらく黙っててくれるかい？

さて、オレ様の土地に勝手に踏み入ったクズども、これから先オレが質問したら五秒以内に嘘偽りなく答える。答えなかったり虚偽の発言をした場合、お前ら一族郎党皆殺しとする。女子供であろうと容赦はしない、生まれ変わることをすらできぬように魂の一片まで殺しつくす」

さてさて、オレの妖力にあてられた中でまともに口をきけそうなのは・・・一匹だけか。駄目つ駄目だなこいつら、この程度で呆然自失とか話にならん。しかも一番強くあつてしかるべきはずの天魔もアウトだし。

「それではそこなお嬢さん・・・おりよ？お前さんオレのどてつぱらに刀を突き刺してくださった娘っ子じゃねえの」

「ひっ！」

「ああいやいや別にその件に関しては怒ってないよ、あれは油断した俺が悪い。質問に正直に答えてくれんなら何もしないからさ、いいかい？」

首の骨外れんじゃねえのってぐらい高速でうなずく天狗の嬢ちゃん。ちよつと面白いかも。

「さて、それじゃあまずお前さんの名は？」

「わっ、私は鞍馬山僧正坊！っです！」

「それっておそらく本名ではないと思うんだが・・・まあいいや、とりあえず鞍馬のって呼ばせてもらうよ。さて鞍馬の、死にたくない？」

「はいっ！！」

「よし、いい返事だ。オレもできれば無益な殺生はしたくないんだよ、でもそこのお偉い天魔様が余計な口をきいたおかげで今君たちの命はすごく危うい状況となっている。わかるね？」

またうなずく鞍馬の。ホント首痛めんじゃないのか？ちよつと心配。

「それでも慈悲深いオレとしてはできる限り穏便に済ませてあげようと思うんだ。だから答えてくれるかい？ふむ……それじゃあまず、お前さん方の後ろにある屋敷　　つってももはや残骸だけど、これの存在は知ってた？」

「い、いえ……私も子供のころからこの山に住んでいますが、初めて見ました……」

「およ？そうなん？中が酷い有り様だからもつと侵入者がようさんいるのかと思っただが」

「以前からこの山には天魔様に許された者しか立ち入ることができない屋敷があると言われていたので、そのことではないのですか……？」

「あ？」

「ひい！？」

鞍馬のの発言に反応して天魔のほうを見ると、悲鳴を上げて後ずさる。人の顔見て悲鳴を上げるなんて失礼な。

それにしてもなに？もしかして天魔の奴、道場の部分だけじゃなく完全にオレの屋敷を私物化してたのか？あー、くそ。一回屋敷の大掃除しないといけなそうだな、こりゃ。

「まったく、人様が精魂込めて作り上げた武具だけでなく屋敷まで勝手に私物化するとは……あ、人じゃねえか」

「なっ、なんだ！？来るな！近寄るんじゃない！！」

「うるせえよボケが」

ガスッ！

「ぐほあっ！うつ……うおえええええ」

うわ、汚えなおい。軽く腹蹴った程度で吐くんじゃねえよ。天魔とかたいそうな名前乗ってるくせに無様すぎるなこいつ。

「や、やめてください！天魔様が死んでしまいます！！」

なんかイラついたので天魔の腹を蹴りまくっていると、鞍馬のに縋り付いて止められる。ふむ、背中に柔らかい感触が……やや乏しいが。まあぶっちゃけ鬱陶しいのでさっさと引きはがした。

「ああすまんすまん。そういえばまだ尋問だったな、しかたねえから治療してやるよ」

『ヒール』

「ぐあっ……はあ、はあ……な……のだ」

「ん、なんだって？」

「なんなのだ貴様は！」
ドスッ！

「あら痛い」

傷を治してやったとたんに、天魔が懷からナイフを取り出しオレの足に突き立てる。『セントトレーサー』だな、こんなまで持ち出してやがったのかこいつ。

まあナイフを取り出した瞬間に殺すことも躲すことも当然できたんだけど、なんか面倒だったのでそのままくらってみました。今は生命力の補給も済んでるしこれぐらいの怪我なら・・・ほら、なおった。

「なぜ足を刺されて身じろぎもしない！なぜ俺の剣で切り付けたのに死んでいない！！ここは【天狗の山】！！俺の山だ！！俺が一番強い！！俺が望めばすべてその通りにならなきゃいけないんだ！！なのになぜお前のような奴が現れる！！俺の屋敷を吹き飛ばし、俺を見下す！！俺こそがこの山での絶対の存在なんだ！！貴様のような存在はあつてはならないんだ！！！！」

ふむ、うるせえ。どんだけ！（エクスクラメーションマーク）付けてんだよ。

「足踏みするだけで地震を起こす！？足につけられた傷が短剣を抜

さて、どうなったか説明しようか。

天魔が口を開くと同時に桃の木のそばにいた龍神が一足のもとに距離を詰め、天魔に向けて拳を振り下ろす。当然天魔の目の前に張ってあった妖檻に直撃、18枚目まで一瞬で貫通、19枚目でぎりぎり止めることに成功。

拳圧による余波で天魔の周囲の地面は2 m以上えぐれ、灰色の石の層が見えるようになってい（オレの屋敷の地下室の天井。掃除しなきゃいけない場所が確実に増えたorz）。

余波は当然その周りにも広がっているが、桃の木とスキマの嬢ちゃんには5枚、大天狗たちには各1枚（我ながら甘いねえ）妖檻を張っているため被害はない。

ほかに目に見えて変わったことと言えば空にまばらにあった雲が掻き消え日差しが降り注ぎ、もはや土台を残して木片の塊となったオレの道場を照らしていることぐらいだろう。……こいつ、止めさしやがった。

木片を眺めながら再建作業は絶対に龍神に手伝わせようと考えていると、その龍神がこちらを振り向くことなく叫びだす。

「何故だマタタビ！なぜ止める！こやつはお主のことを！！」

「落ち着けつての龍神。オレが化け物呼ばわりされただけでキレるんじゃないよ。ってかお前はオレの山を消し飛ばす気がつての」

いやマジで。妖檻なかったらこの辺一帯荒野になってたぞ？

「お主は化け物などではない！！彼奴ら^{きやつ}が何と言おうとお主は！！」

ああ、くそ。完璧にキレちまってるな、これは。昔のことをい

つまで引きずってんだか……まあこいつは本気でオレの身を案じて言ってくれてるからありがたいとは思うのだが。

「はぁ……まったく世話のかかる。『落ち着け』、龍神よ」

仕方ないので言葉ではなく『力』を使い龍神の気を静める。……あんまし友にはこれやりたくないんだけどねえ。っと、もう結果は解除しとくかねい。

「ぬ！……むう、すまぬマタタビよ。またやってしまった……」

「オレはあん時のことはもう気にしてねえって言っただろうが。オレのために怒ってくれるのはうれしいが、こんな鳥一匹の発言に目くじら立てることもねえってえの」

「……たとえお主がそう言おうと、儂にはお主があのようになれるのは我慢がならぬ」

最後にそうとだけ言うた龍神は桃の木のそばに歩いていき、地面に直に禅を組み桃の木に背を預けて目を閉じた。あゝあ、あれは相当不機嫌だな。

にしても屋敷が吹き飛んだのは仕方ないとして、地面に穴ぼこ開いてるのは不便だよなあ。ちゃっちゃんと治しちやいますか……つてことで

「あるべき姿に『治れ』」

吹き飛ばされた分の土が蠢くようにして集まり、地面を元のように平坦なものにした。
若干くぼんでいる気がしないでもないが。

「ん、まあ良しとするか。それじゃあ尋問を再開して　　って
スキマの嬢ちゃんどうしたのよ？そんな鳩がエレメンタルマスター
喰らったみたいな顔して？」

「・・・これだけ常識はずれなものを見せられてどんな表情をし
るっていうのよ！」

「？」

「何を言ってるのかわからないみたいな表情してもダメ！なによさ
っきの結果！物理攻撃を受けたらその衝撃を内部で分解して許容量
を超えたら自壊、自壊する際には衝撃を受ける方に向けて力を放出
させることによって衝撃を弱める、そんな複雑な術式を二秒足らず
で構築した拳句に結果一つにかける妖力量は弾幕一発分以下！？あ
りえないわよ！」

おゝびつくり。あの一瞬でよくそこまで理解したもんだ。これは
なかなかいい逸材を見つけたかもしれないねえ。

「一つ補足を加えるとしたら、さっきの結果は妖力・霊力・神気を
受けるとそれを吸収して強化されるようにも作ってあったさ」

「・・・なおさらありえないわ。それじゃああの結界を破るのに身体能力しか使われなかったってことじゃない・・・・・・・・。あの方が龍神様っていうのも本当かもしれないわね・・・」

「だからさつきそう名乗ったろうが」

「あれだけで信じられるわけないでしょ！・・・・・・・・あら？さつきあなたたち名乗るときに『序列』が何位だのって言うてたわよね・・・・・・・・？」

「ああ、オレが序列一位で龍神^{あいつ}が二位だよ」

「そう、それよ！それってひょっとして・・・・・・・・」

まあ、おおよその予想はつくだろうねえ。

「当然、『この世界での強さの順番』のことだよ。つまりオレが世界最強、あいつはその次」

「…………スキマの嬢ちゃん、それはもはや乙女がしていい表情じゃないと思うぜ？」

「……………ごめんなさい、ちょっと理解できなかったのだけでもう一回言っていただけないかしら？」

「だから、お前さん方の知ってる『世界の頂点に立つ存在である龍神』よりもオレのほうが強いってこと」

そう言い放った瞬間のスキマの嬢ちゃんの表情はまさに絶望一色。つてなぜ絶望すんのさ！？オレが一番強くちゃいけないの！？

「頭が痛くなってきたわ……………もうこの件に関してはこれ以上聞きたくないぐらいに……………」

「この件に関してはってことはまだほかに聞きたいことあんのかい？」

今ならいろいろ答えるよ？天狗はほとんど龍神の正面にいたから、怒気をもろに浴びて恐怖で失神しちゃってるからねえ。唯一鞍馬のだけはオレの後ろにいたから無事だけど。

その鞍馬のもさっきの惨劇を見て顔色真っ青だししばらくは尋問すらできそうにないからねえ。さすがにこんな状態の娘に尋問を続

けるほど鬼畜じゃないよ。

「ええ、いい機会だからいろいろ聞かせてもらっわ。格上の存在から話が聞けることなんてめったにないもの」

ああ、たしかに基本的には強い奴ほど傲慢で人の話を聞かない＆人に話を利かせないからねえ。まあ弱者の中で強い奴、の話だけど。自分が最強と思い込んでる雑魚は性質たちが悪いよね。

「まあ嬢ちゃんとは長い付き合いになりそうだ。疑問点があったら早いうちに消化しちまおうぜい」

「こちらとしても末長いおつきあいを希望するわ。強者とのコネはいくらあっても無駄にはならないもの。．．．．．それで、さっきの地面を治した術はいつたい何？妖力どころか霊力、魔力ましてや神気も何一つ感じなかったのだけれど」

「ん？あああれかい？あれはまあ説明が必要なほど難しい話じゃないよ。単にオレがこの土地神だっただけの話」

「なるほど、そういうわけね．．．って土地神！？あなたさっき自分は神じゃないって言ったじゃないの！」

スキマの嬢ちゃん、さっきから叫びまくりでのだ痛くならないのかな？

「オレは基本はただの猫又だよ。第一、土地神つてのは厳密に言えば神族ではなくて、その土地において最も強かったり最も土地との親和性が高かったりする存在がその土地を治める存在になることを言うのさ。だから妖怪や獣、果ては生きている人間で土地神やつてる奴だつていたりするさね」

「・・・そんな話初めて聞いたわ。ならあなたはここの土地神だからあんなことができたってことなの？」

「そうだけどうじゃないともいえる」

「？」

こんなことを誰かに説明すんのは因幡のにいろいろ聞かれた時以来かねえ。そういえばあいつは今何してんだろ？相変わらずいたずらしてるだろうとは思っけど、元気でやってるといいなあ。

「普通は土地神つて言ってもさつきやったように環境に干渉したりすることはできない。まあ百年や二百年土地神やってるくらいじゃまず無理だね。重ねて言えば、オレみたいに自分の体を維持してる土地神では土地に干渉したりすることはできない。土地との結びつきが強いほど、土地神つてのは存在自体が土地と混ざり合っているものなのさ。つまり本来ならこうして動ける体を持っているオレがこの土地と誰よりも結びつきが強いってのはあり得ないことなのよ」

喋りはじめると止まらなくなる時つてあるよね？なんか楽しくなってきた。

「まあそれでもオレは文字通り気が遠くなるくらいの長い時間をこの土地で生きてきたせいで、魂にまでこの土地の波長が染みついているよ。合わせてオレはいろいろな術式を生み出すのには慣れているからね。それのおかげで土地の限定だけでも多少は理をゆがめられるらしいの影響力を生み出せるってわけ」

ぶつちやけオレ以外にあんなことができるのは、土地神の中でも2〜3体しかいないからね。土地神ってだけじゃまず無理さ。

「ちなみに補足として言っておくと、こないだ嬢ちゃんの口を封じたり天狗を強制的に召喚したりしたのもこの力だよ。この土地の中に限定した話なら基本的には不可能は無い！………と言い切れれば格好いいんだけどねえ。まあ、死者をよみがえらせること以外は大概オレの思うままさね」

ふう、一通り終わりかな？うん久しぶりに語った語った。余は満足zy「あの……」ひょ？

「どうした鞍馬の。なんか気になることでもあったのかい？」

さっきまでオレの横で地面に座り込み呆けていた鞍馬のがオレの作務衣の裾をつまみ声をかけてきた。そういえば土地神云々の話になったあたりからこっちをじーっと見てた気がする。

「あなたは あなた様は本当にこの山の土地神様のですか？」

「そつだよ？だから言っでんじゃないk」「ありがとございます！
！！！！」うおほおびつくりした！！」

え？なに、ちょ。この子なんでいきなり大声でお礼言い出したの
！？

「私は天魔様・・・先代様の推薦で大天狗になることができました・
・・・・・・」

そして語り始めた・・・・。何ぞこの状況？スキマの嬢ちゃんも啞
然としてるし。

「先代様はおつしやられました

「お前は天狗の中で誰よりもこの山に愛された子だ。お前もまたこ
の山を愛し、私たちとともにこの山を守っていつてほしい」

と・・・。烏の身から天狗に変じ、身寄りのなかった私にとってあ
の方は母のような存在でした」

「ふむ」

「また先代様はみんなにこう言い聞かせていました

「私たちが住まうこの山は、常に強きお方が見守っていて下さる。
私たちはこの山に住まうものとしてこの山へ、そして私たちを見守
っていて下さるお方への感謝を忘れてはならぬ」

と……。他のみんなはそんな存在を信じたりしなくて、先代様の
みを崇拜していました。……でも私は以前から誰かが守っていて
くれるような、助けられているような温かい感じがしていると思
っていたんです。だから……。その……。守っていただきありがと
うございます！！」

おー、天狗の中にもきちんとして理解してる子たちがいたんだねい。

「見守っていたかどうかは別として、たしかにオレはこの山と土地^オ
神に信仰心をささげてくれている存在には加護を与えていたよ。ま、
この辺は普通の神と同じさね。ちなみに加護つてのは、『強く、誇
り高くあれ』そのために必要な力が湧いてくるようにね。もしその
先代とお前さん方が『強く』あれたとしたならそれはお前さん方が
この山に、この土地に感謝を持って生きてくれていたからさ。ここ
らこそ、感謝するよ」

「はいっ！！」

うん、いい返事だ。それにしてもこの山に誰よりも愛された天狗
か……。ちょっと気になるねえ。調べてみますか。
ぽむっ

「どうされたのですか？」

「いや、ちょっと気になってね。少し調べぐことをさせてもらおうか
と」

「？」

なんか鞍馬のから一気にオレに対する敵対心やら恐怖感が消えちやったよ。何この子すごく素直でかわいい！

いやいやそれは今はどうでもよくて・・・とりあえず鞍馬のこの山との親和性を調べてみようかああ！？

「あばばばばばばばー!!」

「どうされたんですか!?!」「いきなりどうしたのよマタビ!?!」

くあwse drift gyふじこ1pおぼぼぼぼぼおお落ち着けオレ!まずは深呼吸だ!

「ひっひっふー、ひっひっふー。ってこれラマーズ法!?!」

あ、なんか鞍馬のからはホントに心配される目で、スキマの嬢ちゃんからは汚物を見る目で見られてる。くやしい!でも感じt yじやなくて!?!

「龍神!?!」

「・・・なんじゃさつきから騒々しい」

「後継者見つけた!この子オレよりも山との親和性めちやくちや高い!?!」

「なんと！？まことか！？」

龍神も驚きこちらに駆け寄ってきて鞍馬のの頭に手を置こうとする……が、背が低いせいで頭まで手が届いていない。身体のだどこでも触れればいいってのになぜわざわざ頭を選んだし。

なぜかオレを一瞬睨んだのち（背が高いのを妬んだか？）鞍馬のの手握った龍神もまた驚愕する。

「これは……なんとも……。確かに山に愛されているという言い方がぴったりだのう」

「だよなあ。しかも気づいたか？この封印」

「うむ、この者の力を制御するために、しかし押さえつけることはしない……。穏やかな封印がされておる」

「卓越した技術ってわけじゃないんだが……。なんていうか……。こつ……。巧いんだよな。思いやりにあふれた術式だよ。素直に尊敬に値するね。」

「そうなのう。おそらくは先ほど先代と呼ばれた者が施したのだらう。年若きものであろうに大したものだ」

「え？あ、あの、いったいどうなされたんですか？」

龍神と二人で（二匹で、というべきか？）しきりに感心しあって

いると、鞍馬のがすごく困惑しているのに今更ながら気が付く。

あー、当事者置いてこんな風に話しても仕方ねえよな。まあ単刀直入に行きますか。

「鞍馬の」

「はい？」

「君をここに……【妖怪の山】の土地神に任命する」

あ、天狗の処遇を決めるの忘れてた。

十七歩目（後書き）

主人公以外でのオリキャラ兼準メインキャラ第二弾、天狗の嬢ちゃんです。

いや、天照いれると第三弾？まあいいや。

容姿は髪がセミロングで若干天然そうな射命丸をイメージしてください。外見の描写が苦手なもので・・・。

名前等は次話以降になります。

ご指南・ご指摘ありましたらよろしくお願いいたします。

十八歩目（前書き）

一部グロテスクな表現があります。

そついったものが苦手な方はご注意願います

十八歩目

「君をこゝ．．．【妖怪の山】の土地神に任命する」

いやー、ようやく後継ぎが見つかったよ。よかったよかった。

「え？」

h?

[illegible]

「まあ普通はこうなるよね。」

見事に取り乱し慌てふためく鞍馬の。なかなか面白い光景だねい。

「ちよ、ちよと待ってください土地神さま」「マタタビ」え？」

「オレの名前はマタタビってえのさ。そっちで呼んでもらえるとありがたいね」

「あ、はい、わかりましたマタタビ様！……じゃなくて！？なん
で私が土地神に！？」

この子リアクションが面白いねえ。いじりがいがありそうだけ

ど今は自重しておくか。

「さっきも言っただろい？土地神はその土地と最も親和性の高い存在がなるものだって。そんでお前さんは現土地神のオレよりも遥かにそれが高いんだよ。なあ龍神」

「うむ。現土地神のこいつの親和性がゴミに「おい」・・・カスに「うおい！」うるさいのお。まあ比べ物にならんほどお主のほうがこの土地に適しておるのだ」

こいつどついたらるか？つつかお前はあんま汚い言葉使っとなつての、一応最高位の神様なんだから。

「それにお前さんが土地神になってくれるとみんな
体的にはこの山と天狗の一族が幸せになるぜい？」

具

「どついうことです？」

説明タイム入りまゝす。

「土地の持つ力つてのは基本的には地脈・・・龍脈とも言われてるけど、そこを流れている星の生命力が源泉なのさ。でも通常は地脈を流れる力はひたすら流れるだけ、地表に出てきて土地の力になるのは極々一部。そこで必要なのが土地神なのさ」

「土地神はその土地を表す存在。土地神は己の魂を楔に、地脈から土地へ向けて星の生命力をくみ上げることができる。言ってみれば井戸のようなものかのう？」

「おお龍神、上手いこと言うじゃねえの。そんでもって土地との親和性が高い魂のほうがり深い井戸を掘ることができるのさね。だからお前さんがここの土地神になってくれれば、今よりさらにこの山が生命あふれる土地になるのさ」

「お主にも影響はあるぞ？地脈より生命力をくみ上げるということはお主が誰よりもその恩恵を受けることができるということなのだ。今の妖力は・・・・量が少ないがそれなりに良質だの、まあ大妖怪の下位と言ったところか。そのままでも中位神と同じぐらいの力を持てるはずだ」

「でも鞍馬のはその前に封印かけられてるじゃん？それを解けば下手すれば上位神を超えるぐらいは行くんじゃないかと思うぞ？」

まあ、どの程度封印されているかにもよるけど。

「ひゃわわわわ・・・・・・・・・・」

あ、目え回してる。話のスケールが大きすぎて混乱しちゃったかな？

「ちょっとマタタビ、今の話だと貴方もその恩恵を受けているのではないかしら。それを手放すのが惜しくないの？」

「スキマの嬢ちゃんよ、その指摘はもつともだね」

妖怪が神に匹敵するぐらいの力を手に入れるなんて、そうそうできることじゃないからねえ。

「でもオレぐらい強くなっちゃうと、ほんのちよつとの恩恵ぐらいは無くても気にならないのさ」

いや本当に。実際妖力が減少したとしても全体の十万分の一程度だと思っし。

「・・・どれだけ常識はずれなのよ貴方は。それとスキマの嬢ちゃんなんて呼び名はやめて頂戴。私には八雲紫やくもむかりという名前があるのだから」

「了解したよ、八雲の」

「・・・はあ」

なんだよその溜息は。

「わっ、私は風守縁かざもりえにしと言います!」

「なぜこのタイミングで名乗るし・・・。まあいいや、呼び方はの風守のにしとくかね」

さて、若干それたけど説明タイムはまだまだ続くよ。

「さっき言ったのは風守のが土地神になった場合の土地への影響についてだから、今度は眷属について教えようか」

「土地神が治めている土地では特定の種族・・・土地神のもとの種に近いものも強い恩恵を受けることができるのだ。まあ、強いとはいっても土地神当人が受けるものほどではないがのう」

「ちなみに今はネコ科の生き物がオレの眷属つてことで恩恵を受けてるよ。でもまあ、ほとんどいないんだけどね」

「まだこの島国は猫がほとんどいないんだよね。同族少なくて寂しいです。」

「お前さんが土地神になったら天狗と・・・たぶん鳥類が眷属扱いかな？たしか羽根つきの天狗はもともと鳥だったと思うし。昔の知識だから今もそうかはわかんないけどね」

「あ・・・はい。私は（・・・）鳥から天狗になったのでそうだと思います・・・」

「ん？私はつてことは他は違うのかい？」

「はい、初代天魔様のころは皆白狼や鳥から天狗へと変じていたそうですが、今では天狗同士が子をなしているために生まれつき天狗として存在してる方がほとんどです。ここ数百年では私と先代様以外に鳥からなつた者はいませんでした」

「なるほど。まあこの眷属に関しては実際に土地神になってみればいろいろわかると思うよ」

昔・・・って言ってもオレがただの猫だったころだから億単位前になるけど、そのころの天狗はみんな子供を作ったりはしてなかったけどねえ。この辺は似てる種族でもあの頃との違いを感じるね。

「ああ、お前さんが土地神になることで天狗が幸せになる理由はもう一つあるよ」

「？」

「オレが天狗を皆殺しにするわけにはいなくなるからね。滅亡を免れるなんてこの上ない幸せだろう？」

「ッ！」

オレの発言を聞き、再びオレに対する恐怖の感情が表情に浮かび上がる風守の。いやだから殺したりしないってば。

「ちょっとマタタビ。先刻からあなたの態度を見ていると、どうも天狗の滅亡に執着してない？」

「いやいや八雲のよ、殺りたくもなるぜ？こちとら許可も取らずに自分の土地を私物化されてんだ。それにあの道場の中見たろ？汚いの次元超えてるっての、死骸が転がってるわ悪霊になりかけの亡霊

がいるわ。支配者気取りの天魔がそんなことする奴だつてんなら、この山がどんなひどい目に合わされてきたかわかんねえじゃんよ」

「それはまあ・・・そうかもしれないけど」

「まったく、聞くところによれば先代天魔とやらは理解のありそうな奴だと思ったんだが・・・なんであんなのに天魔を継がせたんだかねえ？」

まあとりあえずその事情はいいや。特に気にしてどうなるってことでもないし。

「・・・私が土地神になれば、みんなは助けてもらえるのですか？」

「その言い方だと脅してるみたいじゃねえのよ。オレが言いたいの、殺す権利がなくなるってことだよ」

「どういうことです・・・？」

「今は土地神だからオレの土地を荒らしたってことで殺す大義名分があるけど、風守のが土地神になったら天狗の土地で天狗が好き勝手やっただけってことになるだろ？それに俺が首突っ込むことはできねえだろうよ。別段むかつくからどつきたいってだけで、そこまですべて天狗全体に敵意を持ってるわけじゃねえし」

まあ約一匹は別だけどねえ。

「難しく考える必要はないって。オレはこの山が程よく栄えてくれるのはうれしいから、オレよりも才能がある風守のに継いでほしい。風守のは今より強くなれるし、ちよつとやらなきやいけないことは増えるけどよりこの山をより良くしていける。そんだけの話さね」

「私で

私にできるのでしょうか？」

「できるかもしれないしできないかもしれない。そこはお前さん次第さ。・・・まあ、何もしないよりとりあえず行動してみてから考えるほうが先へは進みやすいと思うよ？」

立ち止まっっている考えてても、実際にはまったく進歩はしないからねえ。同じ悩むんなら歩きながら悩んだほうが有意義だろうさ。

「・・・・・・・・・・なります」

「ん？」

「ならせてください、土地神に！」

そう宣言した風守のの目には確かな意思が見える。ま、こんぐらいやる気があるようなら問題はないね。

「承知した。そんならすぐに引き継ぎを といきたいけどそうもいかんのよね、数日待っておくれ。いろいろ準備があるの

よ
「

「はい、わかりました」

普通土地神の権利が移るのって、前土地神が死んだ時又は消滅した時だからねえ。生きたまま引き継ぐとするという儀式なものが必要なのさ。

「さて、土地神云々はひとまずいいとして・・・だ」

ちらりといまだに気絶している天魔を眺める。

「こいつの処遇はどうすつかねえ」

ほかの天狗はまあいいんだけど、天魔は別だからね。^{これ}いろいろと無断借用した罪があるし。

いつまでたつても起きねえし、かといってこんな奴にわざわざ力を使ってやるのも癪だし・・・ああ、こういう時に便利なものがあつたじゃないか。しばらく使つてないからすっかり忘れてた。

「座標は・・・地下の第一倉庫、イの棚だっけかな？『来い』」

呼んだことによりオレの手元に現れた一つの道具。虫眼鏡のような形に、レンズの部分には目のような独特な模様が描かれている。

「てってれゝ、スペクタクルズ」

「何よその趣味の悪い片眼鏡は」

八雲の口悪くね？いやまあ確かに独特な造形してるけどさ、趣味の悪いはダメね？

「こいつは使い捨てだけど対象の情報を目視できる道具さ。これを使っただけでこの天魔がやらしたことを見てみようかと」

「効果はさらに趣味が悪いわね」

うん、そこは同感。だってこれを使えば相手の弱点・急所・本人も知らない欠陥なんかもわかつちゃうんだからね。英雄譚に出てくる敵たちもこれがいなければいくらか楽だったろうに。

「さて、お前の罪を数えろ！！」

「

スベクタクルズを目に当て妖力を流しつつ叫ぶ！ちなみに叫んだ意味はない！なんとなく言ってみただけ！

「とまあ、おふざけ混じりにいきたかつたんだが・・・
そうもいかねえなこいつは」

なかなか胸糞悪い経歴してやがんなあこいつ。想像以上のクズだわ。

「風守のよ、先代天魔が最後に姿を見せたのはいつだい？」

「先代様ですか？たしか・・・現天魔様に席を譲った少し前のはずです」

「最後に先代を見たのは誰だ？」

「天魔様のはずです。先代様は席を譲ったのち、付き人も連れずにひとり旅立ったと聞いています」

ハッ、こいつあやっぱし間違いなさそうだねえ。

「風守のよお、先代はもう死んでるよ」

「・・・えっ？」

「天魔てんまの情報にのってる。『先代天魔の首を切り落とし殺害。天魔の位を奪う』ってね」

「そ・・・そんな・・・」

旅立ったあよく言ったもんだ。戻ることのない黄泉への旅路ってか？

まあ一族の長を決めるときに、一番強かった奴を殺した者が次の長になるってことはよく聞く話だからそこはいいんだ。

「お前さんは先代を母のように思ってたって言ってたよな？ならばお前さんには事実を聞く義務がある」

平天狗だった現天魔はある日、山の中で霧に包まれた屋敷オレの屋敷だ　　を見つける。その霧は晴れることなく、また霧の中を進むといつの間にか元来た道を引き返してしまっていたりするため誰も屋敷までたどり着いたことはなかった。

そこに初めてたどり着いたのが現天魔だ。現天魔の能力は『霧を掃う程度の能力』、何の才能もなかったこいつが偶然ここを守っていた『デープミスト』に最も相性のいい能力を持っていた。

現天魔は屋敷を物色、道場に飾ってあったオレの武具に目を付けた。自慢みたいな発言になるが、オレの武具は世に数多あるどんな業物よりも強い代物だ。ただいたずらに振るうだけでその辺のなまくらなんぞ豆腐を切るより簡単に両断しちまう。

その武具の力に頼り現天魔は犬天狗の一匹を殺害、その席に収まる。周囲の反対もあったようだが、天狗の中で最も剣技に長けていたものを一刀のもとに切り伏せたその力を評価した奴のほうが多かったみたいだな。先代は最後まで難色を示していたようだが。

それから数百年犬天狗の位で満足していたが、いつしか更なる欲望が芽生えた。『もつと偉くなりしたい』。だけど先代天魔は強かった。まともな心得もなく剣を振るうことしかできない現天魔では勝ち目のないほどに。

そこで現天魔は策略を用いた。面白いものを見せてあげます、と先代を霧の中の屋敷に呼び出す。しかして呼ぶのは先代ひとり、付き人の存在も許さなかった。

むろん先代も警戒して屋敷に向かったようだが、そんなものは何

の意味も持たなかった。

不思議と道のように晴れている霧を抜け、屋敷にたどり着いた先代が見たのは……何人もの天狗の少女の死体だった。

むごい光景だったはずだ。こいつの行動には『身動きできぬほど痛めつけ、犯し、飽きたら手足を順番に切り落として遊んだ』とあるからな。至極立派なクズの所業だよ。

そして愕然としている先代の前に現天魔が現れる……。身動きできぬよう手足の腱を切られ、のど元に刃を突き付けられた天狗の少女とともに。

先代とやらは優しい奴だったんだろうなあ。現天魔の言った「貴様を殺すことができればこの娘は解放してやる」、その言葉には何の確証もないのに自らの命を差し出した。自分の命で少女を助けられればそれでもかまわないと思ったんだねえ。

けれども当然、先代を殺した現天魔はすぐさま少女も殺害。遺体は屋敷の道場に放置してあったみたいだな。デンプミストのおかげでこいつ以外は進入不能だからこれほどいい隠し場所はなかったんだろうよ。

天魔になってからは愚行が加速したみたいだねえ。以前のように

見目麗しい天狗の娘を権力を用いて手籠めにし、飽きたら殺して隠す。八匹の大天狗のうち四匹はこいつの息のかかった奴だから、行方不明の搜索も行わず親元には「現在鋭意搜索中です」とかわかりやすい嘘の報告させてごまかしてみたいだな。

正直に言わせてもらうと今の天狗社会は腐りきってるな。その元凶がここにいる天魔だね。

「とまあ、お前さんが聞くべきはこれぐらいかな」

「……それは……真実なの……ですか？」

信じられないと言った様子で聞いてくる風守の。気持ちはわかるが

「真実だ、まぎれもなくね」

道場の中にあつた獣の骨の中に、人のものに似た形の頭骨があつたのも。憎悪に満ちた悪霊のなりそこないが漂っていた理由もこれでわかったね。

「信じられないのならあそこの板材をひっくり返してみな。先代のものではないと思うが天狗の骨が転がってるよ」

風守のにそう告げると、ふらりふらりとおぼつかない足取りで歩いていく。オレの言ったほうではなく天魔のほうへと……。そしてそのまま意識のない天魔の首へ手を

「さっせな〜いよつと」
ガシッ

伸ばしたところでオレがその手首をつかんで止める。危ないなあ。今この子揺さぶって起こしたりせず、ダイレクトに首へし折って殺そうとしてたぜ。それぐらいマジな殺気だった。

「なぜ止めるのですかマタタビ様ア！！！」

行動を邪魔したわけだから至極当然抵抗されるわけでした。本気で暴れられるもんだからオレが掴んでる風守のの手首からは血がにじんできている。あゝ、まったく

「暴れんなつての。よいしょ」「きゃ！」

ちよつとした隙を見て風守のを右肩に担ぎ上げる。背中をバシバシ叩かれたり胸元を蹴られたりするが一割解放状態のオレにとっては蚊に刺されるようなものである。

「このクズにはお前さんが手を下すまでもないよ。その綺麗な可愛い手をこんな汚い奴の死で穢すことはしないほうがいい」

「ですが!!」

抵抗がさらに激しくなる、そんな暴れられると服が乱れちゃうよ。実際こんな奴は殺してあげる必要はないって。

「第一こんな奴には死さえ生ぬるいからね。その罪、味わってもらおうよ。己の苦しみをもって」

「え・・・」

ようやく大人しくなった風守のの両脇に手を差し込み、彼女の顔をオレの正面に持っていく。その顔には涙の跡が目に見える。

「お前さんに土地神を継いでもらう前の最後のひと仕事として、こいつへの処罰はオレに任せてもらえないかい？」

精一杯の穏やかな表情を作り、風守のに語りかける。無理にでも作らないと今のオレの表情は確実にやばいものになるだろうから。

「・・・・・・・・わかりました、マタビ様にお任せします・・・」

不承不承と言った様子だが風守のから許可はもらった。それでは妖怪の山の土地神マタビ、仕事納めといきますかねえ。

「龍神よ、これまでの話を聞いたうえで判断を頼む。これより【尋問】から【拷問】へ移る。異論は？」

「あると思うか？結界は儂が張っておく。存分にやるといい」

ははっ、感謝感謝。それじゃあ久々にやりますかねえ。

「ああ、結界は防音と妖力遮断を屋敷の庭の範囲だけで十分だぜ。そこまで激しくはいかないから」

「承知した・・・ふっ！」

キンツ、と言う甲高い音とともに結界が張られたのを確認。それと同時に作業を開始。

「エルロンドに妖力供給。スピルリンク発動。術式簡易創作、情報の直接的精神への投影を目的とする。・・・なお、天魔以下五匹の天狗に対しては苦痛緩和の効果は無しとする」

こういった文は口に出さなくてもいいんだけど、発音することによってイメージを固める意味もあるのでなるべくは口に出すことにしている。

そしてオレと意識のない天狗の頭の周りに幾重もの魔方陣が次々と描きだされていく。八雲のは驚いてるけどこの程度はなんてことないのよね。

「術式創作完了、発動」

「「「「ギヤア、アア、アアアア、アア!!!!!!!!!!!!」」」」
「「「ぐあっ!?!」」」

発動とともに天魔とその子飼いの大天狗四匹は頭を押さえて狂乱、その他三人の大天狗は突然の頭痛に飛び起きる。ふむ、スピリアへの干渉が脳に影響を与えたか。まあ情報を保存する肉体的な部分はそこだしな。

「とりあえずうるさいんで『黙れ』。んで、そっちのお三方、意識は鮮明かい？」

悶え続ける五匹は声を出すのを禁じたくうえで放置。声は出ないのに口をパクパク開いてるのが何とも無様也。

「うむ・・・多少頭痛はするが平気だ・・・。いえ、大変な無礼を働いたことをお許しください、土地神様」

残り三人の中で最も老けた天狗　　たしか彦山豊前坊とか言われてたつけ　　がこちらに頭を下げてくる。

「おや、情報は貼り付けたけどそれだけでオレが土地神だって認めちゃうのかい？」

「さすがにあれほどの格の違いを見せつけられては認めざるを得ま

せん。むしろ納得したぐらいであります」

「ほう、お前さんは結構頭の回りがいいみたいだねえ。んで、そっちの二人は？」

続けて残り二人も無言で頭を下げてくる。ふてぶてしい態度というより、恐れ多くて声を出すこともできないと言った風かな。

ちなみに三人のメンツは、彦山豊前坊とやら・先ほど切りかかってきた大柄の烏天狗・あとは年若い影の薄そうな白狼天狗だ。

「オレが土地神ってことを理解できたってんならもう一つはどうだい？」

どちらかってえとそっちが重要だからねえ。ま、信じてもらえなくてもそれはそれで構わないけどさ。

「ええ、以前から気になって調査はしていたのですがようやく事実が分かりました。もはや私たちはあの男を天魔と認めません」

その言葉に一樣にうなづく二人の天狗。天魔へこの上ない侮蔑の視線を送りながら。

さっきの術で張り付けた情報は、オレという土地神の存在、土地神の継承について、それと天魔の所業のすべてについて。この三人がまともなら、もはやあいつを支持しようとは思わないだろうよ。

そして三人の天狗はおもむろに風守のほうに向きなおり、そろって口を開く。

「『九代目天魔様、我らはこれよりあなたにお仕えいたします』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「いやなんで不思議そうな顔してんだよ風守の」

土地神になつといてただの大天狗でいようとしてたのかお前さんは。

「まあそっちの話はおいおい頼むよ。とりあえずお三方、こっちの連中の対処はオレに任せてもらっていいかい？」

「自由」

「おうけい。それじゃ好きにさせてもらうよ。天魔のみ苦痛を解消、口を開くことを『許可する』」

無言でのたうちまわっていた天魔が息も絶え絶えと言った様子で立ち上がり、いまだ笑顔のオレを睨みつける。

「なぜ・・・貴様があのことを知っている・・・!」

「理解してるだろう？【元】天魔さん？」

「元ではない！俺が天魔だ！！土地神などいらん！俺こそこの山の神だ！！！」

叫びつつ再びナイフを

オレの作品であるセントトレイ

サーを構える天魔。

「汚い手で触るなクズが」

ゴキョッ

「・・・あ？」

ナイフの刃を手でつかみ、そのまま百八十度回転させる。力強くナイフの柄を握っていた天魔の手もそのまま回転、可動域を超えた手首の関節が鈍い音を立てて外れる。

「お前みたいな奴が気安く触っていいほど安い代物じゃねえんだよこれは」

セントトレイサーを送還、第十一倉庫ホの棚へ。一応後で磨かないといけないな。

いまだに自分のありえない方向を向いている手首を呆けた表情で見つめている天魔。ぼちぼちおっぱじめますかねえ。

「お前のすべてを否定してやるよ」

s
i
d
e

o
u
t

s
i
d
e

龍神

「お前のすべてを否定してやるよ」

マタビがそう言うのと同時に、あ奴を包んでいた空気が酷く濁

ったものになる。

「八雲紫とやら、それと天狗の子たちよ。これから先あまりマタタビをしつかり見ないほうがよいぞ」

儂からすればわざわざ忠告してやる義理はないが、たまには親切にしてみるのもいいだろう。

「龍神様、それはいったいどうしてですか？これから何が始まるのでしょうか？」

マタタビが連れてきた八雲紫という妖怪が問う。・・・妖力の量もそれなりだが、かなりよい質を持つておるな。あ奴が長い付き合いになると言っておったが、この娘もこれから苦労しそうだのう。

おお、なぜ見てはいけなかったな。

「誰でも恐怖で狂いたくはないであろう？」

あの雰囲気からしてそこそこキレておるはずだ。纏う空気だけならまだいいが・・・

「あ奴の今の表情は、赤子も泣くのをやめて首を括ろつとするほどこわいぞ」

その発言に天狗はそんな馬鹿などでも言いたげな表情をするが、八雲紫は表情を引きつらせる。…………お主も見たのか、あれを。同情するぞ…………。

儂のそばまで娘ご達が下がってきたのを確認し、薄く結界を張る。多少は緩衝剤を作っておかないと本気で狂いかねんからの。

「お前が積み重ねてきた全て、悉く踏み^{ふみ}にじって蹂躪^{じゅうりゃく}してぶち壊してやるよ」

「お、始まるようだの。あ奴がすることを見るのは止めんど。世には逆らわぬほうがよい存在もいることを知る良い機会だ」

マタタビの目の前で骨の外れた右手首を抱え、恐怖に満ちた目でそれを見上げる天魔。あれを見ても一切の情は湧かんのう。

「そうだな、手始めに…………お前から天魔の位を『剥奪する』」

「な…………なにをいって…………え？」

口を開いた【元】天魔だが、すぐさまそれよりも大きい疑問の声を上げる。

まあ、当然であろう。己が天魔であるという認識が、己の中で否

定されるのだから。

「なぜだ……！？俺が天魔だ！ちがう！？いや、そうだ！ちがう、天魔とは俺だ！？俺は………？」

喚き散らしていた元天魔だったが、だんだん眼元がうつろになりぶつぶつとうわ言のように天魔天魔と呟きはじめる。

「……いったい何が起こったんです？」

「………次期土地神の娘ごよ、お主少し鈍いんじゃないか？

「天狗の子よ、今お主はあの天狗の男をなんだと認識する？」

「それは天魔として……あれ？」

ようやく気付いたか。

「マタタビは力を使ってあの男から【天魔】という肩書を奪ったのだ。今のあ奴は天魔ではない、ただの天狗だ」

「そんなことができるなんて………」

この程度別に驚くほどのことでもないんだがのう。まあまだ若き

者ゆえ仕方なし、か。

「そいじやお次は・・・『来い』」

今度はマタタビの手元に赤と白で彩られた小盾が現れる。あれはたしか　アステリアという武器だったか？　そういえばあ奴を止める直前、元天魔が身に着けておったの。

「それは・・・返せ！　それは俺のものだ！　俺の持つ天魔の盾だ！！」

小盾を見て、それまで壊れたように呟き続けていた元天魔の目に光が戻り、マタタビの手からそれを奪い取ろうとまだ無事な左手を伸ばす。しかし

シャキンッ

「お前のもの？　違うね、オレの所有物だ」
もの

その伸ばした手はマタタビが小盾から抜き放った剣によって斬り飛ばされる。

「いつ！？　うああああ！！？」

鮮血をあげる己の腕を見て狂乱する元天魔。ふむ、あの様子ではおそらく意識を失うことも『禁止』されておるな。

「この武具 『アステリア』 は小盾と、それに内蔵された剣を合わせて一つの武具なんだよ。ただ盾として使っておれのもの？ ばつかじゃねえの、そんな使い方餓鬼でもできるわ」

マタタビは切り飛ばした元天魔の手を掴み、もてあそびながら侮蔑の言葉を吐く。あの様子ではやはり不機嫌だのう。

「さて、これでお前が手に入れた【地位】と【力】は無くなった。お次は【財産】というか。『来い』」

今度はマタタビの力により様々な装飾品、調度品、武具などが大量に呼び寄せられる。烏は光物が好きだというが、よくもまああれだけ集めたものだ。

「にやはっ、案の定ため込んでやがるなあ。しかもオレの武具も結構混ざりこんでるし」

「やめろ……」

「は？」

「やめて……ください。お願いします……」

右腕は手首からあらぬほうへ捻じれ、左腕は手首から先は無い。
そんな両の腕をマタタビに伸ばし許しを請う元天魔。

これで相手が他の存在であつたなら許したかもしれんの。しかし
相手は我が友『絶対狂者』、結果など見えておろう。

「お前は命乞いをした娘を殺したじゃないか。それに比べたら全て
を失うくらいどうつてことないだろう？ここにゐるすべての物の所
有権を」

「止め」

『絶対狂者』その名は奴が狂つていゝと言つてゐるわけではない。
もしそうならそのような呼び名は儂が許さん。

その名に込められた意味は『抗うことを許さず全てを狂わせる者』
奴の氣に触れればそれは破滅と同意義なのだよ。
イレギュラー

「『剥奪する』」

「うわあああああああ！！！」

元天魔は己の頭を抱え地に倒れ伏す。まあおそらくは自分のもの

でない」と認識してしまう意思に抗おうとしておるのだろう。無駄なことを。

「にやはははははははは！無様だねえ滑稽だねえ！己の分もわきまえぬ畜生が砂上の楼閣を崩され翼をもがれ、地べたを這いずるこ
としかできなくなった！！にやはははははははははははは！！」

廃人の様になつた元天魔を見下ろし高らかに笑うマタタビ、はたから見ればどっちが悪者かわからん光景よのう。

「さて、それではそろそろ次に移るか」

「ひつ！？」

「おっと逃げるなって、傷を治してあげるんだから」

今度は切り落とした手と捻じれた手首をあ奴の生命力を用いて発動する治療術で治療する。それにより切り落とされた手はくつつき、捻じれていた手首は元のように治っていく。

・ ・ ・ あ奴がこの程度で許すはずもない、とするとそろそろ【本番】が始まるかのう。

「？ マタタビだったらいったい何を・・・」

「荒事が嫌いならこれから先は見ないほうがよいぞ。ここから先は」

「『【拷問】の始まりだ』」
グチャッ

マタタビが元天魔の目に指を突き立て、頭骨から眼球をほじくり出す。

「視神経ごと引っこ抜くのと結構難しいんだよね、よっ！」
ブチッ！

先ほどまで眼球の後ろから延びていた糸・・・神経によってつながっていたそれを引きちぎり放り投げる。投げられた目玉は放物線を描き儼の後ろ、八雲紫の足もとに落ちる。

「ッ！」

「ああ、悪いね八雲の手が滑っちゃったよ。でもまあ妖怪やってんなら目ん玉くらい平気だろう？」

八雲紫は確かにおびえた。それは足元に飛んできた目玉にはなく、振り返った際に見えたとても楽しそうなマタタビの笑顔にだるうが、の。あ奴の目つきの悪さは尋常じゃないわい。

「ああ風守の バキッ 失神しそうだから ベキッ 先に言つとくけど、これはこいつが過去にやったことを ベリッ！ 殺されちゃった嬢ちゃんたちの分味わって ザクッ もらってるだけだよ」

顔を殴りつけ指を折り、爪を剥いで肉を裂きながら話しかけるマタタビ。すでに次期土地神の娘ごは半分夢の世界に旅立つとるが。

そういえばさっきから静かだがすでに声を出すのを『禁止』されてるみたいだの。これなら防音の結果もいらなかったのではないかな？ まったくあ奴は用心深いというか大は小を兼ねる思考をしておるからのう、必要最低限という考えを知らんのか。

などなど昔から思っていたあ奴の問題点をつらつら考えていると、拷問はひと段落したようだ。すでに両目ともくりぬかれ手足は全てもがれて芋虫状態。耳と鼻はそぎ落とされ、顔も骨格が変わるほどに殴られている。股間は・・・蹴り潰されとるな、あれは。背に一對の黒々とした翼があるため、かろうじて元天魔だとわかる。

体中を見て無傷であるところを探すのが難しいくらい痛めつけられた元天魔を打ち捨て、マタタビがこちらを振り返る。その瞬間に儼と八雲紫、何とか意識を保っていた天狗たちは全力で目をそらす。

「なぜ目をそらすんだお前さん方。・・・まあいいや龍神、桃一個取ってくれ」

「そのような奴に使うのはもったいないと思うのだがのう・・・」

しかたなく懷から桃を出し「うおい！いつの間に入れてたんだよ！」マタタビに放ってやる。桃を手を取ったマタタビは元天魔の口を無理やり開き　一本残らず齒が折られておった　その口に桃をねじ込み、そのまま肘まで腕を突っ込み無理やり飲み込ませた。

「　　ッ！！」

「　　ッ！！！」

すると芋虫はのた打ち回る。今のであごも外されたため血涙唾液糞尿まき散らしながら悶え続ける。今食わせた桃は言ってみれば生命力と神気の塊だ。その濃密な神気が今、腹の内から身を焼いているのだろう。

暴れまわる元天魔の頭を踏みつけ固定したマタタビが、懷から一枚の符を取り出しそれをまた口からねじりこむ。

「今のは空符か？何を生み出すものなのだ？」

「ん？ああ今のは『肉体を再構築するのに必要な力』を生み出すようにしておいた。発動には桃の神気を使うようにしてな。これから半日間、こいつには死も許されないよ」

・・・むごいのお。神気によって体は浄化され、されど桃の生命力と符によって生み出される力　この場合は再生力によって無理やり体は治療される。それをまた潰し、えぐり、切って削いでもぎ取る。これは俗にいう「死んだほうがまし」といったやつか。

グチャゴキベキヌチヨと不快な音を立て、元天魔の体から失われた器官が強制的に再生する。その再生すらおそらく想像を絶する苦痛だろう。

マタタビは一通り再生が終わった元天魔の頭を鷲掴み、己の目線まで持ち上げる。マタタビはこちらに背を向けとるため天魔の顔がこちらを向く形になるが、その眼はいまだに光をたたえている。・・・心が壊れることも『禁止』されたか。

「さあ元天魔、一応説明しておいてやる。これはお前の罪を裁いているわけではない。いくらオレが土地神でも偉そうに誰かの罪を裁くつもりは毛頭ないからな」

「お前が身に受けるのは、お前が罪もなき者たちに行ってきた理不尽な暴力。オレはそれを再現するだけ。よく言うだろう？」「やったらやり返される」ってさ」

「ッ！」

side マタタビ

「さて、あとは口から焼けた石を突っ込んで……よし、これでおしまいっ」と

いやあゝ、だいぶ時間がかっちゃったねえ。殺さずにやるのは結構難しい。

あれからしばらく撃って燃やしていたぶって埋めて裂いて壊して絞めてと色々やったから、オレの周囲は一面血だらけ肉片だらけ。すごく血なまぐさいです。

「いやいや元天魔お疲れさん、ようやく終わったよ」

「あ………あう………」

途中から声を出す気力もなくなったみたいだから発言を『許可』してあげたけど、もはやうめき声しか上げられないようだね。

何度潰したかわからない喉も再生してるはずだし、心も壊れてないはずだけどだいぶ摩耗しちゃったかな？もうまともな生活はできないかもね。

「じゃあこれはオレの個人的な暴力だ。九つの頭、一刀のもとに切り捨てる」

『くすきじ
九頭切』

右手の人差し指と中指を合わせて伸ばし、その指の先に小さな魔方阵を展開。さらにそこから真つ黒な妖力の刀を発生させる。

妖術を発動させた瞬間、いまだこつちを見ていた八雲のがビクツと体をはねさせる。ああ、そういえばこの妖術がトラウマの原因の一つだったっけか。

「お前はオレの背中を切りつけたからね。やり返させてもらっようよ」
ザクツ

「あつあゝ ああゝ ああゝあああ！！？」

九頭切でもって元天魔の背中をオレがやられたのと全く同じ太刀筋で切り裂いてやると、しばらく出ていなかった叫び声をあげのた打ち回る。その背中への傷はこれまでと違い癒えることはない。

「この刀は肉体のみでなく魂も切り裂く。その背中への傷はお前の魂

が癒えない限りふさがることはないよ。まあ、極楽浄土にでも行かないかぎり無理だと思っけどね」

「………うるさいのお。せつかく人が気持ちよく寝とるとい
うのに」

おお、ようやく起きやがったか龍神。そろそろ仕事の時間だから
起こそうと思ってたんだよ。

「龍神よ、お前さんたしか氷の大地の土地神やってたよな？ 繋げて
くんね？」

「氷の大地……ああそこか。まあその者達でも雪妖の工サには
なるかの」

オレはつま先で地面を二回叩き、龍神は両の掌を音を立ててあわ
せる。すると目の前に障子戸が現れる。

「それは……あの時の」

「ああ八雲の、一応教えてあげるよ。こいつは土地神同士が同意し
た場合にのみ生み出せる、互いの土地を直接つなぐ専用の通路さ。
『開け』」

通路があるのはオレの土地であるため、オレの命令により障子戸
は開く。白い空間の奥の障子戸は既に開いており、その先にはまた

白い空間……否、一面の白銀世界が広がっている。

「呼気すら凍り、あたり一面に冰雪があるにもかかわらずこの世界で最も乾燥した大地。妖怪の質も高いぜえ？」

島流しにはいい場所だろう。あっちの妖怪も餌が来たって喜ぶだろうしね。

「ああそうだ、彦山豊前坊とやら、天狗にとって背中羽って大切なものなのかい？」

「あ……ええ、はい。我ら烏天狗の羽は誇りの象徴であります……」

「それはよかった、今まで傷つけなかった意味があるってものさね。九頭切」
スパンッ

妖力刀を横に一閃。その一振りで元天魔、そして頭痛が収まった後も意識が無いふりをしてやり過ごそうとしていた子飼いの大天狗四匹の羽を根元から切り飛ばす。

「お前らの【誇り】も踏みにじってやるよ。これでもう失うものは本当にないだろうねえ」

激痛に悶える五匹の天狗。拷問はこれにて終了、あとは土地神としてこの山を穢した者たちへ宣告する。

「己が権力を用い私腹をこやし、他を貶める無粋な真似をした妖怪よ。オレはお前らがこの山にいることを『許さない』。今すぐ己の足で『出て行け』」

オレの命令を耳にした途端五匹の天狗は立ち上がり、自ら障子戸をぐぐり歩いていく。まあそうさせてるんだけどね。

大天狗どもは「悪いのはすべてこの男です！私は命令されただけなんです！」とか「許してください！これからは心を入れ替えますから！」とかほざいてるけど

「そいつに付いて散々いい思いをしてきたんだろう？最後まで一蓮托生で逝けばいいさ」

今更助けるはずがないでしょう。

「それじゃあ元天魔、最後に言っておきたいことはないかい？」

辞世の句を読むんなら三秒くらい覚えておいてやるよ。

「殺す・・・殺す！殺してやる！！俺をこんな目に合わせた報いを必ず受けさせてやる！！何年かかろうと貴様だけは必ず殺す！！」

「あ、そ。まあせいぜい頑張つてあがきなよ。『閉じろ』」
タンッ

子気味良い音を立てて障子戸が閉まり、奴らは完全にこの土地から消える。それからほどなくして障子戸も消滅しこの場にいるのはオレと龍神、八雲のに風守の、それと三人の天狗のみとなる。

「ふむ、風守のは失神してるし今日はお開きにするかね。天狗のお三方、連れて帰つてあげとくれ。ああと、明日になったら顔を出すように言っておいて」

ひどく疲れた様子の天狗たちはそろつてうなずき、風守のを背負つて山の上のほうへ飛んでいく。なんであんな憔悴してんだろ？

「龍神はどうせ泊まつてくつもりだろ？地下の倉庫は無事だろうから久々に酒盛りしようぜ。八雲のもどうだい？」

「・・・私は遠慮しておくわ。さすがにあれだけのものを見て飲む気にはならないもの・・・」

「あら残念。じゃあお前さんも明日また来とくれよ。いろいろ伝えたいことがあるから」

「ええ、わかったわ。．．．．．それでは龍神様、私はこれで失礼させていただきます．．．」

八雲のは龍神に向かって恭しく一礼したのち、スキマを開きその中に入っていく。だからなんであんなに疲れた顔してんの？

「にしても地下の倉庫はいいけど、地上は壊滅的だな。再建もあるし引き継ぎもあるし、しばらくはここに留まることになりそうだねえ」

「たまにはいいではないか。ここがお主の家なのだから少し腰を落ち着けるくらいしても罰は当たらんよ。それより酒の肴にまたお主の珍道中を聞かせい。今度はどこで何をやらかしたのだ？」

「珍道中とはひでえ言い草だなおい。まあいいや、この間東の大陸に行った時だけだな？．．．．．」

それでは皆様、
またの機会に。

十八歩目（後書き）

あまり需要がないと思うので、拷問タイムは可能な限り割愛いたしました。

好きな方もいるかもしれませんが、この作品はなるべくお気楽なものにしたいと思いますので・・・。

十九歩目（前書き）

あなざーさいどすとーりー？

十九歩目

side 縁（次期土地神 兼次期天魔）

皆様お初にお目にかかります。大天狗が一、鞍馬山僧正坊を務めさせていだいております風守 縁と申します。

寝ている最中に謎の声から「進行役よろしく！」と、謎の役割を仰せつかったためしばし私の視線で進行させていただきます。

今私がいるのは妖怪の山にある詰め所、その中でも大天狗専用となるここ天狗の山……。失礼しました、妖怪の山で山頂に二番目に近い屋敷の中にある、私に割り当てられた部屋です。そこに引かれた布団の上に横になっていました。

……。いつの間にここに帰ってきていたのでしょうか？えっと・
・寝起きのせいかな、いまいち現状がうまく認識できません。たしか
マタビ様 土地神様とお話しをしていたあたりまではよく
覚えているのですが……。

「うーんと？たしか私が次期土地神になることが決まって……………」

そうです、物凄い事態になってしまいました。なんと私がこの山の新しい土地神に任命されてしまったのです。

今の土地神であるマタタビ様から自分よりもこの土地に適しているとされたのですが、今考えてみると正直な話何かの冗談だったのではないかと思っています。

あ、えと、マタタビ様ですが私たちがこの山に来るよりも前からこの山を治めていた方のようです。

外見はだいたい私たち天狗と似通っていましたが、頭のとっぺんには三角の耳が付いていてお尻からは二本のしっぽが伸びていました。自分は猫又だと仰られていたので、きつとあれは猫のモノなのでしょう。猫という生き物がいるとの話は聞いたことがありますが、実際に見たのは初めてなのでもし許されるのなら触ってみたいです。

とても怖い目つきをしていましたが、なぜか私と話すときは目を閉じてしまわれていました。なぜなのでしょう？

そのマタタビ様はつい先日唐突に山に戻ってこられました。いつ戻ってきたかはわかりませんが、私があの方を初めて見たときはひどく弱った様子でした。着ている服は血汚れていましたし、薄暗くてよく見えませんでした。顔色も悪かったように思います。

私が執務室で割り振られた業務をこなしていると、唐突に目の前の景色が変わり見たこともない建物の中に他の大天狗の方々と共に立っていました。そこには私達のほかにマタタビ様と以前一度だけ

お会いした妖怪の賢者さん、そして天魔様がおられました。

突然マタビ様は刀を抜き高笑いしたかと思うと私たちに襲いかかってきました。・・・私はあの瞬間何が起きたのかよく覚えていません。気が付いたら私は他の方々と一緒に床に倒れていました。

私の目の前には一振りの刀が転がっていて、何が起きているのか、何をしているのかもわからぬまま先ほど自分に殺意を向けてきた相手　マタビ様の背中に刃を突き立てました。そこで記憶は途絶えています。

次に覚えているのは、今と同じこの部屋で全身の激痛に起こされたことです。救護班の子たちの話によると、突然周囲の木々をなぎ倒しながら私が物凄い勢いで飛んできたということです。他の方々も同様に各々の部屋で治療を受けていると聞きました。

私が九人の中で最も重症で、二日近く目を覚まさなかったとかとてもうなされていたとかで彼女達にはとても心配をかけてしまいました。今度お菓子でも差し入れてあげようと思います。

それからほどなくして、救護班の子から当分の絶対安静を懇願されている最中にまた唐突に周囲の景色が変わりました。

そこにいたのは前回のようになり天狗とマタビ様、妖怪の賢者さん。そして凜々しい表情をした男の子がいました。あ、いえ、男の子と言っても外見が若々しいというだけでその方は龍神様だったのですが。

ですが私は最初、他の方がいるのにまったく気が付きませんでした。それもマタタビ様とその後ろに生えていた大きな木　　花が咲いているのに同時に実もなっているという不思議な桃の木に目を奪われていたためです。

その木もマタタビ様も初めて見たはずなのに、なぜだかずっと昔から知っていたような懐かしい感じがして……しばらく体の痛みを忘れひたすらに見入ってしまいました。

するといつの間にか痛みを忘れているのではなく、本当に痛みが消えていることに気が付きました。どうやらマタタビ様が治療してくださったようなのですが、つい先ほど絶対安静を言い渡されたほどの怪我を瞬時に治せるとはさすがだと思います。

いつの間にもやら飯綱三郎さん　　大天狗の一であり、素早い飛翔と大太刀による一撃を得意とする方です　　がマタタビ様の足もとに尻もちをついていたので、結構長い間呆けてしまっていたようです。

その後マタタビ様は彦山豊前坊さん　　先々代天魔様のころより大天狗を務めている最古残の方です　　と穏やかに話していたのですが、天魔様が話を遮ったために怒ってしまわれました。とても怖かったです（主に目つきが）その妖力はとてもきれいで心地いいものだったためにまた呆けてしまいました。

そして怖い雰囲気のまま（主に目つきが）私に話しかけられたのですが、唐突に話しかけられて混乱してしまっただけのため最初の一二個の質問は何を答えたのかよく覚えていません。

それからは・・・マタタビ様が天魔様を蹴りつけたり天魔様がマタタビ様を刺したり龍神様が天魔様に殴り掛かったりと色々ありました。そのあとの会話が私にとってはとても重要でした。

そこで私はマタタビ様が土地神だということを知ったのです。幼少のころより先代様から、この山を治める神様のおかげで私たちは日々生きていけるのだと聞かされていました。

一も二もなくお礼を言っしまいました。私が喋っているうちにだんだんとマタタビ様の雰囲気は怖いものから暖かいものに変わっていったので、やはりあのお方は優しい方なのでしょう。なぜか目をつぶってしまったのですが。

その後の話の中で私が次期土地神となることが決まってしまう。土地との親和性が云々と言われてましたが、私はそこまで頭の回転が速いわけではないのでよく理解できませんでした。

ですが先代様からも「無駄に悩んで時間を浪費するよりも、とりあえず無茶でも前に進んでみなさい。貴女が動かなければ貴女の前には道はできません」と言われてきました。難しいことは後々考えることにして、自分のできる限りのことをやろうと思います！

それと、そのあとにも大事な話が合ったはずなのですが……
 ・なにか、なにかとても大切な……

⌈
•
•
•
•
•
•
!
!
⌋

そうだ……先代様が死んじゃったんだ。いや、違う、死
んじやってたんだ。

烏から天狗になり、身寄りのなかった私を育ててくれた母のよう
なお方。戦い方を教えてくれた師匠でもあり、私に大天狗という大
事な席を与えてくださった上司でもある。

命ある限り支えていこうと思った。この山を去ったと聞かされた
時も、再び会うまでにあの方に少しでも追いつけるようにと今にも
飛び出したくなる気持ちを抑え、日々の業務に励んだ。

でももう会うことはできない。死んでしまった。殺されてしまっ
た。

気が付くと、私は泣いていました。とても悲しくて悲しくて、声
をあげずにしばらく泣き続けました。

どのくらいの時間泣いていたのでしょうか。いえ、あ
まり時間は経ってないのかもしれませんが。だってまだ悲しみは消え

ていないのですから。

でもその悲しみよりもっと大きい感情
わきあがり、私は泣くのをやめていました。

憎しみが沸々と

「天魔」

敬愛すべき先代様を殺し、今の天魔の地位を我がものとした汚ら
わしき男。奴のことが頭に浮かび、これまで何も知らずその男に仕
えてきた自分がこの上なく無様に感じる。

「殺ス」

ただ心に芽生えた殺意に従い、布団をはねのけ飛び立とうとした
ところでふと、疑問を感じる。

私が先代様の死を知ったとき、目の前には意識のないあの男がい
た。ならなぜ私はあの男を殺した記憶がないのでしょうか？

まだ最後まで思い出せていない。自分が忘れたがっているような
部分がきつとあるはず。まずはそれを取り戻さなきゃ。

「えっと、マタビ様に止められて、自分にやらせてほしいと頼ま
れて……」

そう、あの男の処遇はマタビ様に一任したのです。なぜかそ
うするべきなのではないかと思ったのです。

そしてそれからとはたしか……マタビ様がそのお力

あの男を天魔じゃなくして……それから……それから……

……………!!!??

[illegible]

「どうなされました天魔様!？」

部屋の扉を勢い良く開け彦山豊前坊さんが飛び込んできましたが、今の私はそれどころではありません！

「頭が、頭がパーン！って！なかつ、中身が、中身が！！！」

マタビ様があの男の体を千切つては投げ千切つては投げ！もいでえぐつて切り裂いて、焼いて潰して引き裂いてええええええ！

「落ちていくのだされ！もうあれは終わったのです！！」

「止めて！止めてくださいマタタビ様！！私はなにも悪いことしま
せんからああああ！」

「大変見苦しいものをお見せしました！」

「いえ、落ち着かれたのなら何よりです」

あれからしばらくの間私は暴れていたらしく、部屋が酷い有り様になってしまいました。部屋だけでなく止めに入った彦山豊前坊さんも結構ボロボロです。・・・能力まで使って暴れてしまったみたいです。

「あの・・・大丈夫ですか？」

「問題ありませんのでご心配なさらずに」

壁に頭からめり込んでいる状態を見て心配するなと言われまして
も……………」

「それよりも天魔様こそ気分が悪かったりはしませんか？もしそう
ならすぐにでも救護の者を呼びますが」

「あ、いえ、大丈夫です……………ってええええ！？いや、なん
で私に天魔様って！？」

「覚えておられないのですか？」

お尻が……………もとい彦山豊前坊さんが呆れたような口調でしゃべ
りだす。

「土地神様により、あの男は天魔の位を失いました。その跡継ぎ、
九代目天魔として私どもは貴女に仕えることにしたのです」

「な、なんでそこで私なんですか！？」

「本来なら貴女が八代目天魔となるはずでした」

私から見えるのはお尻なので、なんともいえない微妙な光景なの
ですがどうも真剣な話のようです。

「それをあの男が横から入り込んだために、私たちは望んでもいない天魔のもとに仕えていたのです。これから七代目様の求めた天狗の新たな時代となるのです」

「七代目様が求めた・・・？」

「ええ！」

彦山豊・・・お尻さんが言っているのはいったいどういうことなのでしょう？まるで私が天魔になるのが昔から決まっていたみたいと言いますが・・・。

「おそらく今こう思っているでしょう。『まるで自分が天魔になるのが決まっていたようだ』と」

「は、はい」

「その通りなのです。七代目様があなたを見つけ育てていくうちに気づかれたのです。貴女の内には誰よりも大きな力が眠っていることに。すでにその頃から七代目様は天魔の継承を考えていました」

私に大きな力？大天狗の中で最も妖力の弱かった私にそんなものが・・・いえ、たしかマタビ様も言っておられました。私には封印が掛けられていると。もしかしたらそれが・・・？

彦山豊前坊さんの話を反芻していると、私はあるとても怖い想像をしてしまいました。それは七代目様が私を育ててくれたのは私に力があつたから、天魔にするためだけに私を育てたのではないかということ。

頭を振りその考えを追い出す。いったい私は何を考えているのだ。あの方が、たとえどのような悪漢であろうと笑顔で受け入れたあの方がそのようなことをするはずではないか。

この考えも私の都合のいいものなのかもしれない。でも、私の中ではあの方はいつまでも誰よりも暖かく、大きく、優しい。そんなお方なのだ。

「
のときなど七代目様は、・・・・・・・・・・ど
うなされました？」

「ひゃい！？い、いえ、なんでもありません！」

ひゃうう・・・また考え込んでしまいました・・・どうやらだ
いぶ話を聞き逃してしまつたみたいです・・・。

「ああ、そういえばまだ目が覚めてまだ間もないのでしたな。そんな最中に老いぼれの長話などされても頭に入られますまい」

「すみません・・・」

お気になさらずにと笑いながら彦山豊前坊さんが豪快に壁から頭を引き抜く、するとたちまち壁の穴がふさがっていきます。

以前から気になっていたのですがこの屋敷はいつたいどんな構造をしているのでしょうか？外から見るとそこまで大きくないのですが、実際に入ってみると山の天狗全員入れるのでは？と思えるほど広いです。今のように壁や床が傷付いても勝手に治ってしまいます。

もしかして此処もマタビ様の所有物なのでしょう？もしかそうならこのようなとんでもぶりも納得できてしまいます。

「む？そういえば伝え忘れるところでした」

部屋の戸に手をかけ外に出て行こうとした彦山豊前坊さんが、振り返りつつ口を開く。いったいなんでしょう？

「土地神様が「顔を出すように」と言っておられましたぞ」

「・・・・・・・・・・ぴ」

「ぴ？」

「ぴゃあああああああああああ！！？」

「如何なされました!？」

な、なんでそんな大切なことを今まで伝えてくれなかったんですか！何よりも優先すべきことじゃないですかそれ！！

「すぐに行ってきます!!！」

あわてて駆け寄ってきた彦山豊前坊さんの横をすり抜け、屋敷の中だということにも構わずに自らの能力

『大気を操る程度の能力』

を発動させ、自分が出せる最高速度で飛び立ちます。

「お待ちください！せめて御髪を……………」

後ろから何か声が聞こえてきた気がしますがそれどころではありません！今は急がなければ！！

大天狗詰め所の屋敷を飛び出して数分後、私は後悔することになります。

そう、私はマタビ様の屋敷の位置を知らなかったのです。

結果的に桃の花咲く屋敷を見つけられたのはそれから半刻近く後でした。

「やっと・・・見つけ・・・ました・・・!!」

初めの勢いのまま山の回りを東奔西走、気が付いたら海にまで行ってしまいました。なぜ妖怪の山にある屋敷を探すのにあんな遠くまで行ってしまったのでしょうか。

詰め所を飛び出した時はようやく空が白み始めたところだったので、今は完全にお日様が姿を見せています。・・・本当になぜ同じ山にある場所を探すのにこんなに時間をかけてしまったのでしょうか・・・。

マタタビ様の屋敷の上空には、先日もお会いした妖怪の賢者さんがいました。この方もマタタビ様に呼び出されたのでしょうか？

「・・・？あら、風守縁。ずいぶん早いわんぷっ！？」

「あ、おはようございます妖怪の賢者さん どうかしましたか？」

私がいるのに気が付いた妖怪の賢者さんが振り返りながら話しか

けてきたのですが、途中で扇子で顔を隠しながら目線をそらしてしまいました。いったい何があったのでしょうか？

「あなた・・・あた、頭が・・・ぷっ」

「え？頭・・・・・・・・ひゃあああああ！？」

目を覚ました直後に飛び出し、さらに半刻も全力で空を飛び続けた私の髪の毛はあっちへはね、こっちへ捻じれ、おおよそ外で見せていい状態ではありませんでした。

「み、見なかったことにしてください！！」

『大気を操る程度の能力』を使って頭の周囲の空気を操作し、少しでもまともになってくれるように必死に髪を抑えつけますが全く治りません。・・・いまほど自分のこの癖っ毛が恨めしく思ったことはありません。

「貴女も女ならもう少し外見に気をぷふっ、失礼、気を使ったほうがいいわよ？」

「ひゃうう、すみません・・・」

笑いをこらえた様子の妖怪の賢者さんがどこからか櫛を取り出し、それで髪を梳いてくださいました。お気持ちは大変うれしいのです

が

「……ずいぶん強情な髪の毛してるわね」

「すみません……」

とても残念なことにその程度で戻ってくれるほど私の寝癖はやわじゃありませんでした。

……穴があったら入りたいというのはこのような心境を指すのでしょうか。

「まったく、女性二人を呼び出しておきながらあの猫又はいつまでやってるのかしら」

妖怪の賢者さんは私の髪を梳きながらぶつぶつと言っています。いつまでやってる？ということでしょう？

ふと自分の眼下、屋敷の付近へ視線を向けてみると、そこにマタタビ様と龍神様がいました。

なぜか浴衣姿のお二人は戦っておいででした。お互い無手の徒手空拳で、その間合いは何をしようと必中になるのではないかと思え

るほどに近いです。

耳をすませてみると風を切る音が聞こえます。．．．いえ、風を切る音しか聞こえません。この上なく近い間合いで腕を足を振るっているにもかかわらず、お二方ともすべての攻撃を躲けているのです。それは防御としての受け（．．）を否定するような行動に見えます。

体格で劣るにもかかわらず、龍神様の攻撃は一撃一撃がマタタビ様のものより力強く感じます。それは触れようものなら全てをなぎ倒すような激しい攻撃です。

対してマタタビ様はあまり拳を作らず、手刀・足刀・貫手などひたすら早く鋭い打撃を放っています。いえ、あれはもはや打撃ではなく本当の斬撃のようです。

龍神様がマタタビ様の脇腹へ向けて横蹴りを放てば、それを地に伏せながら躲し体制を戻しざまに足と胴を貫かんと刃物と化した両手を放ち。

貫手を躲した龍神様への追撃にマタタビ様が喉元へ足刀を放てば、体を軽くひねり躲しざまに裏拳を放つ。

その攻撃はおそらくすべてが一撃必殺の威力を持っているのです。離れた位置で見えていても鬼気迫る様子が伝わってきます。

「もうすでに四半刻ほど続いているのよ、あれ」

「そんなにですか!？」

一瞬たりとも止まることなく互いにひたすら攻め続ける戦い。否、あれはもはや殺し合いと言っても過言ではないでしょう。正直見るだけで肝が冷えます。ですがそれ以上に

「
綺麗です」

武の頂いたadakiとはこのような戦いを言うのでしょうか。動きの一つ一つが舞のように滑らかで無駄がなく、まるで何かの舞台を見ているようです。

そんな感想を抱いていると、唐突にお二人の間合いが離れました。マタビ様は拳を作り、構える。龍神様もそれに答えるように、今までになく強く拳を引きます。

両者が小さな声で一言二言呟いたかと思うと

バキーーーーー！！

拳同士が立てるとは思えない音を立て、正拳同士がいつの間にかぶつかり合っていました。

どうやら軍配は龍神様に上がったようです。龍神様は再び構えましたが、マタビ様は両手を挙げ降参の意を示しました。

最後にお互い一礼をし、どうやら終わりにしたようです。．．．あれほど激しい戦いをしていたのに、なぜ浴衣が全く乱れていないのでしょうか。

「ようやく終わったみたいね．．．。こっちは気が付いてなさそうだから下に降りましょう」

待ちくたびれたと言った様子で妖怪の賢者さんが提案してきたので、それに同意して下に降ります。できればこのような髪の状態で降りたくはないのですが。

「いやいや、その必要はないさ。すっかり待たせちゃったみたいだねえ」

「「!?!」」

いつの間にか目の前にマタタビ様が、あれ？さっきまで下にいたはずなのに。今も龍神様は下にいる．．．え？消えた

「さすがにこんな早朝に来るとは思わなんだ、申し訳なぶふう！」

マタタビ様と同じように唐突に目の前に龍神様が現れたかと思うと、私の頭を見たたん吹き出してしまいました。．．．．．うう、やっぱり笑われてしまいます。

「おい龍神、さすがに乙女の髪型を見て笑うのはいただけな あ、ごめん無理。にやはっ、にやはははははははははははははははははなめこっ!？」

最初は普通に話していたマタタビ様でしたが、我慢の限界を迎えたようでも爆笑し始めてしまいました。そしてそこに妖怪の賢者さんの弾幕が顔面に命中し、今度は奇声をあげながら悶えています。・
・若干いい気味だと思ったのは秘密です。

「あなたが時間を指定しなかったから朝早くに来てあげたというのにその対応は失礼なんじゃないかしら？」

「おゝいてえ。それでも日の出すぐに来るのは予定外だったの。まあ確かにオレにも責はあるかな」

そう言いつつ一瞬私のほうに顔を向け、肩を震わせつつまたそろすマタタビ様。・・・なにか黒い感情が湧き上がってきました。

「仕方ないねえ。たしか倉庫に女性用のもあったはずだからっ」と

「？」

マタタビ様が一瞬視線を（と言っても目を開いてないので雰囲気ですが）中空にやると、何か妙な力の流れを感じました。いったい

なにを・・・？

「二人とも温泉に入っていきなさいな」

「は？」「え？」

「風守のはたぶん起きてすぐに来たんだろ？風呂入って一回さっぱりしてきなよ、ついでに八雲のも。というわけで『転送』」

唐突に風景が変わるのはすでに三度目になります。今回は・・・
・脱衣所？ここもマタビ様の屋敷の中なのでしょう。

しばし茫然としていた私と妖怪の賢者さんですが、気を持ち直した妖怪の賢者さんが不機嫌そうに目を細めつつマタビ様に話しかけます。

「ちょっと待ちなさいマタビ。この子はまだしも私はお風呂に入っているほど暇ではないのだけれど？」

「箱庭の場所のめども立ってないのに忙しいはずもないだろう？こつちも思ってたより早く来られて準備が終わってないんだ、時間稼ぎぐらいさせてくれっての」

箱庭・・・？どうやら私とは別途のお話があるようです。

「私もわざわざお風呂を借りるわけには・・・」

「いや、その頭は何とかしてくれ。正直な話、それを直視しながら会話するのは難しい」

「ひゃう・・・」

「浴衣や手ぬぐいなどはそこに出しておいた。風呂敷もあるから脱いだ服とかはそれに包んでおくといい。あとはオレが出たらその札を使用中にしといてくれれば、オレも含めて進入禁止の結界が張られるから安心してはいつてくれ。じゃ、準備があるから」

そう言つてマタタビ様は出て行つてしまわれました。あとにはなんとなく微妙な雰囲気の私と妖怪の賢者さんの二人が残ります。

「とりあえず・・・お風呂に入っちゃいます？」

「はあ・・・そうね、せっかくだしそうしましょうか」

どうも妖怪の賢者さんはマタタビさんとの会話が苦手なようで、すでに疲れた様子でした。

しかし天狗一の温泉通を自称している私は、すでに内心ウキウキしながら服を脱ぎ始めます。あ、これからしばらくは放送禁止でお願いします。それでは

妖怪少女入浴中・・・

「なんだか満足してしまっている自分がいるのが悔しいわね・・・」
「あはは・・・」

温泉を満喫した私と紫さん（入浴中にいろいろお話して親しくなり、名前で呼んで構わないと言われました）は今、脱衣所で浴衣に着替え終わったところです。

「まさか露天風呂があるとは思わなかったわ」

「そうですね、普通ならのぞきの心配があるんですが、結界の効果で何かが近づく気配は全くありませんでしたし」

「それとあの蒸し風呂？と言ったらいいのかしら。あれはなかなか癖になるわね」

「私はあの泡が出るお風呂が気に入りました」

絶対このお風呂は個人で所有する規模のものではないと思います。そこらのお家よりも大きいお風呂なんて初めて見ました。

「さて、上がったはいいいけどこれからどこへ向かえばいいのかしら。風呂上りにあまりうるつきたくはないわよね」

脱衣所の出入り口に手をかけた紫さんが、来た時とは違いどこか上機嫌な様子で話しかけてきます。入浴中にどこからともなくお酒が差し入れられたのでそのせいでしょうか？とてもおいしいお酒でした。

「もしかしたらマタタビさんが何か書付でも残しておいてくれるんじゃないでしょうか」

「ご明察。客をもてなすのだからそれぐらいはやってあるよ」

外に出た私たちを出迎えたのはマタタビ様、ではなく小さな動物？でした。……これが猫なのでしょうか？すごく可愛らしいです。

黒くて、小さくて、なんというかこう……撫でまわしたくなるような姿をしています。

「あら、準備がいいじゃない。それで？私たちはこれからどこへ行けばいいのかしら」

「本体のほうはまだ作業中だからね、とりあえず客間へお通しするよ。風守のもそれでいいかい？」

「あ、はい、大丈夫です」

私の返事を聞くと猫さんはくるりと踵を返し、原型の残っている屋敷の部分へ歩き出していきました。

マタタビ様の屋敷の道場付近はボロボロですが、どうやら今いるのはその反対側らしくそこまで傷付いた様子はありません。

「本体・・・ということは、あなたは何らかの術で作った分身のようなものと考えていいのかしら」

「そうさ。『万獣^{まんじゅう}』って妖術に自分の意識の一部を転写してる、まあお前さんの使う式に近いものだと思ってもらえばいいよ。ああ、屋敷の中に結構掃除中の奴がいるけど、これと同じモノだから気にしないでいいよ」

猫さんの言うとおり、屋敷の中には大小さまざまな動物が雑巾や箒を持って掃除をしていました。二本足で立ちながらはたきを持っている犬や、前足で雑巾をおさえ駆け回る狐なんかもいます。

これをすべて妖術で操作しているのでしょうか？だとしたらこの術を教わりたいものです。すごく便利そうに思いますが、きっと複雑な術でしょうから私には無理でしょうね・・・。

「いやはや、さすがに一万年近く留守にしてると埃がたまってるね。とりあえずすぐに使いそうなところは優先してやったけど、それでもまだだいぶかかりそうだよ。あ、こっちなさね」

大天狗詰め所と同じように外見のわりに奇妙に長い廊下をしばらく歩き、他の部屋よりもきれいな襖の前で猫さんが立ち止まりました。

「一万年留守にしていたって・・・マタビ様はいつたいおいくつなんですか？」

「ん？もう覚えてないねえ。一億超えたぐらいまでは数えてたけ

キュ〜 どね〜。にやはは、元気な腹の虫だねえ」

「も、申しわけありません……。起きてから何も食べていないものでして……」

なぜ！今！お腹がなってしまうのでしょうか！確かに温泉に入っているときからお腹がすいたとは思っていましたが、なぜマタタビ様が喋っているときに自己主張をしてしまうのですかこのお腹は！

……。今、一億がどうか聞こえた気がします……。まさか一億年以上生きてるとかそんなことはありませんよね……？

己の痴態に赤面する私を見る猫さんの表情の変化はよくわかりませんが、なんだか苦笑しつつも安心しているような感じがしました。

「こつちとしては準備が無駄にならずありがたいよ。まあとりあえず入んなさいな」

「？ はい失礼しま　　！」

「あら、なかなか手が込んでるじゃない」

猫さんがしつぽで襖をあけた先には、畳敷きの座敷がありました。そして部屋のある卓の上にはおそらく二名分と思しき朝食が並べてあります。……すごく、豪勢です。

「髪すら整えずに来るぐらいだからね。朝飯も食ってないだろうと思っただから用意しておいたよ。ああ、ついでに八雲の分もよそつておいたけどいらなかったかい？」

「いえ、ありがたくいただいております。・・・毒なんか入れてないでしょうね？」

「そんなもんいれねえよ。食への冒瀆は最も無粋な所業じゃねえか。魂に誓って保障するよ。ああほら風守の、呆けてないで座った座った」

「あつ、は、はい。失礼します」

あれ？私って何をしにここに来たんですたっけ？お風呂をいただいてさらにご飯までご馳走になるわけには・・・。

そんな私の心境を見透かすように猫さんは溜息をつきながら諭すように話しかけてきました。

「はぁ・・・なにを遠慮してんのやら。こちらとしては客人への最低限の礼節を持ったおもてなしをしてるつもりなんだけどねえ。もう少し気楽にしてくれて構わないよ」

かといってここまでしてもらっては・・・

「第一これから短くない付き合いになるんだ、そうオレに対して畏

まる必要もないさね」

マタタビ様・・・今ここにいるのはご本人ではありませんが、やはりこの方は優しい御方だと思います。

マタタビ様にとっては私など吹けば飛ぶような存在なのでしょう。それでもこの方は私を見下さず、対等に扱おうとしてくださっています。民を道具のようなものとしか考えていなかったあの男の元にしばらく仕えていた私にとっては、この扱いがありがたいものであるとともに恐れ多いものを感じてしまいます。

「ほれほれ、食べた食べた。せつかく風呂上りの時間を予想して熱々になるように調節しておいたんだ、冷める前に食べておくれよ」

「・・・はい、ありがとうございます！」

ですが今は久しぶりに感じる胸の内の暖かさとともに、この美味しそうなご飯を堪能させていただくとします！

「（これから二三つらい思いをさせるんだ、少しぐらいいい思いさせてあげないとつり合わないだろうよ）」

「・・・？ 何かおっしゃられましたか？」

「いや、何も言っていないよ。さあさあ！今日の主菜は今しがたとつてきた川魚の香草焼きだ！おかわりも用意してあるからたと食

な！」

「はい！」

いつの間にかちゃっかり食べ始めていた紫さんの向かいに座り、私も食べ始めることとします！・・・え？進行役はここまでいいよ・・・ですか？

どうやら私の視点はここでお終いのようです。短い時間でしたがお付き合いいただき、まことにありがとうございました！それではまたの機会に。

こんな感じでよかったのでしょうか？・・・あ、

問題ないですか、わかりました。

それでは両手を合わせて。

「いただきます！」

十九歩目（後書き）

この話、ぶっちゃけ無くて問題なかったりする気が・・・。

でも載せてしまいました。

女性視点は書きにくいです。

ご指南ご指摘ありましたらよろしく願いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8733r/>

東方粹猫録

2011年11月20日01時16分発行